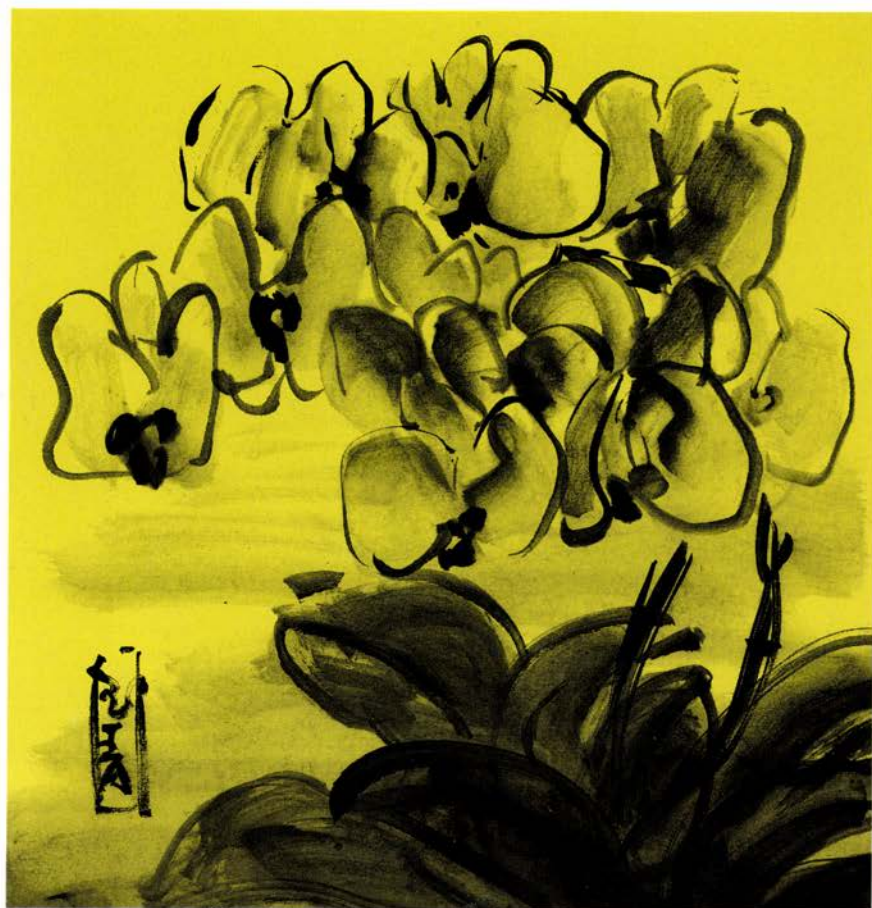


川柳塔

創刊大正十三年
通卷八〇七号



No. 807

八月号

白川協加盟

西宮北口川柳会20周年
黒川紫香会長米寿祝賀

後援 川柳塔社

本号から本文末尾に投句用紙を添付する
とともに、「川柳塔」「水煙抄」ともに出句
数は8句とします。10月号掲載分から必ず
この用紙に記入して投句をお願いします。

ビールのお粥

西尾 栗

姫路の五軒邸の旧友からハガキが来た。ビールの旨い時季になった、ビールのビールで泳ぎたい。そんなところがあつたら、報せてくれ。そんなところがあれば俺が先にゆく、と返事をやった。

冷えたビールの最初のコップ一杯はナント旨いことか、ご婦人達の激賞するビールの旨さである。私は長年、日本酒党だったが、先年、脳血栓を二回やってから、主治医が、ビールの方が良いからと言ったので、ビール党になった。

面白い話がある。ドイツでは古代から病人にビール粥を食べさせて、体力をつけたとか。イギリスでは疫病の流行をビールをのんで予防したとか。フランスではビールを液体のパンと呼んで、その成分を明確に分析した証明を出したという

ことがある。

原料は麦芽だから、ビタミンB群が豊富に含まれていることは自明のこととして、吸収されやすいミネラルや蛋白質の高カロリー源となるアルコール、消化器の活動を活発にするホップの成分や炭酸ガス、これらが効率よく作用し合つて体力や氣力を増進させ、病氣の回復まで早めることが、学術的にも証明されているというのだから、これはもう栄養食品である。

少しぐらい飲めという医者の方へゆき

栗

孫娘の婿はビール党で、毎晩、大瓶三本をあけて飯を食べない。そう言えば私も暑い故か、ビールをのんで、飯を食べない。妻は叱るが、結構瘦せないし、元気だ。

年寄ると風邪ひかない、ころばない、のみ過ぎない。フランクリンの教訓に、「酒の害あるにあらず、泥酔する人の罪なり」というのがある。「酒は人間その

ものである」、これはボードレールの言葉だが、私のビール瓶には、いつも「あなたの健康を保つために楽しくビールをのみましよう」「小さなことでも嬉しがろう」と書いてあると思つてゐる。

「酒は朋友の徳あり」と曾我物語にも出ている。ビールを飲むことで、心がやすらかに、あたたく、まんまるになつていくことは、ビールの栄養素である、蛋白質や炭水化物、ビタミン、カルシウム、カリウム、ミネラルなどがバランスよく体内に完全吸収されるためである。「ゆりかごから墓場まで、ただ一つビールだけが真実だ」とドイツの古諺がある。ビールは、のむほどに氣宇が大きくなる。命がリフレッシュする、感性がシャープになる。我が塔社の理事長の奥様も大のビール党である。この原稿を書いている部屋の欄間に、皆のんでるぞビールが散るぞ夏という路郎の扁額がかかっている。ビール万歳、万歳。



座右の句

ぬぎ捨ててうちが一番よいという

私の句

勲章をつけて他人の顔になる

(水府)

寺田 甚一

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ビールのお粥

西尾 葉 (1)

インスタント坊主

東野 大八 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選 (4)

自選集

東野 大八 (42)

川柳の群像 草刈蒼之助

東野 大八 (46)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十二丁)

橘 高 薫風 (48)

大空のこころ (44)

黒川 紫香選 (41)

水煙抄

田 中 正坊 (52)

秀句鑑賞

同人吟

井上柳五郎 (73)

銀河系

水煙抄

河内天笑選 (74)

茴香の花

八木千代選 (78)

インスタント坊主

東野 大八

うちの親戚で法事があつた。



そのあと般若湯が出て、横にいる和尚が「酒はコッブにしましょうや」というので、よからうと当方も異存はない。

「その片腕は、軍隊でしたな」

「左様 何度も死に損った」

「わしも兵隊で二度おしやかになりかけましてな。あの世は悪くないところですね」

「御商売柄、いい御体験でしたな。仰せの通り彼岸はハスの花咲くパラダイスで……」

と当方は、相手は沙門とみて適当にウマを合わす。大きくうなずいた白頭のこの丸い頭、やがてしばらくしてその憧れの極楽浄土へ昇天してしまつた。

この和尚には、仏思めでたく四人の息子あり、娑婆のならわしならその後継ぎに不足はないが、何分、生家は抹香臭い田舎の禅寺。すでに成人して四人ともサラリーマン暮し。一同揃って尻込みしたが、結局、檀家一同の

「北」……………森川まさお選……………(80)

一路集「大事」……………黒田能子選……………(80)

「浴びる」……………阿萬萬的選……………(81)

初歩教室「虫」……………吉岡美房……………(82)

各地柳壇(佳句地十選／井上直次)……………(84)

■句会だより 八尾市民川柳会……………宮崎シマ子……………(96)

■エッセー「長女 二女」……………小島蘭幸……………(97)

隠岐の風光と史跡訪ねて―山陰で川柳塔社勉強会を開催……………西口いわる・高須賀金太・八木千代……………(98)

銀髪燦々……………橘高薫風……………(101)

七月本社句会……………(102)

柳界展望……………(106)

神谷凡九郎氏を偲ぶ……………西田柳宏子……………(107)

八月各地句会案内……………(111)

■編集後記……………(112)

座右の句

てんと虫ここにも小さい輪島塗

私の句

老化する五官の中で肥える舌

(薫風)

中田純次

懇願・強請もあつて長男坊に因果の出目が回った。

さてこの長男、名古屋はコカコーラの店員である。それまで英文字入りの帽子作業服も派手やかに、よく近所まで威勢よくコーラ入りのカートンを配って歩いた身だ。それがにわかに、思つてもみない墨染めの衣に早変わり。それと決まるや、大いにテレながらしかつめらしし、数珠を首首にしての檀家回り。

うちへもやつてきてベコベコしながら「何分、インスタント坊主で……」

と挨拶し、コーラ一打を置いていった。

その当方は、終戦直後、四国の古寺の位牌堂で新妻とともに八カ月も居候した体験者。コーラ坊主よりは二、三枚この道ではうわて。

「そもそも仏道は大乗、小乗より成り、その宗門は十三宗五十八派あり、おわかりか」とむかしのおつさまの受け売りをひけらかす部落切つてのイッコク親爺。この山門前のニガテ爺さまもやがて寄る年波に勝てず、今では盆の年寄りのお布施が十円玉だとか、山門の高収入源である居士院号料はなんばにすべエの、内輪の相談に乗るほどの変りよう。この変化ぶりは、結局この和尚からコーラ臭い「喝！」の引導を受ける身と思ひ定めたことにはかならぬ。だが、果してそれでこの身が成仏できるかどうかは全く別の話だ。

川柳塔

西尾 栗選

寝屋川市 柴田 英壬子

モジリアニの項の頁が現れて（没法子北京を手にして）

無知だった頃のこわさを読む一気

満洲は楽土 日に夜に伸びる唄

迎春花 甘い映画を観たことも

没法子むかしは物を思わざり

生き甲斐と言う風船を多く持つ

松原市 小池 しげお

どうしても妻とは合わぬ節回し

葱坊主お前もお世辞言えないか

敵よりも味方がふえてきた軒

鳩尾のあたりへ落とす女の目

母恋しらムネの玉を鳴らすなり

驚いたわりに少ないお香奠

藤井寺市 吉岡 美房

笹舟に即身仏を願う蟻

真っ直ぐに立ってあやめの心意気

紫陽花の中で焼香順を待つ

紫陽花の時効 梅雨明け待っている

昼のバス初夏の美人と乗り合わす

地球儀をどう回しても核の棘

米子市 林

荒介

さざ波も夏の陽射しに輝いた

輪を作りみんなで楽にしてあげる

樅の樹は自分の位置をゆずらない

疵口が乾かないのでポストまでの旅

ひた走るブルートレーンに朝が来る

麦とろろ父との距離が縮まった

米子市 林

瑞枝

運はいろいろ宇宙へ飛んでいくメダカ

抜け殻になるは嫌だな 嫁さんに

狡いことしたね 鏡の奥が言う

遊牧民に今も謎めく歌がある

大家族 犬だつて気兼ねするらしい

どの街角も福祉の花が咲いている

島根県 堀江 正朗

雑草のみち蝶といく妻と行く

深呼吸 闇のくらしの疲れ捨て

見えぬから色にこだわる恥ずかしさ

涙もろくなつて八十路のせいにする

なぜ泣くの間われて答え出ぬ涙
思いきり不満は妻にだけぶつけ

米子市

政岡 日枝子

切れそうで切れない 母からの電話
絆切る とんだ間違ひ考える

蝶乱舞 きつとこの樹はお前の家
渦は時々 魚にいたずらして遊ぶ

花菖蒲 お寺の鐘によく似合う
淋しくないが手の鳴る方へ寄っていく

和歌山市

木本 朱夏

おもいきり抱きしめられてからの闇
相見でのいよいよ重き十字架よ

あいアイ愛ひとり芝居をくり返す
笹百合が匂う慕情を募らせて

愛は深くてジェラシーという副作用
時に不良中年ごっこなどいかが

大阪市

西出 楓楽

私対わたし攻防戦の続く夏
夫婦喧嘩できる情熱大切に

頬杖で詩囊発酵待っている
耐えてると誰も思っていてくれぬ

素うどんが好きな男で小うるさい
孫できてから地球大事にしています

大阪市

本間 満津子

アーケードすてきな日傘じゃまになり

親戚になるかもしれぬ初対面

四角なふろしき なに包んでも優しゅうて

睡眠薬飲まねば眠れぬほど嬉し

おおきに おおきに それで通じる大阪弁

やれやれと幸せ呆けになるまいぞ

弘前市 佐治 千加子

チベットの空に経詠む風の幡

砂曼荼羅 砂のみ仏 砂の経

風葬のわが言葉載せ 柳絮とぶ

川渡る蛇ひそやかに輝けり

自動ドアわが負うものを断つ如く

一本道 すみれ野仏かきろいて

米子市 金山 夕子

浪花の色に出逢う小春は熱くなる

そちら側こちら側にもあるルール

ある出逢い波の音しか聞こえない

配られるお茶わたしの前で切れました

都合のいい女になって謙虚なり

六十歳群れて歩くはお断り

竹原市 小島 蘭幸

美しく見える日もある十五歳

散歩には隣の犬を連れて行く

金魚が死んで淋しくなった風鈴よ

みんないい顔 あやめ祭りが雨になる

好きな女優のセリフが耳にある 眠る

豊中市 田中正坊

蟬しぐれ 記憶の底にある軍歌
童謡に軍歌ナツメロ 父のうた
ペン捨てて剣とりしより五十年
くちなしに老いのいのちを摸られ
万歩計ノルマ稼いでいる散歩

倉敷市 小野克枝

浮き草もやがては岸に辿りつき
画用紙のわたし可愛い花になる
やけどには触れずたつぷり盛る茶碗
漬物が一番好きな箸二つ
背水の陣でふるさと出た螢

松原市 玉置重人

Vサインそんなに軽いものじゃない
納経の風ありがたしにぎりめし
停止線心得ている守備範囲
鬼の面はがゆいことが多すぎる
夫婦箸ケンカの火種たんとある

奈良市 宮口笛生

老眼鏡 妻も私も歳を取り
赤い顔してる匂もしています
インスタントたまにはうまい妻の留守
冷や奴半分残す昼一人
二三匹 目刺しを焼いて一人酒

堺市 楊井二南

持ち前のセンスが年を意識する
聞き耳を立てて本音を確かめる
過去形で綴れば罪の意識無し
いじめとは群集心理のなせる業
棟続きだから修理に事欠く

下関市 石川侃流洞

長生きの血筋に百の夢がある
死んでも御恩忘れませんとそれつきり
五十年ドームのうめき水ほしや
休め休めと会社督促して困る
落とし蓋コトコト罪が煮えつまる

松江市 柳楽鶴丸

三周年 夫婦恋愛も板につき
夫婦の会話にいらぬオブラート
イエスノーはつきり言える無位無冠
ボトルとの別れが今日は辛かった
毒に何故 母の文字が入っている

松江市 舟木与根一

休耕地小走りに行く五月闇
歟だこで泥臭くなる一行詩
幸せと言うから関白つづけてる
ポチだけは粗大ゴミと思わない
古希越して内科はいつそ疲れます

今治市 矢野佳雲

塗り絵に慣れて自分で引ける線がない
変り身の速さで雲は勝負する

親だけが聞く宿題のページ数

その昔 伏字のともフリーパス

押収の手帳にあつた頭文字

堺市 高橋千万子

真実の一つを消した多数決

輪の中で一人の動き目立ちすぎ

但し書き上手に軸をぬいてあり

逃げ口上うまい人ほど出世する

御意見をどうぞと渦に引き込まれ

豊中市 安藤寿美子

タイ米に気の毒 私よばれます

ジャスミンの香る日生れ茉莉子という

生れたて祈るところで抱き上げる

乳さがすヒトの児猫の仔生れたて

死にそうな暗さで梅雨の五日月

東大阪市 森下愛論

生きているリズムで叩く木魚の音

酒欲しい女が欲しいとくだを巻く

齢のこと言うなどホイホイついて行き

逆光で見るホステスは美しい

法則に添ってイビキが先に眠る

伊丹市 桧谷寿馬

生きている特権 遺言考える
手配書の中の一人は私かも

一日一善 外科医は消毒水替える

柩より大きいベッドの縦と横

無憂華をあそかと読むと知るホーム

奈良市 天正千梢

泣いてると伝えて下さい阿弥陀さま

憂愁の乱れしころ経を読み

禅僧のいち言 預かりものですよ

甘い考えで広い道を歩きすぎ

近視眼 百歩譲ってなどと言ひ

笠岡市 松本忠三

断りの文句は妻に任せとき

じいちゃんのおみくじ恋愛吉と出る

老夫婦まだ外米は食べてない

七十の夫婦やったりやられたり

割勘の酒で調子に乗ってます

島根県 西村早苗

ひさかたの雨なり美酒に酔う眠り

泣きばくろが二つ女がよく笑う

その頃の若さがふつとほたる狩り

帽子斜めに真夏の貌かくす

逢えぬ夜も源氏はたるは闇に舞う

羽曳野市 榎本吐来

尼崎市 春城 武庫坊

やけ酒がいつかロマンの中にいる

励ましを主治医のカルテから貰う

時計進んでいると五分を引き止める

服を選ぶ妻六十の貌でなし

傲岸と謙虚をバツジ使い分け

倉敷市 田辺 灸六

懲らしめを修業の糧としてもらい

これからも歩き続けるかたつむり

一病息災 歩幅合せる金婚譜

老いてなお指がもの言う農作業

義理堅いお方に少しある遠慮

島根県 堀江 芳子

静寂の恐さ耳鳴り輪をかける

友達になつて仔犬も話しかけ

戦盲といちにちずつの鬼ごっこ

嬉しい日 風の言葉もあたたかい

いまさらに何を焦ろう夫婦箸

寝屋川市 江口 度

竹の子に晩器大成なんてない

絶滅をしそうになると騒ぎだす

プロポーズ一気に丘をかけのぼる

ガクアジサイ線香花火手土産に

レイコーかホットか迷う曇り空

人間の弱さ並ばず占い師

浮き沈み耐えて峻しい道を往く

青春の夢のかけらがまだ残る

丸い言葉を用意してると晴れてくる

生きているのが下手でいつでも深呼吸

尼崎市 春城 年代

同じ刻 喉の渴きを知る夫婦

眼も耳もおぼろ夫婦で解り合う

錠剤の青に守られ深い闇

花盗人と呼ばれることをためらわず

カタカナを覚え切れない花屋の花

島根県 小砂 白汀

長生きのおかげ外米食べ比べ

定置網 密航船を生け捕りに

今日もまた満員 病院依存症

ハンドルを孫に任せて眠る贅

成らずともせめて汚名を残すまじ

富山市 舟渡 杏花

湧水を掴む 笑いが止らない

生返事の男を待っている疲れ

あざやかに刺客に水をあけられる

臆面もなく何年枯木にぶらさがる

白羽の矢 鬼も仏も眼をさます

奈良県 田中 紀美代

一本の電話でみどり浴びに行く

坊さんがもう駄目らしい噂聞く

タマの暇やること多くて先ず眠る

家事万端脱線しながら完了す

憎しみを込めてゴキブリ叩かれる

砂川市 大橋 政良

弱点を煽る遠吠えしか出来ぬ

五十年振った尻尾の裏話

この街で死ぬ損得を考える

化けの皮剥げる嘘だが手を切れぬ

開いても閉じてても過去の匂う傘

松山市 白石 春嶺

一生を恩に着ますと借りたまま

ふるさとを渡す無念のダムに判

高浪が来ても離れぬ夫婦岩

お七夜を祝う主役がよく眠り

一杯は下戸も飲み干す宿浴衣

熊本市 永田 俊子

すたれゆく敬語をなげく五つ紋

無視された雑魚が一票ちらつかせ

君子危うきに近寄らず皆他人

言い勝ってきたが心は負けている

噴水の散華かなしい同士討ち

大阪市 河井 庸佑

待つことの出来る余裕を身に付ける

儲けにはならぬが努力惜しまない

何よりも怖い無欲という相手

よく聞けと神は二つの耳を付け

取り越し苦労こんな自分が嫌になる

加古川市 吐田 公一

紫陽花の彩こぼれてる雨上がり

笹舟の流れて遠きもの想い

娘や孫が帰る飛行機無事であれ

長らえて恥多きこと悔いるのみ

いい夢を見させてくれたハンモック

柳井市 弘津 柳慶

華やかな夢そつとそつと胸に秘め

姑に嫁剛球を投げかえし

一対一 油の乗った応援歌

造花には温度計は無視される

母はいつもそつとかくれて涙ぐみ

仙台市 川村 映輝

先ず健康やる気満々よい目覚め

スニーカー履けば生氣取り戻す

性は悪 欲の深いのは人間

就職という結婚は過去のもの

忘れたら思い出す策アイウエオ

名古屋市 越村 枯梢

まだ八十と言って冷たい風のなか
老い痴れて日ごと造花に水をやる
いのち一枚削って身軽になってゆく
人生街道 最後の峠越えました
散り際を忘れた花の気うつ症

廿日市 林野 麴光

危険球と言うのへ投手もの申す
聞き流すことに徹している微笑
いい噂したい座ぶとん譲り合う
手伝うと言うてお邪魔はせんといて
そんな気は毛頭もない隠居部屋

今治市 野村 京子

生涯を添うた夫婦の花むしろ
許してあげる忘れてあげる骨拾う
好き嫌い好きで花びらなくなった
銃口はまとも女の目がすわる
流れ星はが一人で住んでます

西宮市 奥田 みつ子

朝刊に躍る 満塁ホームラン
うつむいた男に美しさはない
芯とがらせて書きたいことがあるのです
むずかしい人だと猫も知っている
朝の蜘蛛お前も生きるのに必死

鳥取県 新家 完司

ひとりぼっちでも寂しくはない五月
臭い水飲んでも街がいいらしい
交番へ届けるほどの金じやない
両成敗されても僕は悪くない
厠まで光が満ちて夏来る

弘前市 蒔苗 果林

人として地球の上に生きる幸
アイスクリーム両掌に花のおじいさん
田に入る水が覚悟とせせらいで
一年ぶり田植機洗う木瓜が散る
狐から借りた瞳 娘には疎まれる

弘前市 村田 善保

正論を吐くとき白い風に遭う
青い鳥求め続けていつか老い
割り切ってしまえば広い蒼い空
渦潮は修羅と問答繰り返す
台本もなく人生の旅続く

弘前市 岡本 花匠

白神を守る意欲のブナ植える
追い土に自負と夢乗せ妻多弁
追肥した魅力たっぷり茄子の顔
蒲の穂を昔語りに偲びとる
どくだみも信じて採れば臭くない

弘前市

小寺花峯

五所川原市

斉藤

島

五時からの喉が乾いてきてこまる

正直に底が見えてるワンカップ

カヤブキの屋根に花咲く里があり

約束が耳から離れぬ曇り空

縄跳びの端を持たされ陽は沈む

弘前市

中山雅城

十和田市

阿部

進

人生双六 休みが多過ぎる

統一に紆余曲折の仲間かける

会いたさは三日と持たぬ囲碁仇

元祖が付いたお土産を買ってくる

シーンとした音も気になる受験生

弘前市

高瀬霜石

黒石市

相馬

一花

錆びついた窓は内側から開ける

深爪をしてばかりいるカタツムリ

ライバルもああ落とし穴掘っている

トタン屋根 喜怒哀楽の音がする

花鳥風月 につぼん人を謳歌する

弘前市

一戸ツネ

黒石市

千葉風樹

不摂生のツケが来ました五月尽

救急車去れば虚の闇残る

娑婆の貌ズラリ並んだ駐車場

ひとり旅知らぬ駅舎に疲れきる

生命線必死になぞる地の底で

お通夜の家はりんごの咲くとなり

男女必修エプロン渡される

郭公の響く空間大切に

いつの世も馬の親子は詩の好き

父の日もサマータイムの父でいる

十和田市

阿部

進

裏かいた積りが裏をかかれてた

もぎたてのリングおいしい丸かじり

自在鉤 我が家の歴史知っている

歯切れいい完全試合のインタビュ

定年の無聊 爪がよく伸びる

黒石市

相馬

一花

泥酔をすれば本音を吐く不安

美人には建前だけで押し通す

夕暮れのような顔して退職し

耳打ちをされて動悸がひどくなる

宝くじ当たりうつ病全快し

黒石市

千葉風樹

大急ぎで悲しい青を拭き落とす

海は洋々と山なんぼのうしろ指

武士道を貫く一本ペニシリン

えーお笑いを一席オトコ働き通しです

かたつむり鬼の面などひとつ買う

和歌山市 堀端三男

ずけずけと言えば偉いと思うて

ハンドルの遊び程度のお付き合

罪多き手をよく洗ってお灯明

哀しみをまぎらす道化だつてある

よい爺になるにも金の要る時勢

和歌山市 牛尾緑良

巢立つ子に合わせる春の予定表

同じ台詞で銀婚の妻口説けない

大部屋で鎮静剤をみんな飲む

北という憧れがあり切符買つ

朝市で会う父の顔母と顔

和歌山市 福本英子

待ちかねた慈雨紫陽花も水がめも

海紅豆ぼろぼろ柳友の計がつづく

前列で踊る操り糸のまま

お隣に負けてはいないゴミの嵩

転勤辞令 主人へ家事の特訓中

和歌山市 桜井千秀

また重い葛籠を所望してしまつ

甲高く笑い飛ばして自己顕示

流言飛語出所不明のままでよし

バランスを保つ一つの杭となる

ベランダの糸瓜と話す日暮れ時

和歌山市 福井桂香

面影を追えば遠くにかすむ傘

あじさいや心変りはないつもり

嘘ついてないと思うている自信

一筆箋あしたへ愛のいと紡ぐ

大臣がまた変つたよおでん鍋

和歌山市 細川稚代

こおろぎも螢もすててきた文化

螢飛ぶ里でひっそり住む母娘

空高く熊野古道のめはりずし

肯定も否定も出来ず葱坊主

正論をかざす男が飢えている

海南市 三宅保州

退職日寄つてたかつて労られ

噂流していただいてありがとう

趣味は競馬と言える時代になりました

無視されることがいちばんこたえます

他人を惹きつける力がありますか

有田市 松井かなめ

中年になつても母にそむきがち

同窓会友の気ままを聞くばかり

まとも上手の仲人家に年増の娘

どっち向きでも慰めがある菖蒲花

耳遠いおやじの前ででたらめを

和歌山市 北山好笑

金魚掬う金魚のような女の児
生あくび隠しおおせぬ閉じ扇
早乙女と呼ばれ六十路の人ばかり
忘れ物したのも忘れ暑さばけ
油断してゐる訳ではないがいつもビリ

和歌山県 小倉アサ

直感に縋ると傷が深くなる
壁に在る耳に聞かせる笛を選ぶ
つかれておずおず上げていた右手
逢う時は時計外している絆
自信ない返事笑顔にくるんでる

和歌山市 玉井豊太

胸はって成り歩で王手掛けている
取っ付きは悪いが取り柄あるらしい
良い連れと流れる川を汚さない
老兵を賢く飾るのは今だ
気に入りのおかずを作る嫁と本

和歌山市 宮口克子

平服で心美人で馳せ参ず
慧眼のあるお方だと受けとめる
生別と死別で違ふ風当たり
酒に逢い酒に溺れてからの道
成功の元と頭を撫でながら

和歌山市 田中輝子

山ゆりの香りの中の自尊心
他人という物差があり夫婦仲
解熱剤としてのびんせん五六枚
朝顔のまいとし植える指定席
花の苗 花の土買う都市砂漠

和歌山市 青枝鉄治

無事着いたコール三度と決めてある
嘘言えぬ男の座る堅い椅子
慰謝料という切り札をちらつかす
芽の出ない男の好きな屋台の灯
書留の声に居留守が返事する

和歌山市 池永正雄

道中を思えば安い切手代
折角の春の衣装に夏が来る
露天風呂 戦の傷の語り合い
ふところの事情もあつて休肝日
納豆のお陰と思う土俵際

岸和田市 福浦勝晴

エキストラ虚空を掴む断末魔
旨くないオカズを先に平らげる
カーテンをあけると綺羅めく朝の海
家康をタヌキ親父という所以（遠藤周作『女』より）
長トスを抱いて寝ている素浪人

岸和田市 芳地狸村

睡蓮が迎えてくれるお茶の席（赤山禪院）

霧囲気が女にうける霞棚（修学院離宮）

四季ことの彩がたのしい大刈込（"）

美しい冴えたひびきの鹿おどし（詩仙堂）

美女からの仕掛けに弱い御堂筋

岸和田市 岩佐ダン吉

母さんの持ち味 笑顔だと思ふ

ひたすらに沈黙 妻が持つ強味

困らない人が税率もてあそび

散歩でもついつい走る癖がある

乗り気など少しも見せぬ奴に負け

岸和田市 島崎富志子

手作りのトマト自然を丸かじる

青春がまだ住んでいた里の倉

夫という安堵幸せだと思ふ

閑という悪魔が時々わるさする

叱咤せにゃ心も身体も遊んでる

岸和田市 古野ひで

背を向けた友は追わない事にする

別れると決めて優しい言葉吐く

元気で余生を趣味に凝ってます

末席に座して気配り許りする

ひとりよりふたりでいると言う強味

岸和田市 原 さよ子

絵ハガキへ一句を添えて旅半ば

反核へ同感ですと鳩の群れ

反核へ右も左もない署名

筆を持つ友も手の甲老いのしみ

ファッションは嫁のセンスにまかしとく

岸和田市 高須賀金太

黙りこくってただ流されている私

右翼ではない日の丸の美しさ

いい風が吹き御神籤は信じない

ナツアカネ翔んでいたのではとすると

上厚下薄きみは黙っていられるか

岸和田市 寺田 甚一

一分は長く一年すぐ過ぎる

昔のこと覚え昨日のこと忘れ

瀕死から蘇生これから余生です

医者はしごして病名を納得す

ナイトーのないチャンネルを探す愚痴

大和高田市 岸 本 豊平次

スケッチに4Bはずむ峠径

呆け防止本音はプロを目指す趣味

役付きで義理の出席○で出し

親馬鹿が徒勞となつて子が育ち

白無垢が斑染のまま妻は老い

西宮市 門谷 たず子

洗いざらしのＴシャツ素顔が光る夏
自分史の枳目に溢れる亡母の愛
通りすがりのなさけを貰う俄雨
長雨の午後はあなたに書く手紙
盛りつけで表情変える冷や奴

姫路市 人見 翠 記

初咲きの百合を供えるこの冥利
梔子はほの暗き中から香を放つ
露の葉のほろ苦き味を好む齡
早起きの競争相手はホトトギス
お手植の大王松の葉をもらう

箕面市 坪田 紅葉

梅雨近し押入掃除はかどらず
あるがまま生きて行きたい青い空（人見氏に捧げる）
留守の家 えびねらんの花ざかり
遠い日の話に花が法事の膳
むなししい日 遺影と自問自答する

高石市 浅野 房子

紫陽花に七色の雨降りつづく
しんどいを連発すでに負けている
昔話はよそう最後は愚痴になる
子に敷いたレール子供に外される
いつまでも客扱いをされる嫁

大阪市 大塚 節子

猫だいて雷鳴遠く母は留守
雨もよし平岩弓枝読み上げる
とんとんとん仕事はかどる雨上がり
伝票を取り合いながら胸算用
雨に光る濃紫の杜若

寝屋川市 岸野 あやめ

雀さんお逃げよ農薬撒く日だよ
貞淑な妻がときどき噴火する
踏みしめて越えてゆくしかない山路
烈日に総身を曝し老いんとす
譲られた席に座れぬ訳がある

宝塚市 丸山 よし津

どのように生きても死ねばそれで暮
汚さぬよう雨のポストへ葉書入れ
ポップコーン軽くピリオド打ちそこね
母娘孫 眉の薄さが遺伝する
ご無沙汰の顔が並んだ七回忌

八尾市 宮西 弥生

一つずつ気付かせてもらう他人の中
長いこと人間やつてる手抜きする
離婚歴 御堂筋ゆく第一歩
姉妹プツンと切れて失話症
こわい夢見てから先祖に灯をともし

八尾市 宮崎 シマ子

生き恥を海に晒してほっとする
一本の信念 無学の母が持つ
香をたいて始めて風があると知り
糸切歯 糸が切れます古希いまでも
誰も彼も私のことなど知らん顔

八尾市 高杉 千歩

過去形ですませぬ昭和生き抜いて
生ビール一口ほしい風みどり
ぬけぬけと悪口にして惚気てる
ちよつと御無沙汰が一年という早さ
柿若葉 精気もうてきた画帳

八尾市 山下 美津留

お流れの猪口にかすかな棘映る
イベントのTシャツ妻は若返る
道連れに天狗の鼻が一人居る
言葉狩り新聞雑誌怯えてる
手のしみを勲章にして野に生きる

八尾市 吉村 一風

水がめをいつも満たして母祈る
健やかさ析って母の豆ごはん
猫と瞳が合うてどっちも立ちどまり
無駄と言う道も歩いた日記よむ
赴任地へ送る写真の鯉のぼり

大阪府 榎山 隆

梅雨ぞらに雨の落ちないつゆのうつ
雨しきりバズルを埋めることば狩り
冤罪をはらす浦島ものがたり
後世の史家にゆだねる功と罪
式場へ着くまで暗記した祝辞

八尾市 片上 英一

上野インター山菜そばで小休止
忍者屋敷くの一になり公務員
鍵屋の辻ひよつこり出そう又右衛門
かたやきと養肝漬を二つ三つ
万葉のなばりびつくりニュータウン

京都市 都倉 求芽

梅雨謳歌萬歳 紫陽花 花菖蒲
激辛のカレーで梅雨を乗り切ろう
ユーモアのわかる鬼などもういない
双方の情報握る散髪屋
女はいい小さな嘘に可愛い嘘

京都市 松川 芳子

ほどほどの長生きなどと欲を言い
すんなりとゆかぬ術後の医者通い
ばあちゃんの負けず嫌い根くらべ
朝夕の挨拶だけのおつきあい
田植済む頃には来ます置きぐすり

京都市 山海友熙

寝屋川市 稲葉冬葉

親戚の心の琴線ひびき合う
欲ばった亡母の着物は福の神
脈ありと強引なほどの射る
意地っぱり腹八分目なら承知
表情の変化読みとる倦怠期

静岡県 蘭田 猿 沓

大阪市 津守柳伸

新茶売る軒ののれんもお茶の彩
訪問に膝のりだして毘におち
何神のいたずらだらう酷すぎる
手で隠す部分はほんの知れたもの
妻の丹精じやがいの株盛り上がる

美禰市 安平次 弘 道

今治市 越智一水

夢判断 心の奥に鬼を飼ひ
神様と一緒に探すユートピア
匿名の善意恥ずかしがり屋だな
笑い袋を開けて明日を信じよう
人間があふれ地球が病んでゆく

姫路市 大原 葉 香

七尾市 松高秀峰

勲章をもらうは運のいいお方
地球にも歯車がある緯度経度
淡白な時が流れる砂時計
風いだ海その寛容さ見習おう
蝸牛 自分でおそいと思わない

雨に咲く花を見ている恋ざんげ
化けそうな猫が隣のペットです
一言が嫌味にとった四面楚歌
視力ある内に残務をしておこう
飛車角を寄せて伯父さんに喪が明ける
お早うの笑顔は今日の潤滑油
夏風邪の予防上着を持ちあるく
常備薬 母はなんでも知っている
カレー客ばかり立て混むティールーム
志なかばで苦い薬漬

ぜいたくな雲におふくろ乗って逝き
介護疲れどうしても一ぱいよけい飲み
生き方が下手で信用すぐにされ
親切と思って嘘をついておき
理性ある女の鼻の冷たさよ
七尾港汚染に困る地方自治
振り向いてほしい男のわだかまり
おれ一人残して逝ったなげく友
農業を継いで素顔の妻という
透析でよかった癌の友が逝く

吹田市 山本 希久子

高知市 北川 竹萌

約束のない日のバラが道化めく
残された時間を歩くかたつむり

古い二人 自由守るは意気ばかり
北鮮の原爆ニュース梅雨に入る

これも生き方斜めばかりの道をとる

梅貰い家中捜す漬ける壺

浴衣美人とすれ違ふたり立葵

急ぐことない終点を百と決め

Tシャツと転げる坂がある若さ

弟の金鶏と共に五十年

広島県 田村 新造

横浜市 菱田 満秋

満蒙たそがれ興安嶺の赤い雲

海を見るだけに岬の先に立ち

北満の焦げつく夏を行き迷う

故郷に佇てば唱歌が口をつき

道のりはまだまだ遙か母の国

宿の下駄遠くへ行けぬ緒のゆるみ

逃げ遅れそんなところにあつた運

雪折れはないと頼りにされている

斃れたら放つて行くぞという掟

ペンダント見つめられない位置にあり

宇部市 平田 実男

羽曳野市 田中 透太

口答えよりも黙秘が身にこたえ

祝盃は溢れるほどに酌ぐがよい

お百姓に過労死がないのが不思議

晩学の父のノートに自負がある

縁づいてからの才女はただの主婦

親戚に頭上がらぬお父さん

また尻尾振ってしまった自己嫌悪

風呂の水溢れています長電話

片目つぶるとこんなに広くなる世間

菖蒲園みんな美人に撮れている

高知県 小澤 幸泉

尼崎市 田中 薫

理由など言わぬ重たい父の靴

いちにちの終る間際の掌が火照る

雨雲の彼方に父の光見ゆ

いつからの秒を読まれし喉の穴

教養の重荷に耐えて歩き出し

わが肉のだらりと伸びて梅雨近づく

娘の梅が一〇〇粒になり雨しきり

歩き疲れて駱駝はやがて石になる

炎みなたずさえてゆく天つ国

星幾夜 美女におわせし母なりき

神戸市 山口 美穂

牛優先 車もゆっくり草千里（阿蘇を旅して）

みどりの風に脳も洗って大観峰

お天道さまも旅の人もみなやさし

新キャベツ陽をたつぷりと巻き込んで

留守番電話へ素直に言葉が出て来ない

大阪市 藤田 頂留子

時には逆も匂わすお役人

国道で住み静かさの恐怖心

起訴しても江戸おかまいの刑ですみ

実社会に愛想つかしてホームレス

仏縁を説かれる碧い眼の比丘尼

大阪市 北 勝美

散髪代安いと思う眠り心地

梅雨の鬱 視点をしばらく花ざくろ

貧乏を自負するゆとりだつてある

戌年ももう早々と折返し

補助金で米作農家の板ばさみ

奈良市 米田 恭昌

將軍の木像に見る花の乱（京都吟行）

竜安寺 凡人 石にとらめっこ

丘を壊し雲雀ヶ丘と言う団地

雷の丘で太古の風に逢う

変り身の速い男で疎まれる

堺市 黒田 真砂

メリーさんの羊やつとピアノで弾けました

上々の首尾を知らせる子の電話

社会への一步息子の光る靴

逃げるが勝ちと夫二階へ避難する

雨降れば風吹けばまた孫思う

高知県 赤川 菊野

あの人もAB型かいごつそう

財産も金も残さぬ死の美学

計の知らせドッキリカメラのように来る

釣書がワープロで来る世の流れ

これ以上生きておつても何もない

西条市 片上 明水

親切な傘に甘えて半分濡れ

知られざる逸話 骨壺から溢れ

ふるさとが煙たくなつてきたくらし

子に家業譲るとグラフ上を向き

妹の世話になりたらしい母

呉市 榎田 英詩

命短し唄えば余生悟れるか

生きるのは俺だ後押しなどいらぬ

父を亡くした老母の物忘れがひどい

縁あつて妻と二十一世紀へ歩む

無視すれば泣くのを止める泣き上戸

竹原市 森 井 菁 居

しがみつく孫よごめんね湯が熱い(初孫真優)
真っ白い孫のおむつを干してみる

日曜のプランに孫の添い寝など
アトピーの不安が消えた茶の間の灯
生受けてひと月孫の爪が伸び

竹原市 時 広 一 路

もつと雲出て来て欲しい万歩計
簡単なはずの手抜きが難かしい
一缶のビールで買える笑顔です
ネクタイを外して妥協考える
遮断機の傍に綺麗な花が咲く

竹原市 岡 本 清 水

嬉しい日 日記も口数多くなり
露地物でなすにトマトが初に熟れ
梅雨らしい作物みんな雨を待つ
モールスでお話をした過去の職
夫婦 恋人 独占欲で生きている

竹原市 岩 本 笑 子

野に佇てば野の声しきりヒメアヤメ
ある日ある時人間らしく生きたくて
羅針盤時々狂う酒である
見当らぬバトンよ二十一世紀
ホタル乱舞君を渡してはならぬ

竹原市 石 原 淑 子

同居して主役をおりる母の憂
かたくなに老いを認めぬ母の意気
ときどきに原爆資料館哭きにゆく
旅の子へ祈る掌重くおもくなり
だからこそ靴の重さは口にせず

鳥取市 両 川 洋 々

日本の米はかくれんぼが好きだ
政界を一度虫干ししておくれ
神をあざむく恋だきっぱりやめなはれ
月よ月おコメはどこに隠れてる
自民党いつか野党が板につき

鳥取県 松 下 た つ み

いきさつを知らぬ幸せかも知れず
きつかけを掴みそこねた果し状
ふる里の風にネクタイゆるくする
干渉が多くて前へ進めない
もどれない喧嘩それきり雨期に入る

鳥取県 土 橋 螢

腕前がよいと頼んだ袋かけ
友だちは田植えの後も忙しい
父の日の寿司手作りでごめんなさい
活字に飢えた吾輩の小さな文庫
時間からこぼれる汗を拭いている

鳥取県 土橋 はるお
小説みたいな事を言っても始まらぬ

庭石の窪みを絵の具皿にする
宝石店の用心棒に頼まれる
ワンカップ飲めば手の震えが治る
外米もうまいと喉の仏さま

鳥取県 林 露杖

芍薬のほころび加減供華を選ぶ
血圧も糖も正常腹も空く
眼の手術 老妻に一足先越され
引く波にためらっている蟹の足
性善説疑う事件多過ぎる

鳥取県 上田 俊路

敵失で勝ち心から笑えない
亡き戦友の叫びが今も耳朶を打つ
実力はないが誠意は買ってやる
愛と憎すぐ突き当る町に住む
もう一度明日が見たくて町を出る

鳥取県 石谷 美恵子

家族の輪 父が笑うとよく弾む
退社ベル暗号交わし消えて行く
風呂敷へ包めるほどの愛でよい
絵の具皿いま万緑の中にいる
海の絵に好きな群青惜しまない

鳥取県 鈴木 公弘

ふりむけば竹の皮脱ぐころとなり
爽やかな風に乗りたい糸とんぼ
反論の出来ずに放つ草矢かな
螢火を追うて嵌まった川がある
人恋うて花藻にゆれる月あかり

鳥取市 西原 艶子

思い出の道アカシアの真つ盛り
朝のうちだけは感性冴えている
しあわせも不幸も通り過ぎていく
血を分けた子がいて怠けてもおれぬ
ちよつと背を搔いてと言える距離の仲

鳥取市 美田 旋風

自慢することがないから座を抜ける
手料理をほめてねじれた糸ほぐす
回り道すれば気楽な顔に逢う
おめでたい話は風に乗りにくい
雑兵の家系で汚職に縁がない

鳥取市 春木 圭一郎

感性を研いで残り火かき立てる
日本一狙い駒音高くなる
花時計とまれよ君といたいから
夜遊びもできる男に艶がある
耐えている女このごろ見当らぬ

鳥取市 小谷 美ツ千

君とならきつと渡れる虹の橋
六月の陽に純愛を誓いあう
人恋の乳房しつかり持ち上げる
もう鬼になるのは嫌いかくれんぼ
宗次郎の笛わたくしを放さない

鳥取県 江原 とみお

流れ変えたのは川下の葦たちだ
花好きの人には花の話する
軽がると母の柩が運ばれる
照り返しのきつい隣の赤瓦
お隣の犬には信用されている

鳥取県 羽津川 公乃

飛び過ぎた野心着地でよく転ぶ
乾燥機で晴らす程度の濡れ衣だ
さっぱりと賞罰なしの一代記
おみやげに紛れこんでた旅の恥
うっかりとお世辞も言えぬ父の髭

鳥取県 石尾 かつ乃

信用は老舗を守る鬼瓦
寝たきりへ手文庫一つ枕辺に
くちなしの薫り我が家に青葉風
田の水を見まわる足を強くする
赤を着ることに馴染んで背筋のび

出雲市 尼 れいじ

焦ってる私を叱る竹トンボ
ついて来ぬ螢が迷い道に入る
同情がまだ寄ってくる憐れ
一つずつ秘密を持って共白髪
親の愛 男結びの荷が届く

出雲市 板垣 草丘

袖は夏 身ごろは暮れに払います
父の忌は田植さなかの僕の齡
筍と露との話 胃で聞え
麻混の肌ざわり聞く梅雨晴れ間
蚊帳吊った釘の一つがまだ残り

出雲市 園山 多賀子

神様の死角に罪な政治劇
座右に置く辞書は味方と思い込む
輾転反側 記憶ばかりが蘇る
頑固さも取柄と憶う六十年
傘寿今つらつら憶う死の美学

出雲市 吉岡 きみえ

住み慣れて川の音さえ子守唄
花菖蒲すんなり伸びたい女
強い燃りかけて夫婦の五十年
ストレスを抱え女の大ジヨッキ
それ言うと愚痴になるからもう止そう

島根県 松本文子

淋しいからもう握手などしない指
負けることが嫌いな人に負けられぬ
湖沼法 それから蜆との会話
いい朝だ みんな笑顔をかえされる
上を見てまた下を見て我慢する

出雲市 伊藤寿美

青葉風ブランコ揺らす中也の詩
再読のコナンドイルは梅雨最中
水の橋火の橋渡る子守唄
夜明けのコーヒー飲む成行きがほろ苦い
ブルートレーン エッチな本が残る席

出雲市 久谷まこと

青葉風 今日の生命に活を入れ
大正は若やいだ声意識して
隠しごと見つめる顔に書いてある
たてまえと本音が席を譲りあう
甘えても抱いてはくれぬ犬ざらい

島根県 佐々木鳳笙

盆までは帰らぬ便り 時鳥
雑草のいのちが覗く石畳
城下町 和服が路地へ消えて昼
スイッチオンで父の柩が燃えていく
山彦が過疎の佗びしさまで返す

出雲市 岸桂子

美しい疲れを残し花は散る
茄子の花ほどに孝行まだ出来ず
湯を殺し殺して玉露の味を出す
色褪せた魚拓よ亡父も遠くなる
記念日も話す事なく雨がふる

出雲市 竹治 ちかし

太っても痩せても悩むよい暮らし
聞き慣れた音が故郷の家にある
もしかしたらと夫婦でたわいない話
鈴付けてキヤッツフードで満ちる猫
気が向かぬ事は残して夫の家事

出雲市 島祥庵

やり残しばかりを私の箱に詰め
のと飴が売れる都会の低気圧
主義一つ確かな道に亡父がいる
あやとりの指から転げ出た逸話
わたくしの波紋に円周率がない

出雲市 富田蘭水

しあわせをつかむ畑に種をまく
ぼけ封じ薬に日付け書いて飲む
糸車くらし背負った亡母のうた
鈴の音を信じて一つ罪を消す
揺れているいつも男にある打算

出雲市 小白金 房子

まけて勝つ夫の頑固にならされる

門限の掟を守る赤い靴

マイク手に錆びぬ男の数え唄

根回しがうまい男の二枚舌

最高のセリ値貰った牛の声

米子市 石垣 花子

記念日など疾うに風化をした夫婦

老いるとは悲し座敷で骨を折り

毒舌は口先だけと老妻知ってる

迷うから影も足踏みばかりする

陰口が聞こえて客間落ち着けぬ

米子市 野坂 なみ

紫陽花の雨が仏を連れてくる (亡夫二十五回忌)

そして今位牌へ妻の朱を入れる

揚羽蝶 母の畠でねむりたい

身の内の鬼が小さくなる日暮れ

バルコニーから折ふしの日本海

米子市 青戸 田鶴

灯台がある安心に慣れすぎた

あの頃は時がゆったり流れていた

怠けまいと言いつつ昼寝する

バラ展のバラはすました貴婦人で

夕暮れは想い出ばかりふえてゆく

米子市 田中 亜弥

闇に馴れて奥の仏と手をつなぐ

迷い出せば霧いくえにも重なって

屋根づたい猫は見事な芸を見せ

雨あがり人は陽気をとりのどす

深い仲されどけじめはつけている

米子市 寺沢 みど里

花にうかれて財布の鈴に気づかない

薬屋根も自慢話に飽きてきた

控え目に光ってほしい喪の真珠

鏡も老いて金婚式の仲間入り

分身とおもう眼鏡を道連れに

米子市 澤田 千春

束の間の希望 風船からもらう

手鏡の中にきびしい風が吹く

何はともあれ話し合いたい海がある

笑わせてピエロは枕裏返す

逃げないで 父の手垢の広辞林

米子市 白根 ふみ

読経で磨き足りないものうめる

老いるほどメンテナンスの厚化粧

気負い過ぎたか落し穴まで見失う

セクハラよりも女議長の座を守る

風穴を自由に開けてらいてう忌

米子市 川上より子
本家と分家 遊び心で付き合おう

蝶に宿を残してキャベツ収穫す
おとなりの芝生も青でいてほしい
積乱雲 寂聴の声 亡母の声
大ぐみが熟れて少女に還る刻

米子市 茂理高代

やがて落つ覚悟で炎えている椿

流れ星北に住む子に言付けを

額の花 昨日の事も知らず咲く

うれし涙は人間の味がある

あれ以来うさは油断しなくなる

米子市 中井ゆき

ちははのはの愛 無限大 青い空

時々影が他人の顔をする

他人なら許す気持を持っている

コーヒー館出逢いに賭ける窓の椅子

洗い上げ私も一寸乾しておく

米子市 新正子

昔むかし売った小袖が今惜しい

脳天の笛の音色が鈍くなる

その時は妻のオムツを替えてやる

ホラ吹きを悪人だとは思わない

火葬場で悲しい嘘が灰になる

米子市 光井玲子
紫陽花がとても上手な嘘をつく

ぬるま湯に浸って域が越えられぬ
何も彼も包むあなたに打ち明ける
今にして亡父の礫が物を言う
本番へ胸の鼓動が鳴るばかり

岡山市 川端柳子

義理がたい女に微熱つづく日々

輪ゴム腕に献立二三 思案する

年齢のハードル越しての可憐な名

バラ大輪 この日を私の大安に

後学のために自身の傷さらす

岡山市 小林妻子

展覧会僕の命を陰干しに

血管の中味疑うのも仕事

人間のつけた聡明と言う名詞

寝て起きて虚飾の風を嫌いぬく

銀河流れてまだ老残の願いごと

岡山市 矢内寿恵子

カンナの朱燃えてきました敗戦忌

赤いバラいじめに合っているように

外米と話がはずむコッペパン

平凡が好きなの夫婦の五目めし

柩までつづく浮世の数え歌

岡山県 萩野 鮫虎狼

七転び八転び柩の中の唄
万歩計 脳梗塞の歩を拾う
病院の飯 退院の日は美味い
世界中の米を食べてる不倖せ
残された男お経の本を買う

岡山市 井上 柳五郎

就職のやつとできたに五月病
まだすこし生きたくて酒たばこやめ
コメ不足 代用食に耐えた過去
人生のたそがれという春に鬱
ど忘れと妻もおんなじことを言う

岡山県 二宗 吟平

女の子 坊とあやして行きづまり
町長さんと言えば聞こえる元町長
飼ひ慣れた犬の不意うち転ばされ
外科の部屋 私も人なみ頭蓋骨
今日もまた母亡き孫の声を聞く

岡山県 池田 半仙

六法も無縁のままで来た八十路
二軒から新茶を貰う嬉しの日
昔より二十日も早くする田植
田植機が内緒のようにすませます
田圃もう蛙の声もあるやなし

岡山市 花田 たけ志

半生を楷書で生きて金が無い
多角度から見ればだんだん白くなる
ヒーローは孫で余生の物語
風下はささやく風に色がつく
より好み年で逃げたり押されたり

岡山県 山本 玉恵

占いの吉でま白い靴をはく
疑いをまた深うする舌足らず
雨の日は雨をたたえる口達者
三枚目の舌にのせるは借りた知恵
幸せのまん中に置く母の椅子

香川県 木村 あきら

袖の無い机で定年まで迎え
ジーパンとショルダーで行くハネムーン
減反をして外米を食わされる
生き甲斐は適当な友と敵が居り
恥じらいの無い人間は信じない

香川県 成重 放任

天ぶらのコロモを除けばやせた海老
変り行く車窓を友に一人旅
一本の紅が女の印つけ
ホタル狩 螢の数より人の数
飲み過ぎて翌朝 酒はもう止めた

香川県 川崎 ひかり

顔を見て案じた倍に腹が立つ
本当はすぐに泣き出す私です
いつからか妻が有利な席確保
使い捨て老母の辞書には載っていない

「愚妻です」一度言いたいウチのママ

香川県 工藤 吟笑

苦勞して家を逃げ出す子を育て
あたたかい隣があつて生きてゆく
後ろからついて行くのに怪我をする
大物を敵に回した老いの意地
忙しい女がなぜか昼寝する

香川県 新川 マサエ

欲得がからんで重くなる心
過去の傷笑つて話せる年となり
岐路に立ち母の笑顔ですくわれる
ライバルが居るから今日も背筋伸び
芸の道まだこれからと八十路ゆく

香川県 池内 かおり

溝埋める第一声が出てこない
蹴り返す力は溜めておくことに
逃げの手は教えなかった亡父の駒
玉の興少しの矛盾目をつむる
竹光で斬られる役で飯を食い

唐津市 田口 虹汀

金宝樹 寺も静かな昼下がり
噛みしめる苦言 墓標が新しい
同人と言う同人の盂蘭盆会
全身を風に託して風の糸
傘寿までまだ乙旗は掲げない

唐津市 仁部 四郎

八月の雲に血の色まだにじむ
勲章が届いて溶けた硬い骨
小銭だが期限を守り友である
元氣さも疲れも煙草の火が教え
へんてつもない町ですが現住所

唐津市 久保 正剣

朝令暮改 殿は二言で辞めました
宴会費 女性を安くする差別
大将の足に馴染のない地雷
愛してると言えばすかさず嘘でしょう
遠浅の愛にも溺れる溺がある

唐津市 山口 高明

義父ちゃんと呼ばぬ我が子を折檻し
仲人も目立つ肚とは知らぬなり
最強の敵はわたしの氣弱かな
後戻り出来ぬ昔を恋しがり
結着を付けねばならぬ火の倫理

唐津市 筒井朴竜

一大事瑞穂乃国米不足
日本海原潜墓場恐漁場
護国社乃桜散里際潔好
鉢似分見事咲也薰子蘭
寿命在留限人生句三昧

唐津市 浜本義美

時代超え世代を越えて母の歌(母の日に)
外米に戦地の修羅が甦る
飢える日がくるかも知れぬ高齢化
愕然として動脈の硬化知り
草木も眠る　なんで私は眠れない

唐津市 浜本ちよ

幻想の個展に生活忘れおり
テレビテレビテレビに心呆けそうだ
若さゆえ相応の生活あきたらず
流されて流れて浮き世にしがみつ
三寒と四温が老いの薄着責め

西宮市 西口いわゑ

むずかしい人が笑顔で落ち着かぬ
風みどり淡いスーツで待ち合わせ
日曜日可愛い鬼が来てくれる
潰けられて茄子は本領発揮する
大ジョッキああ最高のひとと居る

豊中市 吉田あずき

少しずつ動いて人を見る角度
上手から気ままな風が吹いて来る
風船のふくらんで行く不安感
地下鉄の窓にすり替えられた顔
野菜汁　時の流れに添ういのち

町田市 竹内紫鏑

バーコード美人の顔は見ずに過ぎ
定年後に最高記録　万歩計
捧げ銃した辺　ジョギングが通る
著者は知らず一冊棺に入れられる
囑託は辞書を友とし人ぎらい

静岡市 安本晃授

父の日は一日だけの父の椅子
人情がからむと弱くなる奥歯
面影の蟹に嘘の匂う語尾
正直を買われ亜流に杭を打つ
丸木橋渡ると民話喋りだす

羽曳野市 吉川寿美

お豆腐が旨くて町を出てゆけぬ
貧しさは言わない母のシチュー鍋
ワインは甘口まだ大人にはなり切れぬ
いま少し生きていてほし沙羅の花
沙羅の樹の枝に吊るした相聞歌

北九州市

梅田宣司

西宮市

秋元てる

いたいほど握ってくれる手に無沙汰

男女七歳そんな時代もあった俺

女史の顔もう一つあり大ジョッキ

受付に苦手の筆が置いてある

恋やねん頓堀 タコ焼食べながら

姫路市

丁坪サワ子

箕面市

椎江清芳

ノック忘れお目玉貰う孫の部屋

ライバルの意識で育つ三姉妹

生涯をお前と道連れ血糖値

好きな物食べなはれと投げる匙

出来過ぎの嫁に合せる気が重い

姫路市

中塚遊峰

大阪市

板東倫子

傷心を癒す細庭 四季の花

同性の視線を意識する水着

肉親に勝る昔の幼友

老大も無駄でなかった寡婦も古希

負い方もひとつで重荷軽うなり

寝屋川市

平松かすみ

富田林市

池森子

月間賞びつくりカップ持ち帰り

毎日が本気こころは真っ白だ

敏感なお肌しばらくノーマイク

人生行路たまにはピエロになることも

いつもよりはしゃぐ葬式から帰り

新婚の隣 運勢良し悪し

四つに組む気力が失せてよく笑う

五十回忌済んで気楽な人となり

愁い顔 少女の頃は絵になった

幸運の女神 理詰めが気に召さぬ

働いた汗を娘の荷に飾る

しなやかな指で男を料理する

眉を引く女の愛は二重底

つぎの世も夫婦で渡る虹の橋

五十年添って専業主婦で老い

にんげんに生れ人間に殺される

病人へ一粒百円のサクランボ

笑うたら泣きべそ顔になる孤老

強妻へ夫ひたすらまるくなる

紫の菖蒲 遊女の立姿

母の留守 家の空気は乱調に

薄いうすい絆紡いだ夏の川

ふり向いてどうする吊し柿の種

妻の見出しに僕の存在感がない

美しく刺してくるのは薔薇の棘

富田林市 片岡 智恵子

本心を書いた手紙をゴミ箱に
意地を張るふたりの心石になる
大海へ出たい金魚の浮き沈み
空間の演出好きな香をたく
過労死へ仇に変わった一本気

枚方市 海老池 洋

興味ない顔へも見せるコレクション
そう言えばそんなこともと七回忌
柿一本ここにも亡母の一代記
相撲にはならぬが男意地がある
女百態そんな秘密をしる鏡

河内長野市 植村 喜代

五月晴れ蟻に見えるか空の青
空があんなに遠いよ竹の芽よ
幸せの一つ毎日鶯鳴いてくれ
何ほしい何もいらぬ来てほしい
電柱の影を歩いて陽を防ぐ

大阪市 榊 本 落 児

象の鼻 幼稚園児が好きらしい
アリバイを女がするとややこしい
叩いても埃が出なくなり淋し
七十を越すと鏡も歪みだす
百々日亡母が居そうで部屋覗く

奈良県 長谷川 春 蘭

免れぬ老いには触れず冷奴
出不精にいよいよつのる若葉冷え
風鈴の今日鳴り初めの風ありぬ
新茶の缶 明治生れのしまい癖
猫可愛がれば犬妬く曇さがり

宝塚市 吉田 笑 女

恙無い日々へ感謝の手を合わせ
年毎に老化も目立つ三姉妹
今一度聞きたい亡父母の笑い声
まんまるな石ポケットに落着かぬ
順番を待ってたように花が咲く

河内長野市 井上 喜 醉

欲を捨て六十路の命今日も無事
隙あれば狙う横槍汗を拭く
視野の無い天狗悲しい自己主張
種切れの昔ばなしへ酒を注ぎ
キーホルダー集めて世界狭くなる

島根県 藤 原 鈴 江

一度きりの人生大事にしています
友多くこんな楽しい忙しさ
うれしさよダイヤの指輪母の日に
金は無いけれど子の愛孫の愛
白さぎの一羽淋しき水遊び

伊丹市 山崎君子

老母の恋 梅雨の晴れ間のひとり言

白百合の香り亡夫の声がする

京言葉 友の逢いは嬉しくて

父の日のないカレンダー風によれ

闘病の疲れ哀しい片えくぼ

東大阪市 崎山美子

健康な若さまぶしい老いの日々

署名して責任感にふと気づく

ふるりの丘はいつでもあたたかい

同窓会みんなまぶしく見える顔

お祭をだしに子供を呼び集め

箕面市 岩津ようじ

つけられた首輪を自慢してる犬

五月闇 風も私も動いてる

虚虚実実 打打発止 エゴとエゴ

農薬は嫌い毛虫はなお嫌い

可愛い娘 抱いて抱いてと歌謡曲

守口市 森川まさお

桐の花 昼間は音のしない町

おっとりと喋る昔の町家なり

片手間に商いしてる武家屋敷

先着順に並んで覗く水車小屋

旅戻り灰皿キレイになっている

大阪市 井上白峰

百出の議論に勝る玉の汗

例えばの話が胸に突き刺さる

逃げ道をあけて打ってる母の釘

日の丸よ君も戦争犠牲者か

忠魂碑 理屈は要らぬ拳手の札

堺市 柿花紀美女

余命表 神にまかせて今日を生き

点と線結べず霧の中にいる

父になった息子が作る竹トンボ

マルチメディア時代に老いはうろたえる

胸の奥笑われそんな夢を持ち

富子宫市 渥美弧秀

ベートーベン弟の計はなお重く

飲むほどに妻の苦言も忘れかけ

傘寿の夏 生命線がなおつづく

ためらいの心の運が遠ざかる

富士と住む夫婦に温い風だより

和泉市 岡井やすお

憲法の以前に弾の来ぬ政治

競馬にも働き過ぎの突然死

犬のふんへ飼主顔を置いてゆき

敵よりも味方納得さす苦勞

健老の腰上げさせる若葉風

大阪市 寺井東雲

筆順は頭の中で書いて見る

客間までうなぎの匂残ってる

まだ吠える毎朝通るわからんか

良い辛抱自慢のラーメン珠数つなぎ

特攻隊 乙女座生まれ気にはせぬ

富田林市 松本 今日子

小きぎみにされて売り出す屋敷跡

陰になり日向になって咲く菖蒲

情けなら誰にも負けぬおでん鍋

私には私の値打わらび餅

格子戸はそのまま締めたぜんざい屋

東京都 山口 新子

四つ目の信号からは腕を組み

シャガールを好きな男と翔んだ過去

抱かれると保護色になっていくわたし

訪問者笑わなければいい女

歳頃ですお買得です割れせんべい

倉吉市 野中 御前

顔知らぬ父の足跡超えられぬ

蜜蜂が流れるように巣を離れ

流人墓 潮の流れを見て倦きず

新葉の人畜無害に油断する

菜の花の海で恋人さがす蝶

吹田市 井上 照子

葛藤を時計の針に託す日々

師の胸に顔を埋めたい外は雨

カプセルがゆっくり溶けるサスペンス

ライバルを先生と呼ぶ車間距離

身を飾る女の性を保たんと

吹田市 栗谷 春子

げにひとつ生まれかわったような初夏

経験にもの申さねば意味もなし

蟻を踏む天の邪鬼の顔はせず

大津波遠きにあらずわが胸に

老いゆくはあわれとすべし犬もまた

吹田市 茂見 よ志子

お人柄したくない真似したい真似

善玉と悪玉並ぶ採血表

Tシャツの洗濯拒む背のサイン

もの忘れ今を大事に生きている

男の目背にして少女熟れてくる

和泉市 西岡 洛 醉

二歩後退こんな日もある老いの坂

体調に一病息災従いてゆく

乗り合やす初発の顔に嘘が無い

つつましく生き肩書の無い私

円満を二等分して妻と僕

広島県 藤 解 静 風

友達でいたいと妻が言いだした
いくさでは死なず癌には討たれしか
胃袋で酒とくすりがあった出合
正眼の構えのほかは知らぬ父
大上段に構えた夫が後退り

大阪府 上 田 柳 影

ゴールデンウィーク避けた旅物足らず
能舞台白い面に睨まれて

歳時記に無かった夜の寒さかな
まだピリオドは打たせぬ点滴つくりと

目薬と医者もナースも素っ気ない

藤井寺市 中 島 志 洋

移り気な虫が選んだ好きなひと
再婚の幸せ祈る古時計

酒癖で出世コースを遠回り

上には上 自慢したのが恥ずかしい
騙したり騙されたりの白い指

生駒市 北 山 悟 郎

正直に生きているから嫌われる
真実を硬い姿勢で打ちあける

惨敗にバットとミット買い替える
呆け防止判らん本を読んです

文明が人類の破滅加速する

藤井寺市 福 元 みのる

思い出したくないものに七つ釘
願書出すことで踏ん切りつけたよう
いい話これも長生きたおかげ
念願果たし上擦った孫から電話

西宮市 瀬 尾 六郎太

かたくなな職人気質匠わざ
ボヘミアのドボルザークのいと悲し
ひらめきは因数分解しくはなし
一芸に秀でる業は哲学ぞ

川西市 氏 林 洋 敏

テレビ欄見てから決めるスケジュール
僕の愚痴聞いてくれない妻の愚痴
年齢詐称 通勤定期だけにする
お隣の葬式何も頼まれず

守口市 結 城 君 子

雨蛙に追い越されたり松葉杖
くちなしの一枝活けてペン走る
休んでる回転木馬に乗ってみる
なんとなく望み通りになる不安

大阪市 松 尾 柳 右 子

切り売りのスイカで足りる兎小屋
物言えば損になるのかお隣さん
鉄線のむらさき涼と力くれ
美しい風景 料理のダイレクト

岡山県 岩道博友

他言する霧があつても旅の人
弁当へ昨日のドラマが色を変え
遠回りして買いにゆく無農薬
愛犬に嘘をついてた日が暮れる

出雲市 板垣夢酔

名前負けしたかワン公意気地なし
ではまたと別れに次の日が待たれ
縦糸に和す横糸のむつまじさ
まずいこと言うたと妻の顔のぞく

岡山県 嘉数兆代賀

何もないわたしに健やかなる茶漬け
裏目裏目傘をさしてはたたんでは
苦し紛れの嘘もときには申します
地に還る掟の中の身づくろい

大阪府 渡部さと美

娘の家の留守番 庖丁研いでくる
底抜けの笑顔もうまい小悪魔
根まわしが女過ぎます目立ちます
そうめんと奴に頼る水銀柱

貝塚市 行天千代

入院して不自由と思う身の回り
何もかも時間きつちりかこのとり
検査入院ひと月なんて思わざり
絶食や検査点滴 日が暮れる

出雲市 石倉芙佐子

七月は少々暇な神楽面
夢は夢 鬼一匹におかされる
過不足を均せば丁度良い夫婦
胸の底で小さな螢火をとます

羽咋市 三宅ろ亭

無為無策それでも蠅を二匹とる
音無しの構え難局のり切る気
何一つ不自由ない世がいじけ出す
世を斬つてばかりで世の中よくならぬ

松山市 宮尾みのり

生きてゆく知恵を近所の和で貰う
頭数の中に入っている安堵
軽く言うほどストレスの軽くなし
にこにこと舐めたらあかん言うている

茨木市 堀良江

赤も黄もピンクも白も花光る
女どうし銚子一本かたむける
折々の事情知つてた猫の耳
亡くなった十五の顔で夢に出る

鳥取県 津村八重子

この青田黄金に実る日を祈る
まろやかに暖かりし母の背は
おれに似たいびつな花が咲きました
いつの日も出せる笑顔をためておく

鳥取県 さえき や え

花一本で笑ってくれたおじいさん

仏さま 仙台萩が咲きました

三徳山 バカにするから落ちるのよ

夢のまた夢ささゆりを採りにゆく

鳥取県 山 根 八 重

経を読む時は仏になりきって

私の本音 墓石だけに言う

老いてなお笑顔千両はむずかしい

いい夢を残してくれた満月よ

鳥取市 岩 原 喬 水

コップ酒不協和音を消して酔う

名刺見て最敬礼をやり直す

挙式では努力家だったことにする

巢立つまでツバメの母は忙しい

鳥取県 乾 隆 風

息抜きの予定だ暦みてご覧

荷くずれがするから欲はほどほどに

四つん這いになるまで晩酌は続く

暗くとも置き場はわかる一升瓶

鳥取県 乾 喜 与 志

晩酌に目刺し早さを馳走する

度の同じ老眼鏡を四十年

油断している間に水車回り過ぎ

日の丸を盛んに振った時もある

鳥取県 幸 家 單 車

宝石に負けぬ私のいい笑くぼ

大風呂敷が破れて嘘の種が洩れ

宝石を付けてもオカメ治るまい

音のない絵から聞こえる風の音

鳥取県 西 浦 小 鹿

傷ついた自分をのせる青い皿

泥沼へ女の意地がみえてくる

手のうちの猫を信じているわたし

リングでも核の恐怖は知っている

鳥取市 武 田 帆 雀

齒車が合って油の乗りがよい

日焼けした指だが棋力落ちてない

約束が出来なくなつた古時計

菊を挿す箱だよ孫にたずねられ

鳥取県 谷 口 次 男

生菓子に賭けた男に勲五等

捕鯨禁止クジラの缶詰国宝に

菓子箱を重そうに持ち門くぐる

先刻まで口は固いと言つたのに

鳥取県 太 田 幸 枝

弱点を突かれて深い溝が出来

喉仏 灰になつても上に乗り

ポックリと死にたい人が蓬艾買う

気がつけば老人という仲間入り

鳥取県 田 村 きみ子

燃えるものありまだまだ余生光らせる

宝石箱に亡父のパイプが入っていた

化粧する時間たったの二分間

考えが甘くてわたしお人好し

鳥取県 黒 田 くに子

滝に打たれる勇氣はないが手を合わす

了見がせまいと海に叱られる

急がねば賞味期限が過ぎてゆく

急ぐ事はないとすっかり嫁きおくれ

鳥取県 土 橋 睦子

反省を促す母がもういない

仲よしと予定を組んで雨になる

言いわけの声がボリリュームあげている

何も手につかない母の爪を切る

鳥取市 前 田 一枝

何かある蛙もピタと鳴き止んだ

山寺の和尚さん鐘をつき忘れ

祝い事どんどんへらすのし袋

手放すなそろそろ闇が深くなる

鳥取県 西 川 和 子

燃え上がることも無いまま火種老い

もう少し生きるつもり屋根修理

お向いの倉の瓦がずれ出した

あの日から互い違いになっている

鳥根県 石 飛 水 煙

沿線に墓地墓地ここも満員か

妻だからよかったボタンのかけ違い

同情は嫌って路地の奥に住み

窓口で一瞬たじろぐ札の山

米子市 木 村 富美子

海に出た白い蝶々の命ごい

色眼鏡はずせば白が目にしみる

有りがたし今日の終りの箸を持つ

笑顔には国境もなし海もなし

大和郡山市 坊 農 柳 弘

薄味と器で京の鰻料理

ワープロを使って五十路のカモメール

十六夜の月を肴に差し向い

憧れの女憧れのまま夏まつり

芦屋市 黒 田 能 子

迷い道 魔女の助けを借りに行く

バス止めて祭り囃子が通りすぎ

サラリーマン夜店へ少し回り道

盆栽を目当てに父の行く夜店

茨木市 藤 井 正 雄

濃いミルク牧場で飲んで高い雲

孫が画く似顔絵ホクロ定位置に

宅配のリングにくにの古新聞

テレホンカード悲喜交々の穴があく

和歌山市 玉置当代

豊中市 滝北博史

かす汁で大酒飲んだほどに酔い
上昇気流に乗った運勢無駄にせぬ
どっぷりと尻に敷かれて惚れている
一声があれば収まる元の鞘

川西市 松本 ただし

気掛りが風邪とわかった煙草の輪
ダイエツトかグルメで揺れるヤジロベエ
デカンショの人生が良し素寒貧
ドロボーの話刑事のように聞き

池田市 岡本 吉太郎

チャンスにもピエロになれず逃げて行く
酒好きがどつかと座って目がすわる
罪意識なくて自然を入けがす
きつい事言っては電話でとげを抜き

倉吉市 最上和枝

片えくぼ内緒ないしょのいい話
辻占に心の底を見透かされ
わたくしを燃やす枯野に立つ煙
頑なに裏は見せない庭の石

倉吉市 野口節子

豆ほどのしこりに命ゆすられる
老夫婦咳の一つを案じ合う
身を削る思いもあつた回顧欄
春帽子めきめき女らしくなる

五月晴れ身体検査正常値
ええ名前考えたけど子がまだや
流行の傘買ってからまだ降らぬ
雷がこわくて休むとは言えず

和歌山市 田中 みね

おそらくは最初で最後空の旅
遺書残し機上の人となる旅路
わくわくが恐怖となつて乱気流
不死鳥と呼ばれ窮地を切り抜ける

堺市 中野 樺子

あじさいへ雨やさしくて深い彩
腰痛む庭の雑草のしたたかさ
陽やけがこわく日傘日傘に御座候
野菜スーブ体に良かれと三ヶ月

香川県 山地 マツエ

制服を脱ぐと人間取り戻す
福袋時々借りに来る娘
たとう紙を開くと満つる母の愛
スタートは保育器からという命

交野市 福崎 しげお

つまらぬと知りつつ楽し衝動買い
二次会でメッキがはげた優等生
ふるさとの香りに出逢う無人駅
善人の顔で手入れの花畑

富山市 酒井 輝

枚方市 八田 敏

頑なに曲がらぬ道に連れがない
ピーポーが近くで消えて寝付かれぬ
行間の文字は読み手で別の意味
口癖のありがとうにも上手下手

大阪府 八十田 洞 庵

地球儀を回せば火種があり過ぎる

碑の歌をさすり読みして大師廟

弱点を見せまい女のたたずまい

嬰鐸の老いにも白衣いよよメス

出雲市 小玉 満 江

日本画をずらり並べたばたん園
うぐいすの寺有難いお経聞く

寡婦淋し誰もホローしてくれぬ

ガラクタを捨てて一寸淋しいな

堺市 一瀬 福 一

この世相 花は咲いても蝶舞わず

神様のお告げと牧師嘘を言う

言わないと解らず言えは絡むくせ

先頭に立つて緑のシャワー浴び

岡山市 江口 有一朗

左手に科学右手に持つロマン

も一人の自分が少し頼りない

平凡にある幸せを知る非凡

二階まで上がって用事ふと忘れ

五十年まだ空襲の夢を見る

まず褒めて頃見計らう頼みごと

百枚の名刺が減らぬ二度の職

お隣も向いもうちも古い二人

子宝に母の運河は満たされる

青い鳥心の中で育てます

親戚の方がうるさい適齢期

羅針盤時々狂う夫婦舟

東大阪市 安 永 暁 子

手頃さにひと品添える玉子焼

梅雨はれ間 風と元気に布団干す

靴二足 夫婦げんかをしたらしい

お目ざめかりズムにのって舞う金魚

岸和田市 三 輪 通 彦

わだかまりあって笑顔がぎこちない

肩書きもとれ定年の自由席

重いのも自慢のひとと孫を抱く

親の夢詰めて重たい塾かばん

和歌山市 堀 畑 靖 子

ツイてないときも焦らぬ蝸牛

道化にもなれるあなたが好きだから

わたくしの聖書あなたのくれた文

親類のトラブルメーカーから電話

大阪市 清水利武

無理だとは知りつつ無理を言う病氣
反抗期善と悪とを取り違え

清清し顔で天寿九十四

スーパールのトレーのままで出す手抜き

倉吉市 米田幸子

防災に先祖の植えた松も伸び

倉の鍵預ける嫁がやっと来た

憶病な蟻は列から出たがらぬ

無器用で出世階段踏み外す

豊中市 江口明光

方針が無いのが方針 社会党

要る要らぬ捨てる決心つかぬ母

隙間から陽射しが一本洩れた森

豆画伯白い絵具の使い道

岸和田市 藪野けい子

外国に代筆で出す注文書

短冊の代筆たのむ筆不精

素振りて恋を直感しています

当然のおこないにでる表彰状

寝屋川市 堀江光子

北国の朝市にある手の温み

しがみを抜ける一步がたたら踏む

一本の木になり初夏の陽を浴びる

真直ぐな視線の握手信じられ

東大阪市 指宿千枝子

昼のソファ―老父は思い出タイムらし
常備薬並べて老母は水所望

子が巣立ちもとの二人になる戸籍

それが趣味たのしければと持つ絵筆

吹田市 瀬戸まさよ

深刻な顔して話しこむベンチ

服布地をまとわせ世辞を聞く鏡

一仕事済むコーヒーにこの愉悅

ゆったりの水車に惚れた仕事ぶり

豊中市 三宅つえ子

他愛ない話に明日の灯を点す

青空の下で話せば出る本音

ジャンケンで席をゆずった手がぬくい

枯葉踏む足の裏から父の声

和歌山県 西口忠雄

捨てないで首振る母の扇風機

泣き面に喚問待たれるお殿さん

ごろ寝して太りパチンコして細り

送ったら酔いどれ戸口でしゃんとなる

広島市 森田文

小粒だが萼紫陽花の軽快さ

サウナ風呂 体格検査にも似たり

元総理元大将の書に出会う

婉曲な話は苦手 葱坊主

和歌山市 岩 本 美智子

スベードのエース気にせぬ娘の若さ

家族旅行嫁く娘と背なを流し合う

嫁ぐ家の屋根の重さを娘は知らぬ

星の雫で愛の渴きをいやそうか

堺市 近 藤 豊 子

ラッシュアワーいつもの顔とゆられてる

真夜中の駅出てからの街の地図

モノクロの「終着駅」にしのぶ恋

乗車券やぶって捨てて恋おわる

和歌山市 榎 原 公 子

海の香を下げて母さん来てくれる

真相を突くと女の性にあう

この身一つの始末に介錯はいらぬ

こざっぱり洗う普通の妻でよい

大阪市 小 糸 昭 子

明日休み段取一杯つめて寝る

輪の中に居て孤独という電車

プライドは一円玉も持っている

ありがたや大仏様も太うござる

豊中市 辻 川 慶 子

朝顔の苗も下げてる市場籠

海辺の絵に替えてコーヒー店は夏

うっかりと聞けば小骨のささる語尾

好きな人のうしろへ座る片思い

豊中市 井 上 直 次

すらすらと敬語ならべる慇懃さ

聞き流すコツも覚えて夫婦仲

無一文 度胸を決めてよく眠る

鳥取市 西 村 黙 光

熟睡をしたと誇示する高軒

古希迎え独り芝居も堂に入り

父の日へ酒だビールだ饅頭だ

宝塚市 中 田 純 次

聞く耳をもつてはじめて親父なり

うちの嫁おとぼけ上手で角かくす

九層倍ここが噂の道修町

十和田市 小笠原 敏 人

買い置いて送る時には詰め忘れ

買いおいて送る時には空になり

裏表無しで付合う友が居る

大阪市 清 水 絹 子

破産宣告 今更カード無表情

割箸が減らず無口に老夫婦

菖蒲園夫婦歓迎梅雨晴れ間

大阪市 川 端 一 歩

父の日に高くついたと嬉しそう

泊り明け朝風呂ビール昼寝つき

日々平凡そんな日記の人生譜

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ

(44)

橘 高 薫 風

川柳雑誌社は記念事業として百号記念特集号の刊行、祝賀と宣伝の催し「川柳の夕」の開催、百号句会の三つを矢継ぎ早に挙行した。

川柳の夕

五月四日午後七時
於 朝 日 会 館

司会 高尾 亮雄
挨拶 庄 萬よし

川柳を語る

女性活躍
川柳にあらわれたる家庭
人間苦の芸術
川上三太郎
岸本 水府
麻生 路郎

長 唄

新曲 浦 島
唄 杵家 七代
絃 杵家 彌七
絃 杵家 七幸

一休 憩

いとも舞踊

山根舞踊研究所

兎のダンス

絵 日 傘

小高 房子
小高 澄江
橋本 千里
坂口 京子

エジプト 山根 寿子
水兵さん 全 員
喜劇 恋の翼あゝの眼だろるか眼だろるか

喜幕 川 柳 座

次は路郎の「人間苦の芸術」の概要である。世の中の仕事には派手なものと地味なものとがある。地味な方は少しも楽でなく、いつも底を匍つているようで損の様に思われるが必ずしもそうでない。私のやっていることもその地味な方に属する。灘でお酒を造るのを見ていると袋の中へ入れて絞り出しているが、それと同じように私達も生活からくる人間苦を川柳として絞り出すのである。しかし、その絞り出された汁も段々古くなって行くから、次から次へと更に絞って行く。

古川柳は文化文政以後の頹廢期から本質を誤り伝えられてしまったので、優れた古句へ引き戻し、もっと進んだ質のものにしたいと思ひ、その努力の一端として「川柳雑誌」の刊行を行い、今や百号に達したのである。こうした地味な仕事には、軍人が戦争に行く時

の様に、麻生万歳！とも何とも言つて貰えないし、途中で倒れても号外一つ出しては貰えない。幸に今「川柳雑誌」が百号を重ね得て、それは甚だ遙かにはあるが、万歳の声が聞えて来たわけで、自分としてもうれしく思っている。

私の家庭には八人の子供があつた。四女に奈那というのがあるが、その名前の出た理由は「なんぞなんぞ生れきしや」という所から来たのである。大正九年の経済界の恐慌の時に生れたからで、その当時の私の句に、

天井の低さも知らず子は生れ

がある。それほど私の家は貧乏なのである。が、しかし川柳をやれば貧乏するのかと思われたら困る。学校を出て二十年を金儲けに終始している人達さえ儲かぬ金ではないか。私は貧乏ではあるが貧乏に屈しないで生きて来た。これも川柳に倣したおかげだと思つた。

俺に似よ俺に似るなと子と思ひ

これは私の句である。私は至つて子煩悩であるからこんな句が出来るのである。一句を永く後世に残して置きたいと思われる方は作句に精進をして戴きたい。そうでないかたは川柳を読んで自分の人生の滋味として戴きたい。路郎先生の講演は、芸術の殿堂朝日会館を埋めた千余人の聴衆に深い感銘を与えた。

自選集

工藤甲吉

八木千代

脱税の番付が無い片手落ち
久々に笑えば仏さんも笑う
金儲けするにもやはり金が必要
目の外にばかりこぼれる目の薬
大根をスパッと切ってうつ終る

藤村 女

恒松 町紅

忘れたい思い出ばかり盆の月
新盆の月は哀しい顔を見せ
野の仏きれいに染めて盆の月
蓮の花あげて仏と対話する
盆の月のせて精霊舟静か

野田素身郎

松川 杜的

覚悟していても棺打つ音に泣く
うどん定いつもの席が空いている
かつらまでして若く見せたいのか友よ
洋式トイレに改造をして便秘
孫が来る上へ上へと物かわす

楽なほうへと桃も流れてゆきたがる
寝たきりの姉は苦なのか楽なのか
風船を楽に遊ばせたく思う
楽になったらわたしの影はのたうつよ
たのしみを先送りしてながらえる
仏壇は老母 近所は妻任せ
井の中で天狗蛙の自尊心
肩書が鍍金のようにある名刺
老骨のあせり言葉が慌て出す
子育てを老母に負わせニールツク
検査せにや分かん医者に頼り切り
ふと淋し妻の歩幅に従いてけぬ
ポストまで行くズボンを穿き替える
争えぬ眼尻 小百合も年齢をとり
禅寺の蹲踞ビールが冷えている

水粉千翁

小西雄々

晴れ曇りサラリーマンとして歩く
ひたすらにうづくまるとき恋はるか
恋に燃え尽きる薪木を束ねている
情熱と嫉妬に極彩色の恋
すねたのも楽し時計が進まない

民宿の柱時計の深情け
足跡もとだえたままの無縁塚
灯台の明かりへつきぬ思慕追慕
半額の眼鏡で歪む世相見る
追いつ返す魔へ火の鳥を千羽折る

野村太茂津

児島与呂志

傲慢を軽蔑しとく筆滑る
野蠻傲慢そして呆れるほど卑屈
かと言うて慎ましきにも無い美点
強い主張あくまで通すのも美景
没法子 空しさ消えぬ焼却炉

言い負けて朝のドラマに教えられ
後輩の死をうっかりと見落しぬ
底なしの井戸の釣瓶は切れたまま
根来風夏のざわめきある噂
この辺で止めとくつもの言い訳し

波多野五楽庵

有働芳仙

運命の波にゆだねているのです
花びらの祇園精舎に入りかけ
遠花火 私情を伝えかねている
魚市場 恨みのこもる目の白さ
ポケットの内緒話が洩れてくる

日向は一日老体もて余し
形だけの夫唱婦随の足の幅
生きていることに疲れた顔が寄り
嫁ぐ娘へ贈る言葉が見当らず
ライバルへ今日は勝つ気のコンパクト

辻 白溪子

金井文秋

手のすいた刑事がお茶を入れてくれ
自転車が歩道邪魔するパチンコ屋
お守りを無理に持たせて旅へ出る
何着ても似合っていない太い脚
ふところは軽いがカード持っている

用心してる心をほぐす口車
めしのまずい日がある米のせいではなく
反省しろだけで許せる罪もある
一聞いて十書く芸能記者のペン
筆禍にはならぬ程度がよいコラム

正本水客

あじさいの雨におぼれてみたくなる
病妻をつれての旅から一句くる

花の精 白き両手を下げてゐる (弘前夜桜の幻想)

うち重なり重なり花重し

津軽三昧の音に花みがまえて身構えて

月原宵明

あじさいの浮気 角出す蝸牛

標札を守る亡夫の靴を置く

花ざくろ恋に破れた猫帰る

セクハラの抗議羨む歳となる

一合の酒を飲まさぬ膝を抱く

遠山可住

外交が変り銀行もう来ない

予約なきいのちひたすら歩くのみ

古傷がぼろいはなしに乗って来ぬ

年金の框で恥にも慣れて来る

路地裏に一番うまい酒がある

藤井明朗

みどりの香ちまきに母の味つつむ

雨に咲く花あじさいの雨おんな

川は流れる幸せな岸素通りす

釣竿の流れる中に鮎おどる

新米の予約 外米に慣れて夏

大矢十郎

熊野古道ようこそという水の音

お猿さんの赤ちゃん教科に曰く

医者ですすめる孝行へ腹を立て

万感の満ちた頃から眠くなり

凡妻の拗ねたへ凡夫術もなく

奥谷弘朗

人生の重さに耐えてしゃんと立ち

一言が今日の疲れをときほぐす

シベリアの友と再会嬉しい日

さらさらと色紙に書けるまでに成り

代表が良心的で案じられ

小林由多香

ふる里の風ちちははの匂する

指切りを花時計にも見てもらう

禁煙の約束だけは二度とせぬ

さわやかな吟行会で句に悩む

大記録破ってからの荷が重い

久家代仕男

牛飼いを志願 町から嫁が来る

影法師だけが私を裏切らぬ

頻尿の癖に濃い目の緑茶好き

食べ頃の西瓜カラスが知っていた

気疲れの妻にやさしい風よ吹け

聴いている見ている莫迦な政治論
人ごとと思えぬ妻と救急車

悪人がいて善人がよく光り

何時までの雨期かベッドの妻と耐え
ご先祖とおんなじお茶を飲んでいる

身も心も浮かせて速し高速船(隠岐の旅)

昼めしに小さな網で烏賊を焼く

馬糞牛糞踏み越え摩天崖に立つ

八百杉を首痛くして見上げたり

暗夜の脱島 鳥も鳴かずに帝送る

寿の風呂敷を出す佳き日なり

今日も美味しそうにビール飲んでいる

老母に一人の妹があり遠く棲み

五目ずしくらいに母はうれしそう

仏壇を閉じ一日が無事に過ぎ

胎動へ呼びかけているパパ ママ語

被害者の水には流しきれぬ過去

愚妻にはいつも感謝をしています

よう弾む紅一点をもて余す

満一年まだ杖の要るもどかしさ(6月25日転倒骨折一周年)

高杉鬼遊

黒川紫香

小出智子

西田柳宏子

第18回 全日本川柳群馬大会 (秀句)

文部大臣奨励賞

要らぬ子は一人も居ない母子手帳

川柳大賞

美しい言葉で神を売りに来る

「躍る」

群像が躍る歴史の幕があく

眼の鱗落とす一語へ躍る手話

「競う」

母の折る鶴にはとてもかなわない

やがて子の前へはだかる父の首

「人生」

人生を二倍楽しむ祭り好き

尽くすだけ母の人生何だろう

「旗」

頂点の旗振り向けば敵がいる

九条へ日の丸白く白くする

「器(うつわ)」

寡婦という器で強い芯を燃る

相克の器に鬼の面を彫る

「育つ」

葱坊主天を味方にして育つ

要らぬ子は一人も居ない母子手帳

「美」

美しい言葉で神を売りに来る

少年にガラスの都市が美しい

愛知 山本 桜子

東京 伊藤 正紀
佐藤 曙光 選

長野 佐藤 秀治
青森 加川 勝美

唐沢 春樹 選
愛知 山本 隆子

岩井 三窓 選
埼玉 須田 尚美

米沢 苦郎 選
埼玉 松岡 葉路

東京 斎藤由紀子
田中寿々夢 選

長野 吉池 文醇
三重 須場 秋寿

細川 聖夜 選
三重 木野由紀子
愛知 山本 桜子
安藤富久男 選
東京 伊藤 正紀
埼玉 松岡 葉路

川柳太平記 (195)

川柳の群像

草刈蒼之助

東野 大八

若い頃、元気だった現代川柳派の総師今井鴨平と生ビールを飲みながら、「一体、草刈蒼之助とは何者だ……」と筆者が語調強く、相手にそう訊いたことがある。鴨平はニヤリとして撫然と答えた。「おれだって奴の得体が知れんのだ」。時に昭和30年ごろ（というから古い話だ）、岐阜県は、現代川柳派のメッカだった。

まず鴨平が、伝習派の柳誌『川柳うかご』を離れて『人間像』を昭和28年発刊したのに始まり、清水旺夕・金森冬樹夫・寺松凡石らの現代川柳派の若手が、続々と独自の柳誌を発刊し合った。『創天』『地上派』『無形像』などで、これらのすべてに鴨平の息がかっていた。

加えてこの鴨平は、河野春三・山村祐など

と図り、昭和32年には岐阜県で現代川柳連盟の結成準備会を開き、鴨平が委員長に推され、それが発足すると機関誌『現代川柳』が誕生するといふあわただしさであった。蒼之助はこの鴨平の人柄と作品に傾倒し、彼もまた、『腕』を発刊するのである。

長くなるので、この彼について、小田無限の義弟に当る花田俊典が『川柳人』（昭和60・11号）に執筆した約九頁にもわたる「現代川柳人考・草刈蒼之助のこと」の稿から要約する。

「『草刈草之助とは何だろう。いや彼をかくまで駆りたてているものの正体は、いったい何だろう。たとえば河野春三は、蒼之助のことを『蒼鬼』とよぶ（『色即色』付載解題）。時実新子も同様に「ニヒルで豪胆で、そのくせ繊細な神経の青鬼」と呼んでいる。そして

次の句からすれば、当の彼自身、「鬼」を自ら名乗っているらしい。

孤鬼庵の灯よりも雪はゆたかなり

『孤峰院鬼烈蒼涯』我なり（戒名を作るの記）いかにも彼には鬼気はある。

新川洋洋は、むしろ彼は「鬼になりきれない」「隠者である」と言う。松本芳味もまた「反体制者・叛逆者・破滅者・無用者としての鬼を、現代に再生させるとしたら、蒼之助はたしかに鬼を具現しているかもしれない。しかし、ほんらい鬼はイメージである。荒々しいまががしさ、攻撃的な能動性に欠けるゆえ、ともすれば「世捨て人」「逃避者」に堕しかねないと苦言を呈している（いずれも川柳ジャーナル所載）。

草刈蒼之助の本名は下条房一。筆名を考えた時、「蒼空の下で草刈る鎌の音」という十七字が自然に浮かんだそうだ。句集は二冊ある。『草刈蒼之助集』（私版・短評型文学全書38・川柳篇第4集）（八幡社・昭和48）と『色即色』（『風』発行所・昭和55）で、ともに巻末に「著者小歴」が付されている。

大正二・一・一。生れ。十三歳母を喪う。爾來五年、生死を彷徨う病褥にあり父の看護を受く。文学へのその秋に始まる。姉の狂死、弟の出奔自滅、父の爆死等、肉親の壊滅滅く。

放蕩無頼の青年期を経て三十歳、故井鴨平の知遇を得、短詩型への関心始めて湧く。その主宰誌に作品を発表。以後、清水旺々と『創天』『腕』を占拠して川柳模索の一時期を捉う。『馬』への寄稿を契機に、傾倒融合して今日に至るも、歳月を病苦と酔溺に埋めて、作品活動極めて薄きを愧じる。

蒼之助の生家は、岐阜市内の富裕な機織業「丸房」で、彼はその長男として祝福されてこの世に生を享ける。少年時に母親を肺病で亡くし、彼もほぼ時を同じくして肺病を患った。姉の狂死、弟の出自自滅、父の爆死とあるが、その多くは肺病で、父の爆死は戦禍の急死であつたらしい。肺病はやがて宿痾と化し、彼は後年、次のような句をつくる。

坂く血の鼻の穴までこみあげる

洗面器この血は亡母も咯きし血か

食い殺したのは何 唇の血濯ぎけり

吐きつづく父母がつくりし緋縮緬

文学への接近はこのころからであった。病床から、目につく各雑誌、詩誌などに投稿。二十歳の頃、文学熱の昂じるまま、親の金をこっそり持ち出し、同人誌『文学新人』を発刊、『改造』へ百枚の作品で応募、『文芸首都』にも投稿して広津和郎から期待されたことがあったという。しかし、凶変相次ぐ死の

惨状の暮しから父親と対立、思いあまつて睡眠薬自殺を図つたが、死に切れず、とうとう勘当されてしまふ。

家をとび出した彼は自暴自棄となり、酒と女と賭博に溺れる日々を過ごし、賭博のトラブルから一年間、各地を放浪する。

賭場のはてお尋ね者に名を連ね

風呂敷を抱え無名の橋渡る

死にたがる鬼を飼っていた 春

身心ともに荒廃しつくした彼に大きな転機をもたらしたのは、今井鴨平との出会いであった。かくて骨の髄まで現代川柳人になる。

しかし、昭和39年鴨平が急死した。彼のエッセー『白痴の眼球に漂泊する河野春三』(川流ジャーナル別冊)から、河野春三と邂逅し、意気投合して「莫迦と違つか俺と歩けり」とその緊密ぶりの一例は「色即色」の蒼之助の跋に、蒼之助像を詳細にわたり描写している点にも窺いとれる。

この花田俊典記述の蒼之助像は、えんえんと尽きることがないが、その結びにこうある。「蒼之助の演じる狂気は、ただし一時の便法でも無目的でもない。はっきりと見定められた方向を備えている。具体的ではないながら、いや、とうてい具体的には明らかにしないほど遙かな方向へ、狂気の中心の目が向

いている。

杉一樹狂う日も天を指す

千帖の畳で太鼓ひとり打つ

蒼之助の真骨頂がここにある。彼が懸命に求めているのは、すでに失われしまふこととばにほかならない。ばくが彼を入修羅と呼ぶゆえんだ。

季刊『川柳サーカス』は、No.14で「草刈蒼之助追悼号」を出し、前記の花田稿を再録しているが、片柳哲郎の『現代川柳新思潮』はその創刊号の後記に次のように書いている。

「草刈蒼之助は、絶望の闇の中に独り燃えて、その炎は永劫の氏の夜を照らしたのであつた。季刊サーカスがその蒼之助一代に心をこめて賛歌を贈った。川柳界のやさしさだ」平成4年8月9日、本とベッド一つでいっぱい四畳半の間で八十歳で昇天した。

「この朝、突然の不眠に襲われた私は、ジャズサックスのCDをセッットしたが、妙な違和感に落ちつけず、仏間にある浄土真宗正信偈一卷のテープをかけた。時に午前四時、我が家の眼の先の草刈家で、わが慈父草刈蒼之助は逝つた」(梅村暦郎句集『花火』あとがき)

五寸釘より妖しい瘦身なり 蒼之助

鬼は助かつて坐り 風は死ぬ

▼次号は「伊東 静夢」

柳籠裏三篇研究 (二十二丁)

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博

鈴木倉之助 故岡田 甫

277 けいせいのあいそ吹がらのめとい、 五扇

西原 遊女の姿態の一。客の歛心を買うに、吸つけ煙草がある。

主題句は、自分が三口・四口も吸って、残った吹がらを愛想にどうぞとは、誠に、にくつたらしいものだといふのであろう。

八木 大体賛成であるが、少し異なる。「誠ににくつたらしいもの」ではなく、客は結構その「吹がら」をありがたがって、やに下がっていたのではないか。女郎に吸い付けてもらって、女郎の吸った後をもらうのが、嬉しかったものと思う。「あいそ吹がらのめとて茶化して言ってる所が面白いのだ。」

鈴木 礎稿でよいでしょう。客は「チェツ、

のめいもんだ」とやや向かつ腹。
岡田 向かつ腹でなく、みんな嬉しがるのを考えて見れば……なり。

278 初かつほよんでかへるとげびる也 雅情

西原 「下び(倭訓栞)ゲビ上ビに対して下ビと云俗語也」(俚言集覧)、即ち下卑るで、いやしく見える意。

初鰹を売るのは威勢があり、スピードがあり、高価である。

初松魚飛ぶがごとくに通町 一一一 15

魚が違ひやすと鰹振り向かず 拾一 17

ところが、たまたま、値の折り合いがつかず、に去りかけた鰹売りが、また一声に、やっぱりと戻ってきた。これはやはりげびる。

佐藤 鰹売を呼び止めたまではよかったが、あまり高価なので買わずに戻る。

岩田 佐藤氏説賛。「値が出来ず」に帰ったのであろう。

鈴木 佐藤兄説に賛。買手が呼び止めておいて買わずに戻るのは「げびる也」です。

岡田 同。

279 行気ならくふハむだ、とけちなつれ仙賀

西原 吉原へ行く気なら、食うのは無駄である。金も時間も、もったいないなどと言うのは、甚だけちな連れであることよ。場所は真崎でも葛西太郎でも、吉原近在ならばどこでもよろしかろう。

田楽を食ひともかくも 拾五 33

瀬川 賛。食ひ気なしの色気ばかりの奴。

佐藤 「登楼すれば、膳が出るので、何も腹ごしらえなどして行く必要はあるまい。無駄な金は遣うな」とけちな連中。

岩田 佐藤氏説賛。

鈴木 同。

岡田 吉原では二朱の客ならどう、一分の客ならどうというように、酒とおつまみ(ないし料理)は形ばかりながら出たのです。

280 泰成は落し保名ハばかされる 住の江

西原 玉藻の前と葛の葉の故事。

同じ安部姓でも、泰成は近衛帝の寵妃玉藻の前の化の皮をはがし、保名は白狐の葛の葉と妹背の契りをむすんだが、それは化かされていたことになる。

ばかされて得をしたのは安名なり

安五仁 4

やすなりと安名のきつね大ちがい

安四満 2

七久保 贊。

泰成は見出し保名ハ化カされる 四六 24

鈴木・岡田 贊。

281 座敷牢歌をうたつてしかられる 雨譚

西原 実に気楽なやつである。座敷牢に入れたドラ息子、いっこうに目ざめぬ。悔いはなく、小唄端歌などを口三味線づきでやっている。親や叔父などに叱られるのも当然。あきれたもの。

座敷ろつしやれ本をかし叱られる 二五 24

岩田 贊。『うた』とは何を指しているのか。

鈴木 贊。

『うた』は当時流行の、『めりや

す』でしよう。

岡田 贊。

282 山桜せんざい集へちりのこり 住の江

西原 俊成の千載集と薩摩守平忠度の故事。

忠度が狐川より引き返し、俊成の家にいき、歌の望を嘆く。後に「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」を載せた話である。謡曲「忠度」には、「行きくれて云々」があるが、この歌は出てこない。やはり平家物語からの句作である。

読人は散りても残る山ざくら

六七 2

千歳に日陰のさくら一本いれ

二九 3

名の知れぬ桜も千の集へ入れ

三八 5

瀬川 贊。ことばのあやでもった句。

岩田 贊。言葉のあやとは言い条、素直で奇麗な句と思う。

鈴木 贊。

岡田 贊。佳句。

岡田 同。佳句。

283 相傘で弁天尋ねるにくひ事 孤舟

西原 中島弁財天、不忍池の中島にあり。

(中略) 新たに中島を築立て、弁天の祠を建立せられしと」(江戸名所図会)。

そこに合茶屋があったことは有名。現今

も一軒形骸がある。

相傘で弁天―出合茶屋へいくとは。ひがむなく。

鈴木 贊。

相傘はたまつて通すものでなし 二〇 27

と言われた当時、まして弁天(出合茶屋)を尋ねるとはにくひ事かな。

岡田 同。

284 ひよつとももの出し居風呂で気をへらし 五帆

西原 据風呂に入ったのに、栓の具合でもわるくなつて漏りはじめたのであろう。段々湯の量がへつていく。はらはらする趣。

居風呂が漏るわくとかしこまり

武一六 5

岩田 贊。「気をへらす」については、

髭ぬきの鏡に娘気をへらし

一 39

料理人氣のへる程にくづを出シ

四 32

気がへると小遣帳をやめにする

五 27

などの例句から、気根をくたびれさす、気がたびれがする、ナーヴァスになる、という方が基本的であり、「はら／＼する」だけでは覆いきれぬ語感を有する。

鈴木 贊。

岡田 同。

秀句鑑賞

同人吟 田中正坊

7月号から

雑学の私は、さまざまな分野の本を読みま

す。しかし、私なりにいっしょうけんめいに
読んでも分からない本があります。初めのう
ちは、私に読解力がない、つまり頭が悪いか
らだろうと思っていました。ある時、本を
書く立場になって考えてみました。

専門書ならいざ知らず、私が手にする程度
—例えば岩波新書のような一般読者を対象と
する本であって、中程度の知識水準の私が読
んで理解できないのは、すこし乱暴な言い方
かも知れないが、書き手のほうに問題がある
のではないのでしょうか。高度の内容を分かり
やすく表現することが望ましいと思います。

川柳を知ってからようやく十年余、まだ手
さぐりで句を書いていますが、柳誌編集とい
う仕事を通じて、現代における川柳のありよ
うについては、すこしずつ見えてきました。

前半にのべたことをそのまま川柳にあてはめ
ることはできないが、秀句の一つの条件とし
て深い中身を平明に表現することを挙げても
いいでしょう。今回はこれを物指にしました。

八十を越せば人間エリートぞ

指宿 千枝子

今回は巻頭からではなく、ややもすれば見
すこされやすい巻末に近い三、四句組からも
鑑賞の対象句を選ばせていただきました。そ
の中に目立たないが、内奥にキラリと光るも
のを秘めた句が少なくないからです。

ウーン、この句を見てうなりました。エリ
ートとは、正に選ばれた人です。高齢者が一
人亡くなることは、図書館が一つつぶれるの
と同じだと言った人がいます。私も健康に気
をつけて長生きし、エリートになりたい。

鉛筆を削れるひとがお友だち

滝北博史

昔懐かしい肥後守で鉛筆を削っている人を
近ごろ、見かけたことがあります。私は、
ボールペンやシャープペンシルをたくさん持
っています。原稿は鉛筆で書いています。

さすがに昔のように小刀では削らず、手回し
の鉛筆削り機を使っていますが、博史さん
それでもお友だちにくれますか。

笑っても泣いても齢は隠せない

田村 きみ子

エリートがエリートであることを隠す必要
はありません。高齢者こそは、きわめて厳し
いサバイバルゲームを勝ち抜いてきた勝利者
なのです。

長生きはしたし嫌われたくはなし

田中 文時

そうなんです。いくら長生きをしても、イ
ヤナ老人になったのでは、人生たのしくは
ありません。先輩ぶって威張ったり、聞きた
くもない昔話を得々としやべったりするのは
どうかと思います。女性はいくつになっても
身だしなみを忘れず、男性もまた身ぎれいに
して、若い人たちから素敵なオバサマ、オジ
サマと言われたいものですね。

嘘ついてみたらすんなり信じられ

板東 倫子

こんなことって、実際にありますよね。嘘
ついた方が悪いのか、信じた方が悪いのか。
どっちでもいいと思いますよ。

お迎えを待ってるなんて嘘つばち

赤川 菊野

例えば、こんな嘘が多いですね。死にたい
を口癖にしながら、長生きをさせてください
と神様に祈っている人を私は知っています。

鏡より写真にみえる真の老い

林 露 杖

いやですね。また、「老い」の句です。しかし、これは本当なんです。鏡なら自分が気に入った角度から映えますが、カメラのレンズは非情です。先日もアップで写された写真を見てガツクリきました。なあーんだ、さっきは悟りきったようなことを言っておいて、アツハツハ齡と言う厄介もの忘れ

川 端 柳 子

それそれ、これで行きましようや。笑っても泣いても、齢は勝手に進行するのですから気にしたって仕様がありません。それよりも明日をどう生きるかを考えましよう。

生きざまに上手も下手もない命

山 本 玉 恵

何が難しいと言っても、如何に生きるかということほど、難しいものではありません。古今東西、これが文学や思想の主題となってきたのですから。すこし上手に生きただからと言って、それが何ほどのことでしょうか。

背比べをしても所詮は水芭蕉

福 井 桂 香

五本、きれいに並んだ花の中からこの句をピックアップしました。実はどの句を取り上げようかと、花の色香に迷いました。

穴掘ると等身大になつていく

政 岡 日枝子

私も五十年前、毎日せつせと穴を掘りました。自分の体がスッポリと入る、通称「タコツボ」という一人用の壕です。やはり体の大きい兵隊は、大きい壕を掘っていました。蟹は甲羅に似せて穴を掘るというではありませんか。水芭蕉ではありませんが、如何に競つてみても、人間のすることはたかが知れています。等身大の穴、つまり自分流の川柳を書きつづけたいものです。

夕焼けが好きで夫をすぐに呼ぶ

吉 村 一 風

「お父さん、早くきなさい。夕焼けがとってもきれいですよ」と呼ぶ一風夫人の声が聞こえるようです。私の妻はお月様が好きで、満月を見ると私に声をかけます。「ひと月に一回、月が満ちるのは決まってる」と、私は振り向きもしません。

泣いたらあかん泣いたらあかと泣いている

天 正 千 梢

今回の中で、いちばん長い句。氣丈に見える千梢さんの、ご主人を亡くされた哀しみがじかに伝わってきます。ご一緒に中国旅行をした間柄だけに、在りし日のご夫妻の仲むつまじい姿が目に見えてきます。

残り火へ注ぐ命の美酒一献

森 下 愛 論

同じ上戸仲間として共感。若い時からみれば量はグンと落ちたものの、何をおいても晩酌は欠かせません。銘柄は何であつても、一杯の酒は、残り火をかきたてるための文字とおりの美酒です。医師がグズグズ言おうと、これが体に悪いはずはありません。実り多い余生のために乾杯！

かしこさをチラリと見せる馬鹿な人

新 家 完 司

賢くない人ほど、賢そうに見せたがるものです。「ばかほど賢がる」と言うではありませんか。しかし、「チラリ」というところが憎いですね。お互いに気をつけなければ。父親は由緒ただしなまけもの

トリの句に選びました。あれこれと注釈をつけるまでもないでしょう。私もこういう人になりたいと思います。

江 原 とみお

主としてこれまで余り取り上げられていない方の句を対象としました。こんな風変わりな秀句鑑賞がたまにあつてもいいと思います。

実は今月、複数の同人に執筆を依頼したのですが、いずれも都合が悪くて時間切れとなり、私が責めを果たす格好となりました。

水煙抄

黒川紫香選

宿毛市 岡村千鳥

八重歯チラリ新人歌手のまだ幼

秋めて年金夫婦うつに入る

妖艶な狸に骨をみな抜かれ

たわいない話で主婦のティータイム

生きざまのすべてを記す五七五

茨木市 島元ふみ

乳母車押してる女に道を聞く

赤ちゃんを久しく抱いたことがない

川向う柴又だった新世帯

それなりに青春でした戦時中

薬害もこわいし飲まぬのもこわい

尼崎市 長浜澄子

ペンの音冴え狂おしい夜の闇

ピラニアが裾翻す朝の駅

火柱がぐらり 身を灼く恋蜚

又の日は無いかも枕元の花

移ろいの哀しみ背骨から曲がる

富山県 高島五月

野苺と過ぎたロマンを語り合う

思い切り泣けと夕日が沈みます

淋しくて無性に友に電話する

ボールペンわがままばかり母に書く

雨を待つ茄子も胡瓜もわたくしも

富山市 島ひかる

涙して語るおとこへ貰い泣き

やんわりと諭してくれる他人が居る

初なりのお下がり今朝のおみそ汁

誰か来た気配がのこる父の墓

カーテンの揺れが気になる夏座敷

宝塚市 永田暁風

柳は風に風も柳に揺れました

別々に夫婦が遇った狐雨

一瞬の絆が今もつきまとう

秋風かポストの底へ落ちた音

相談ちの女と別れ青いランブ

西宮市 古谷 ひろ子

よその子も駆けこんでくる母の傘

さしかけた方が濡れてる俄雨

名水で飲ませる鄙のコーヒー館

もう一度やり直そうと夫婦そば

居酒屋の蚊がついてくる雨もよい

広島市 流 奈美子

幼子の独演 笑い袋がはち切れる

価値観の違いを悟る今日の雨

言論の自由時々脱線する

心裂く思いで庭の木を倒す

悲喜劇も雲と流れて黄昏る

熊本県 大川 幸子

飴七分使い上手になって来た

大袈裟に聞こう真面目な子の話

万歩計つけたら誰にも負けぬ蟻

すぐに出ぬ言葉ついつい手話になる

散歩にも出られず靴も病んでいる

熊本県 宇野 照代

野良猫に名を付け親しみ湧いてくる

父の日を忘れないでと子へ電話

女の伴せ母娘の主張ずれたまま

さらさらと隣のペンを走る句座

お化粧を落して私の顔になる

名古屋市 藤井 高子

青春の真つただ中の向日葵よ

菜園に匂を教える実が赤い

八月の雲が涙を呼びに来る

ホッチキスで止めて素案はお蔵入り

ハンカチを解きつ丸めつ言い出せず

和歌山市 杉山 精子

哀しくてそして愛しい恋螢

織り姫の涙哀しい音で降る

砂塵舞う故郷の土にある温み

この森を走ると光差してくる

ピリオドの無い生きざまが続いてる

福岡市 森 志げる

納得のいくまでマグマ治まらず

正直に本音を吐いてから不遇

的を衝くジョークが返り血を浴びる

ためらうと男の傘を畳めない

自信満々喫水線を深くする

香川県 辻 上よしみ

笑っても笑っても来ぬ福の神

有難さ忘れてしまった満足度

飲み込んで納得したが気は晴れず

飲み込んだ言葉が後で顔に来る

のんべえの顔が並んだ縄のれん

尼崎市の場 十四郎

流れ星 男は夢とあきらめる
ライバルは川の向うで策を練る
お早うと孫の声から朝明ける
繕いの針はもたない現代娘
背後から攻める男の二枚舌

豊中市 石川 勝

仮衣裳だまし通せるものでない
執刀医の誤診見ていた千羽鶴
正直な朝を見たくて窓を拭く
人体図そこまで晒すことはない
信号の青を疑う日の疲れ

田辺市 大峠 可動

心には心をかえす砂時計
弱肉強食 運だ運だと落ちてゆく
風はここに月は背骨のまるさかな
善人で風の器にすぐ嵌まり
独り言いくつうたえば浄土かな

尼崎市 田辺 鹿太

直角に曲れば影がうろたえる
子燕が巢立ち駅舎の灯が寒い
漂流をはじめた恋は実らない
さざ波を立たせて女 風に乗る
芸をする犬からもう妥協ぐせ

静岡市 沢田 きん

忘れたことが邪魔して眠れない
ときめきへ派手を選んだ試着室
美しい夢の余韻を温めてる
旧友ときのうのように語る過去

富山市 鍋谷 富士子

新緑に誘われふらり出る散歩
へそくりの場所忘れぬように確かめる
誰にもいえぬ心の傷が痛み出す
物の命かるく見ている使い捨て

丸亀市 薦 沢 翠

Vサインして父ちゃんがいなくなる
しょうもない夢を見ているおなこです
雨つぶか涙か封筒濡れている
カニの顔見ないでカニをゆでている

芦別市 斎藤 房子

遠き日の慕情にゆれる風の街
パレットに色溶き果たし夏熟れる
青い実が熟れて夫婦に渇水期
孤独ではないさ時計が鳴っている

沖繩県 杉谷 一栄

無遠慮に見ている孫のイヤリング
ライバルのカードが先に表向く
浮きそうなからだ湯の中伸ばす足
待ちばうけ小公園のすべり台

熊本県 岩切康子

出勤へ早起きさせる雨の音
日曜の女素顔で日が暮れる
伸びきって川面に揺らぐ常夜灯
たくましい草に勝つまで鎌を研ぐ

藤井寺市 高田美代子

祭り囃子が仕事の邪魔をして困る
流れ星どこへ落ちたか気にかかり
カタツムリ雨のバラード聴いている
普段着になればスラスラ出る言葉

西宮市 岡本道子

寂しくて犬はひと声吠えてみる
底ぬけの晴天 靴の底を干す
バラ散って風吹き抜ける二三日
友情は鯛の目玉を譲り合う

尼崎市 野瀬昌子

梅雨が来る前にすまそう夏支度
裸電球昔話がよく似合う
一日を短くおもう衣替え
新しい布団やさしい夢を見る

尼崎市 尾宮弘治

病む母が見舞いの客に疲れきる
足病んで口の達者な妻になる
寝言また言いましたかと旅の宿
俎に思案が長い主夫料理

久留米市 鶴久百万両

無為徒食 妻には申し訳がない
きみに習った歌をデュエットしたくなる
友を裏切る 勝利のワインなど飲めぬ
最後まで騙されてやる これも愛

兵庫県 森脇和子

やれやれと肩の荷下ろすと席が無い
おのろけを聞いて聞かせて旅の宿
皿数を一つ増やして句の味
快い目覚め雀も軒に来て

旭川市 朝倉大柏

追風に喋り過ぎてる風車
非行の子も握れば温い手をしてる
自慢ではないが待っててくれる妻
行き詰まり置きどころない手を見つめ

米子市 足立由美子

新風をおこすシナリオ書いている
小説家気分でペンを雨の午後
その時は鬼にもなれる勇氣持つ
父の打つ太鼓リズムにして暮らす

和歌山市 山根恵美

母の舌 父の分までよく回る
祭寿司 姑は許してくれている
耳打ちをするから秘密めいてくる
梅漬けて母の存在光り出す

西宮市 山本義子

えんどう豆むく指先は夏の色
焼きおむすび今はグリの一品に
風が出た風に乗るのも一つの手
年金をあげて下さる通知きた

西宮市 亀岡哲子

ぶどうパン甘く焦がして朝ドラマ
色鉛筆で画くと小さな花ばかり
夏大根の辛さに弱く若い父
陽を除けて陽に焼けて来たパナマ帽

熊本市 遠山夏生

殊更に妻をいたわる気の弱り
宝石展よっぽど暇な目が遊ぶ
名刺裏まで肩書の好きな人
ふるさとの匂のまんま祖母が来る

今治市 塩路よしみ

底辺で肩よせ合っているいのち
歳月の重み夫婦の顔になる
心まで盗まれそうな橋渡る
捨て切れぬ古里がある母がいる

今治市 野村清美

ひたすらに時を流した砂時計
旅先の娘から受話器に波の音
雨上がり若葉が匂う水たまり
水中花実らぬままに年を取り

岡山市 中嶋千恵子

一番に真実話す母の膝
雀二羽 欲とケチとの話し合い
冗談でいつも笑いの楽天家
小糠雨デートの相手見つからず

松山市 丹下美津子

赤字路線 市が温情のバス走る
たわいないお喋りだから面白い
黒潮の波が作った芸術美
ふる里捨てて手に手を取ってからドラマ

長岡京市 山田葉子

見定めて最短距離をゆく男
五合目で味方数えている男
受け入れて浅い眠りに身を任す
脱ぎ棄てた服に未練はないピエロ

新潟県 高野不二

度忘れとまた違ってる物忘れ
図書館に俺にもわかる本がある
年金で二月毎の赤字埋め
カラオケのないバーでまた呑み直し

今治市 渡辺南奉

ライバルに横取りされた油揚げ
ゴキブリも蠅も必死に生きている
べからずとあるから開けて見たくなる
マンガから教わることがたとある

尼崎市 吉 永 伊三郎

学閥は消えても序列ある世間
癖のある暑中見舞いがきて達者
夏休み疲れた頃に赤トンボ
トンボ捕り指を回して逃げられる

西宮市 菊 池 トミエ

蓑虫よぶらり私も今無職
星占いやつと覚えた水がめ座
テキパキとタコ焼包む手に見とれ
ホームステイ浮世絵模様がお気に入り

香川県 堤 く に 子

もう少し品良く鳴けヨ雨蛙
鍵っ子の心知ってる縫いぐるみ
血統書付きで気位高い犬
追いつめた心の狭さ恥じている

和歌山市 古久保 和 子

会釈してそれから少し考える
目が回るほど忙しいのがお口
愚痴話すために習った腹話術
シャッターを押すと誰かが目を瞑る

大阪市 江 城 修 史

地に還るまでのシナリオ何と書く
忘却と風化の中に置く未練
振り向けば背中ばかりの血の絆
今日生きる蟻を見つめて昏れ残る

今治市 越 智 青 園

目の鱗はがしてゴッホに逢ってくる
いさかいの妻ががんばる無言劇
窓いっぱい開けて相手をゆるそうか
陸橋を渡る心にある余裕

大阪市 勢理客 トミ子

祭笛誘い合わせて行く日傘
Tシャツで退院軽く飛んでみる
粗大ゴミ心残りも少しある
紫陽花に傘かたむけて立ち話

熊本市 黒 田 緑

それぞれの人生背負う靴の音
人間の愚劣さ核を手放さず
自分史の中でたうつ過去の夢
逃げ水の果ての幸せ追いつづけ

寝屋川市 富 山 ルイ子

思いがけぬ友の計を聞く電話口
まっとうに生きて企みなど知らず
豈はからんや素顔は意外人嫌い
「没法子北京」同郷の師の本求む

寝屋川市 宮 崎 菜 月

疑えば眉間を逃げる倅せか
夕風は子と呼ぶ母の声になり
城の町 跡切れぬほどに二人連れ
恋成就 大噴水も立ちあがる

寝屋川市 後藤 黎之助

俺という人間世界でただ一人
出世より停年までとは励まされ
かえり船唄えば声に涙あり
夏近く軍靴を偲ぶ友集う

寝屋川市 北岡 波留吉

自慢するほどでもないが子沢山
腕白がずらり多忙な洗濯機
真打が扇子でうまく煙草吸う
自暴自棄の女に近づく黒い影

和歌山市 吉村 さち子

手のひらで豆腐が小さく切れていく
この駅の時計はいつも調整中
路地裏の奥で大根半ぶ分け
ふる里に母が居るから足が向く

酒田市 永澤 裕子

親のいる時だけだった温い風
善人と褒めて吸うだけ吸って行き
押売りのもう二度と来ぬ捨て台詞
妥協して直に陰では本音言い

福岡市 井崎 ミサ子

水槽の魚 私の皿覗く
泣く武器を持ってる孫の強い事
あめ一つご縁の会話弾んでる
気がつくと私も愚痴を言っていた

尼崎市 岩倉 キク子

豪邸のカタログ見てる四畳半
時々はどうんがほしい寿司屋の子
カタカタ筆箱一年生走る
むずかしく考えすぎてややこしい

和歌山市 森口 恵子

運勢と共に歩んでいる気まま
蛇口からもれてしまった黒い声
ふたりして傷つけ合った愛の川
笑い合う日がまた来ると信じたい

貝塚市 池田 寿美子

雑巾をカラッと絞る青葉風
行けるうち旅の企画に躍ってる
それなりに幕の引き方考える
ピンボケも愉しからずやクラス会

尼崎市 湊 修水

紫陽花が待ちわびていた絹の雨
胡蝶蘭咲いて天女といえる心地
小走りで梅雨の晴れ間をポストまで
一円で一億なるほどすごい税

高槻市 芦田 静江

たかが余生 目一杯に烏啼く
シヨパンのリズム緑きれいに外は雨
愛に飢え雀しつた缶コーヒー
菓子カラフルに一人点前は友の情

静岡市 小木久子

貸したまま戻ってこない青い傘
子と同居本音ばかりじゃ暮らせない
笑いのない家 空気がえ動かない

枚方市 前 たもつ

教会へ妻と歩幅の揃う朝
風呂敷に欲を包んで持ち歩く
みすばらしい格好するなと妻は言う

尼崎市 中 澤 向 西

ジャンプしてのばせています試着室
諦めて見たがやっぱり君が好き
時に妻針刺すような事を言う

尼崎市 河 津 正 治

執念の勘で裁いた点と線
早咲きも遅咲きもあるクラス会
仏壇に内緒の話をしています

尼崎市 向 井 末 貞 一

心配の種が芽生えて呆けられぬ
活気ある掛け声の飛ぶセリ市場
のぼせさす甘いささやき攫う波

尼崎市 軸 丸 勝 巳

これだけが孝行娘新茶来る

眠ってはいるが下車駅知っている

Jリーグ効果 野球が面白い

摂津市 木 下 道 子

マンションに住みか追われた雨蛙
あれこれと望み過ぎてはしばむ夢
父の日の父は息子へビール注ぐ

羽曳野市 芦 田 絢 子

自己満足だけかも知れぬ手を合わす
バス停の列に日ざしは容赦せぬ
父の日は亡夫の写真に口付ける

西宮市 牧 渕 富 喜 子

私を少しずらすと住みやすい
階段の途中で飴を手渡され
同化したバンドエイドが剥がせない

十和田市 阿 部 喜 久 江

占いのいいところだけ信じます
飲めばすぐ効くよう見えるコマーシャル
きっかけをくれた貴方が好きになり

鳴門市 八 木 芳 水

春からの返事がやつと夏に来る
古希すぎて諦めきれぬ主導権
相合傘ひとつの乱を迎えねば

河内長野市 柏 本 靖 子

十指から貰う働くよろこびを

月曜日靴も闘志を燃やしてる

白い壁ちよっと落書したくなる

和歌山県 藤井春子

対談の中味気になる言葉尻

衣食住全てに母の味が住む

振り上げた拳叩けぬ日の迷い

鳥取県 山本正光

つながれた鎖の距離で生きている

早とちりする妻といて呆けられぬ

香焚いて追想亡母と二人きり

唐津市 浜本治幸

土壇場で無口な男筋通す

肩書きのくだらないこと屋台酒

落ちこんだ時に信仰深くなり

唐津市 入江喜久亭

坂登る途中の家の干した梅

蛇口から涙のごとき雫落ち

風鈴も風の吹きよで違う音

松江市 松浦登志子

ミニボトルそれぞれが持ちフルムーン

よく似あうミニ盆栽とうさぎ小屋

風の向き頭に入れて話しだす

堺市 桜井莊次

ほとばしりが冷めると恥が搔きやすい

追従とお世辞の巧いコンパクト

夕刊を配るバイクのリズミカル

大阪府 尾崎黄紅

前うしろ馬の脚にも役どころ

通り抜け禁止近道教えてる

資産公開タンス貯金は含まれず

岡山県 大石あすなろ

誰よりも小まめに動く割烹着

自己主張咳ばらいして起きてくる

開かれて女の椅子に陽が当る

福岡県 本田忠男

一度だけ会った社長に名を呼ばれ

裏表わかり相槌だけをうつ

落陽が慰めになる西の窓

宇部市 中村三良

乗せられた甘さにお茶が濃い過ぎる

涙腺の乾きに理性取り戻し

絵具皿にありたけの色溶いて夏

岡山市 山磨行子

田草取る腰にやさしい風の私語

配り物一言そえてある温み

にこにこ虫の好かない人が来る

高槻市 守先伸子

清貧に生き山が好き海が好き

むらさきに染まって出てくる菖蒲園

逢ってきたほとばしります橋の上

鳥取県 奥谷彩子

むすんで開いて両手に幸を溢れさせ

観音の笑顔にふれて傷いやす

控え目に自己主張する針の穴

鳥取県 岩崎みさ江

嬉しいときの運命線信じよう

塩壺に聞かせる海の詩をよむ

葱刻む音聞いている風邪二日

大宮市 新井圭二

腕まくり第二の道を切り拓く

思惑の七色虹が見え隠れ

子の巣立ち夫婦の絆強くする

東京都 清原悦子

道草もよしとしてこそ出るファイト

追伸に書いてしまった恋心

日めくりが楽しい過去もありました

河内長野市 大西文次

会長は浅学菲才の人ばかり

じゃんけんぽん勝っても買いにやらされる

フルムーンそれほど嬉しそうでない

島根県 三代朝子

ひとり居の友を尋ねる朝の雨

音痴にもマイクが回る親睦会

義理ひとつ果しくつろぐ安堵感

静岡県 宇佐美 寿美

おとなりの芝が青くて眩しくて

遠い日の指切りとうに忘れてる

引退の決意しずかに妻と座す

熊本市 北川 一進

押しボタン音で誰だかすぐわかり

川開き昔の友が勢揃い

レジ係と仲良しになるご常連

藤井寺市 楠 昭子

タイミングやる気にさせる褒め言葉

ザブザブと顔を洗って風は初夏

聞き役になるだけの耳貸してやる

吹田市 西岡 豊

恋の風沖へ沖へと行きたがる

はにかんであんたについてゆくという

教え子に医学博士の幼顔

八尾市 平川 幸枝

血統書 飼主よりも偉い犬

生き残り買ひ足す金魚追いかける

本当の笑いが見えてきた人生

八尾市 村上 剛治

石投げて波紋の行方気にかかり

挨拶を交わし空気のうまい朝

金魚にも秘密にしたい事がある

今治市 渡邊 伊津志

厄三つおとし人生丸くなる

欲望の海に沈んでいる蹉跎

花束がゆっくり沈む事故の海

鳥取市 杉本 孝男

庭園の松を褒めるとお茶が出る

年金がヒラヒラ孫の手に逃げた

身を任す程よい風を吹かせたい

熊本県 増田 一乗

恢復期笑いはじける治療室

とも白髪六十年祝いつつじ見る

汲む人が絶えぬ霊水揺ヶ池

静岡市 増田 扶美

螢一つすいと来て消え亡母かしら

足のツボ確り揉んで明日へ夢

湖底深く村を沈めて夏の月

枚方市 森本 節子

土堤の花 小さい籠にうつつけ

赤飯とおはぎの店にこり出した

親ゆずり折り目節目はいたにつき

羽曳野市 麻野 幽玄

長生をしてねと病母見舞うて来

もう出来ぬあれこれ夢でやってのけ

リハビリの効き目が見えて来た歩幅

高槻市 小林 紀美子

友達の稽古日も書くカレンダ―

人間を教えてくれる国会中継

トマト顔して小学生のお帰りだ

島根県 松本 聖子

糞虫はふらりふらりとのかん気そう

どうしても二人で旅をしてみたい

爽やかな朝へ体が従いてこぬ

富田林市 山原 昭水

魁夷の絵森林浴をしています

夏バテで六甲山ホテル思い出す

この通り昔は夜店出たところ

岡山県 福原 悦子

つむじ風 話に乗らぬ顔をする

スケッチも入れて旅情を温め合う

曲り角 振り向いている母が居る

愛媛県 久保 良子

過疎において絵になる景色たんと有る

学歴はないが野望は持っている

資生堂へ無理なお願ひ古希の皺

兵庫県 円増 純子

桜の所為 軽い約束して別れ

影のごと添うて主役を光らせる

添え書きがほろりとさせる女文字

佐賀市 古川 かずのり

仏典は近く日のために読んでおく

医学書を読んでりハビリ弾みつけ

花も子も構いすぎると駄目にする

柏市 上鈴木 春枝

反抗の子よ日本語を話そうよ

言い訳のレパトリーが増えてくる

聞き上手な君に甘えているサロン

相生市 中塚 礎石

逝つてからの勲章どこにぶら下げる

ろくろ踏む足と指とに透きがない

小指まで疲れきつてる手内職

兵庫県 玉田 三重

金婚は曲りくねった遠い旅

田は緑つばめに負けず精をだし

別居して近くの親が遠くなり

広島県 森川 抜智

雷よ落ちろ国会議事堂へ

飲むだけは忘れはしない健忘症

やあと手をあげたが知らぬ人だった

高槻市 江原 秀夫

花たわわ夫婦の会話五月晴れ

シャッターを閉めて自販機に稼がせる

血統はともかく芸のうまい犬

伊丹市 樫谷 郁子

永年の調停瑞宝章として実る

クラス会話題は孫と嫁に尽き

三面鏡あけると背が曲りかけ

堺市 吉本 菁風

遠くへ行きたい在来線の旅はよし

意識せずお世辞が言える年となり

若人の歩く姿勢は時代かな

岡山県 伏見 すみれ

熱下がりお粥がうまい朝の膳

四十度うわ言本音の出る不覚

雨の度 直そう直そうと思う屋根

寝屋川市 森 茜

三日だけ居てアフリカを書く作家

遠足の子ら乗ってきて土匂う

ため息を集めネオンが揺れる川

鳥取県 小西 五十鈴

おとき話の鬼は今でも胸に棲む

泣かされた日を忘れない鬼ごっこ

しとやかに見えても胸に鬼を飼う

大阪市 池田 一男

出生の時期悪かった就職難

生きることの寂しさひとりで飯を食う

世の憂さを逃れ湖北の寺巡る

香川県 高橋 たみ

知らん顔できない他人前に行く
垣根越し軽い言葉がとんでくる

ガラス戸を閉めても開けても春の風

静岡市 永倉 柳華

花散ってリングは赤い実を結ぶ

マネキンの服に見惚れてまだ迷う

シャボン玉陽気に風へ乗りたがる

高槻市 執行 稲子

丁シャツの胸が揺れてる象の鼻

ユニークな欠伸の犬に起こされる

クレヨンしんちゃん流行ってママは大慌て

静岡市 浅子 まつゑ

水かけを忘れた花におじぎされ

嬉しさに結び目解けて出るジョーク

親切が時には誤解される破目

天理市 飯田 昇

例えばの話で釘を打っておく

もつれ糸たぐり難題背負い込む

ふだん着のままの話に息をのむ

箕面市 木村 天弘

事情知らぬうわさ話に花が咲き

騒がれて良くも悪くも名が売れる

早飯の僕にきびしい過去がある

岡山県 土居 ひでの

三日月の眉が時どき角を出し
感動の涙で描く虹もある

まだ燃える火種を胸にフルムーン

兵庫県 酒井 靖子

気を遣い過ぎて歯車軋み出す

檜山へ無風を願う歳となる

五つ六つ若く見せたい髪を染め

明石市 小川 酔月

ヘルメット取ればやっぱり女の子

お互いの腹さぐりあつて立ち話

ネクタイを変えてみようか初夏の風

松江市 安食 友子

見てくれはどうあれ生きている歯形

打ち水で鉄平石が蘇る

機嫌とり下手なピエロをやっている

熊本県 高野 宵草

古い二人電子レンジはあたたため機

やがて散るバラ哀しげな媚をみせ

空き缶へ生活のモラル詰めて捨て

広島市 中村 要

禁煙の場所で大きな深呼吸

朝刊の漫画の筋が呑み込めず

良心も痛まぬ程の軽い嘘

鹿児島県 大山 舞鳥影

密入国で仕送り出来る仕事とは

禁煙とダイエットなら数知れず

せせらぎの白い素足が涼をよぶ

枚方市 濱田 良知

付き合いが苦手で今日も糸垂らす

シャワー浴び一気飲みする缶ビール

夏山がおいでおいでと僕を呼ぶ

松江市 佐野木 みえ

闘牛は流離の帝を慰める(隠岐の島 三句)

レインボー隠岐へと急ぐ日本海

黒木御所 帝の生まれし山の上

吹田市 古川 喜美子

貧しさは何時もふかぶかお辞儀する

うちわ風 何時からなつた聞き上手

贅沢な街より戻りむく小芋

静岡市 大村 正雄

泣き笑い転んで貰う参加賞

山ほどの薬背負って八十路坂

計算が達者で会計たのまれる

出雲市 西尾 和子

孫からの国際電話つい「ハロー」

退院の老母は疊嬉しがる

桜んぼ孫のケーキにのせてやる

寝屋川市 瀧本 八十八

昇進の遅れをバネにした大器

左遷でも住めば都として待機

逆転の満塁弾を打ったトラ

吹田市 馬 光子

足枷の無い気楽さがローになる

五時からの出かけ主婦を脱皮する

私より上手な子猫の隠れんぼ

富田林市 欄 智久

目撃者にもっと聞きたい事件記者

お見舞に行けば病人よく喋り

貧弱な無人駅に雀の巢

羽曳野市 酒井 一壺

逢いに行く動く歩道を小走りに

惚れた弱味につけ込まれてる無心

OKと言ってそのあと自己嫌悪

泉佐野市 稲葉 洋

釣銭のような余生でいとおしい

暮れ六つの鐘だと孫が呼びにくる

筋書は短編でした夫婦劇

海南市 谷口 義男

偉そうな顔が並んで居る役所

減私奉公せよと教えたその昔

生きて行くために言わねばならぬ嘘

鳥取県 中西 智恵子

父の日へ感謝の言葉だけで良い
長電話やかんが笛を吹いている
八月にある思い出は傷だらけ

大阪府 三浦 千津子

はったりが効いてから辞書放せない
帯の位置ボンと叩いているゆとり
噂がひとり歩きする雨期の中

鳥取県 権代 康女

うかつにも内証話の底がぬけ
登山家よ母は心配しています
何かある電話の途中でだまりこむ

島根県 菅田 かつ子

パン半分残して朝を立ちあがり
休日に会いたい人がたとある
小さくなる父の背まだまだ風よけに

鳥取市 山口 しげる

パチンコ屋マーチに歩調合わせられ
定年へスタンバイする入門書
悪人のいないドラマで腹八分

豊中市 田中 道胤

バイキング サラダ多めに皿に盛る
広重の梅雨肅々と降り止まぬ
エスカレーターいらちが一人乗っている

池田市 金崎 峰子

お日様をみればねこそぎ洗いたく
紀伊国屋 北と南で待ちぼうけ
犬の子もりボンをつけた顔をする

八尾市 村上 ミツ子

拝復と先ず書いてから考える
愚痴きいてくれる友達そばにいる
母だけはいつもきれいと言ってくれ

寝屋川市 籠島 恵子

いつからかのつしのつしと歩く妻
日曜日パジャマの夫は隙だらけ
おせっかいとわかっていてもする電話

米子市 服部 朗子

筆先が濡れて一気に万葉の中
心が和らいで古果あちこち磨く
ご機嫌な鬼のみやげは太鼓焼

兵庫県 北川 とみ子

生きいきと妻バーゲンの背が伸びる
喝采の中で破れた夢を追う
母と娘の会話に父は遠くいる

唐津市 野田 旭恒

はみ出して撮れぬ魚拓の夢を追う
傘寿なおいとこ会での司会する
走らねばならぬ男のエゴイズム

静岡市 柳沢たま

ばあちゃんの愚痴は相手を選ばない
童心にかえる卒寿のいい笑顔

ひとり住む突っかい棒のないくらし

鳥取市 植田一京

盛衰の過去は言うまい故郷の月

さっぱりと音沙汰無くて子は元氣

翔びたくて助走ばかりを繰返す

島根県 武島ちよえ

今朝もまた夫が先に起きていた

遠い日にもらった写真貼ったまま

私と氣心の合う糸もある

羽曳野市 西村りつえ

細く長い松原歩くフルムーン(天の橋立で二句)

橋立で喉を潤す磯清水

想い出は神社の裏の鬼やんま

尼崎市 萩原しげる

折り畳み帽子を一つ入れて出る

飼い主と散歩のときは吠えぬ犬

雨上がり向かいの山がにじり寄る

静岡市 中西雅

蛙の子苗田の水がほしい夢

山里のそばとわさびの美味に酔い

体重計そつと乗っても変らない

大阪府 澤田和重

いい人で少し甘えてみたくなる
父のシャツ着せられ案山子うちを出る

河内長野市 印藤智子

毒舌も人柄良くて気持ちいい

上等の服で中味をかくしてる

島根県 森茂美

バックミラーに別れたひとが遠ざかる

カウンターの隅に私の席が空く

静岡市 松下正枝

お達者といわれる年になっていた

根掘り葉掘り聞き手うまさについつられ

兵庫県 安達厚

お元氣かと卒寿の人にたずねられ

それなりに写っていますと鏡いう

大阪府 一本勇太

一喜一憂 星占いとたわむれる

孫たちの中で自分を振り返る

唐津市 山口ふさ子

ガラクタにたんと思ひ出ある暮らし

旬の味一年ぶりの出逢いです

唐津市 福島紀一

ゆき届く妻で円さが怖くなる

あさ漬けと冷やつこでいい夏の膳

唐津市 市丸晴子
退職金出れば離婚と迫る妻
おしゃべりと音楽の降る商店街

香川県 高橋宅

石段に背を丸めての息はずむ
電球の六十ワット消した夏

鳥取県 橋本孝原

逢うて見る赤いネクタイから余韻
夫の不足を片方の耳聞いている

唐津市 江川青琴

待ち時間 身の上話きいてやり
点滴に命を託し眠る姑

静岡市 片平静代

図書館で三冊読んで知恵を借り
連休へ何の予定もないくらし

広島市 元林光子

休日のキッチン朝から和やかに
バレエだのピアノだのに子は駆ける

静岡市 三浦つね

かすみ草どんな花でもおつきあい
回り道良い事聞いて家につき

岡山県 国米きくゑ

平凡に気楽に生きて羨まれ
吹けばとぶ一円玉にも自負がある

米子市 鹿島 蘭
企みを隠して女よく喋る
さて焼香 足がしびれて歩けない

大阪市 川原章久

饒舌が寡黙な人を困らせる
定年に三日残った定期券

寝屋川市 井上すみれ

屋上のジョッキが招く夏は来ぬ
落ち込んだ日の電話代高くつき

寝屋川市 太田とし子

言いたげな遺影に耳をかたむける
褒められて花壇の花がへってゆく

米子市 木村春枝

それなりの役心得てブチトマト
老木が神話伝説つたえます

鳥取県 藤山弘子

恥かいて一皮むけたおつきあい
検診は結果でるまで心配だ

今治市 村上久美子

真実は残酷嘘は美しい
そこからを知ると放っておけぬ質

松江市 浦辺静江

一徹で酒さえあれば御機嫌で
耳打ちで愉快に笑う母娘です

用心にケガ無しとでる星占い
歛喜する佐渡の夕映え露天風呂
姫路市 福島 姫女

軽がると明日がある気でいた不覚
手料理の皿が堀越す日暮れ時
岡山県 富坂 志重

肌の合う夫で一生得をした
一度出た旅で楽しさ知りました
鳥取県 橋谷 静江

朝市のトマト芸術品のよう
穀よりも種子の重さを風は知り
唐津市 岩崎 實

十二支に入れてくれない猫の鬱
单身赴任レンジの音にはげまされ
和歌山市 木村 親路

金閣寺誰が撮っても光つとり
京の事また見直した花の乱
大阪市 平井 露芳

正直言つて政治改革わからへん
早口で喋る女房にもどかしい
池田市 木村 一笛

膝まくらしてあげたいがすぐしびれ
掃除機の音に紛れて熱唱し
泉佐野市 河原崎 礼子

氏子総代 腹まで響く音で締め
研師の手 切る感触を知っている
鳥取市 津村 静枝

夕ぐれ若葉の匂身にしみる
うぐいすに空気のおいしさ教えられ
出雲市 林 悦子

子の部屋の戸に貼り紙が「入るな」と
地下鉄の車窓の顔と対峙する
東京都 小寺 九

新幹線三人掛けで肩がこり
いつせいに雨呼ぶ声で蛙鳴く
八尾市 生嶋 ますみ

無表情よけい疑い深くする
容姿端麗 舞えば天女か玉三郎
高槻市 庄野 澄子

大学の男に成った孫の顔
大阪で生れ育ったそやさかい
大阪市 乾 哲静

赤信号孫としっかり手を握る
望まれて嫌な役目も引受ける
吹田市 吉川 渉

不機嫌な孫にオロオロする夫婦
立ち読みが嫌いですぐに買って来る
高槻市 乙倉 武史

米子市 永井三津子

自分でも嫌だと思つ自分を見
ショーウィンドー母に買いたい物ばかり

和歌山県 中後清史

呼び捨ての悪友ばかり座に残る

体調を崩せば酒のせいにされ

青森県 諏訪明雄

眼を覗る眼心のありよう垣間見る

眼を閉じて帰るふるさと見つからない

千葉県 大川一雄

三味線は本立の中で弾いている

ショートパンツ若いふたりがベダル踏む

唐津市 山門タミ

宅地造成古墳の主が待ったかけ

永遠の眠りを起こす現代人

羽曳野市 福田悦子

湯上がりの母の化粧はてんか粉

回覧板ただそれだけの隣組

流山市 神田治

ルールダンス女は軟らかいなと思う

お互いの傷は言わないままマンボ

田川市 松元寿永

宝石店買わぬお客に無表情

カラオケで軍歌を唄う父で良し

河内長野市 木太久正一

強烈に異国の香り首里の城

沖縄の料理と踊り遠い国

姫路市 小井里兆

花ごぎの魔女たちの目がきつくなる

囲まれた山と終日対峙する

河内長野市 水谷正子

目立つ娘を父は得意で連れ歩き

珍しく素直な妻が気に掛かる

姫路市 服部一典

身分証代わりと免許更新する

寝つかれぬ夜は心経暗記する

唐津市 山門幸夫

内視鏡古墳の謎に挑むメス

おべんとう純米の味母の顔

米子市 小塩智加恵

年金の僅かな値上げ通知くる

六十を過ぎても女強いまま

米子市 池尾保子

なつかしい出雲弁での神話聞く

耳朵が哀しい神話知っていた

神戸市 向井泰子

ゴミ出せとカラスは道を闊歩する

犬連れた人に出会わぬ淋しい日

兵庫県 西井つや子

うれしさが弾む心を隠せない

一言を言わずに抱いて寝る弱気

鳥取市 中澤正恵

わらび狩り野鳥を追った太い声

食べ切れぬ西瓜と連れを呼んでくる

東大阪市 松山隆

朱の袴 卑弥呼の姿うつし出し (石神神宮)

面同士 天狗とオカメ性が合い

泉南市 坂根流水

垣根越すよその花でも花は花

頂上に立つ人やはりお金持ち

島根県 安部美恵女

太陽に恵まれ稲は生き生きと

季節の香 母のちまきを恋しがり

橿原市 西本保夫

父方は長生きの筋頑張ろう

いつもうちに居るのは妻と室内犬

島根県 福岡博利

三次会曲りくねった奥がいい

ひまわりは双葉のころから首を振り

八戸市 島田昭治

褒めつぷりいいのが居たら気を付けろ

勘違いくすくす独りで笑ってる

鳥取県 美浦美代子

風呂敷一つ嫁に來た祖母惚ばれる

ハーモニカ孫に習って若がえる

河内長野市 妹背尽呂久

売れっ子のルール違反に目をつむる

曲者がえてして座る隅の席

岸和田市 井齋一齋

言い訳の舌がもつれる社長室

ハシゴ車の届かぬ暮し恐いけど

羽曳野市 徳山みつこ

どくだみの花の白さにみる純情

回復へ友と会いたししゃべりたし

羽曳野市 山本たけし

夜来香 部屋一杯に芳花満つ

帰巢癖あつて続いている夫婦

大阪市 岡本久峰

赤い傘さもうれしげに女の子

忘れ傘三文半も無い値打

島根県 槻谷仲子

レシートも財布の中でお札なみ

口紅も気まぐれ濃いめ付けて見る

和泉市 加山よしお

昭和史に恋も知らずに消えた兄

転居先不明の友の身を案じ

豊中市 岸 田 知香子

こだわりがとけないままの黙秘権

バドミントン後のビールがくせになり

和歌山県 村 中 悦 男

つらされて喋った後にある空虚

気にすれば消しゴムの後気にかかり

兵庫県 中 野 とよ子

約束が破れ切なし石を蹴る

旅立ちが出来て心の洗濯に

大和郡山市 榊 原 慧 心

部下のミス怒鳴り飛ばして慰める

パチンコにやっぱり負けてゴロ寝する

鳥取市 近 藤 秋 星

女子高生若鮎のごとやって来る

月が出て砂丘一層引き立てる

米子市 村 田 俊 明

米を研ぐリズムが狂う日の微熱

星占い好きな乙女の花言葉

有田市 生 馬 芙美子

鯨尺大事に生きている余生

老いてからビタミン剤を追っかける

大阪市 吉 田 大 輔

金婚に明日を信じて桃の苗

行こか行こよチラシの店へ自転車で

島根県 岩 田 三 和

夏の風になりたい君の髪が舞う

田舎みちの木陰さがして一休み

大阪市 中 井 正 秀

儲け口妻と一緒に聞いている

戦国の武将が眠る奥の院

和歌山県 上 岡 正 直

殿は去り俺がおらがの花の乱

僕に一つ政治家の舌二枚あり

泉佐野市 大 工 静 子

近道し三度も車に待たされる

咽喉乾く思い枯山水の庭

寝屋川市 坂 上 高 栄

三日月に祈った山中鹿之助

反射する高層ビルのガラス張り

高槻市 小 林 一 閑

夢二展 幽霊ばかり並んでる

終点が判らないから生きてられ

鳥取市 谷 口 侑 里

嬉しくて鍋ピカピカに磨きます

花時計デパートの場所に決めている

川上三太郎賞決まる

本賞は

神谷三八朗(名古屋市)、島村

小川十宵(新潟県)、準賞は、

美津子(大阪市)各氏に決定

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

井上 柳五郎

いろいろの川柳がわたし達の周りでは詠まれています。伝統・前衛・革新等々。私の川柳入門時からの師濱田久米雄先生から教わった「誰にでもわかる川柳」と十七音字の基本形式を守るよう努めています。鑑賞句も自然とそのような句を選ぶ結果となりました。

生きてゆく顔がラッシュに揺れている

柏本 靖子

同じ生きてゆくための顔もいろいろとありますが、ラッシュにもまれ職場へ向う姿が。

風あたり強いだろうなこのポスト

大川 幸子

抜擢された椅子か、難関突破して掴んだポストか、強い風に雄々しく進む態度が。

定刻に発車するのが当たり前

中塚 礎石

正確な運転時刻の遵守の元国鉄マンの述べか、当たり前を当たり前でないへの風刺か。

背を向けたままで見送る父の愛

杉山 精子

ちよっぱり頑固で、その癖はにかみ屋の父の姿が、父性愛が浮び上がってまいります。タクシーの釣りはゆつくり出してくる

古久保 和子

『釣りはいいよ』言われるのを待つような呼吸のやりとりが見えるようです。

心配は要らぬといつも苦労かけ

杉本 孝男

自己過信か、弁明か気遣いに対する感謝の表れか、周りの者は常に案じている苦労か。

逃げ道も隙も作っておんなだな

永田 曉風

先々の先、隙を作ってちゃんと逃げ道用意したたかなおんなか、女の護身術か。

留守番の夫を思う宿の膳

中澤 正恵

やさしい妻の思いやりの句。旅に出ても豪華な食膳を前にしても、いい奥さんですね。

還暦が古いへの導火線となり

山口 三千子

老化への自覚、なるほどそうだったなあ。手をつなぐなんて出来ない夫婦です

小塩 智加恵

夫婦でも離れて歩いた大正の男女にはこの

ような時代でしたね。やっと並び歩きに。

いそがしい一日でした日曜日

野瀬 昌子

毎日が日曜の身となれば、本当の日曜には家族の冠婚葬祭のとはつちりて、多忙の日に。石段は昔のままよ老いを知る

増田 扶美

周囲の変化はないのに、自分の老化現象にがく然とした、老いの発見がこの石段で。

気がつくとき昔話の中にいる

足立 由美子

前句と同様に老いを知る句。昨日のことは忘れても、遠い昔話はよく覚えていた実感を感じています。

追伸へ元気で逢える日を誓う

沢田 きん

筆まめでいろいろな書いたが書洩らしたこの言葉は追伸で、老兵の戦友に書いています。

郵便のバイクの音を聞きわける

大西 文次

わが町内は、一日一回の配達です。耳を澄まして待っております。素通りの日、淋しい日に。

花過ぎてちよっと邪険に植木鉢

宇野 照代

来年の花へサツキ植え替えてみましょう。

銀河系

河内天笑選

鳥取県 新家 完 司

湧き水をいただく山の名を知らず
起承転結いま転がっているところ

松原市 小池 しげお

大空の下で日当手渡され

言い聞かす丸い言葉を選っている

宿毛市 岡村 千鳥

軽率な一言 愛を遠ざける

内幕を知らぬ他人がよく騒ぐ

藤井寺市 高田 美代子

戦終つて始末に困る余り弾

通るたび米屋を覗く癖がつき

広島市 流 奈美子

百戦を終えた瞳の湖のごと

自信とは別にゆったり掛けている

米子市 石垣 花子

嫁の手に渡し我が子と距離を置く

落し穴を素知らぬ顔で掘っている

綾部市 藤田 芳郎

病み上がりですのと妻が注がせない

聴診器が医者に告げ口したらしい

藤井寺市 楠 昭子

競争心煽つて波にのせてやり

すかたんも杜内の空気とませる

五所川原市 斉藤 島

新茶載く仏滅も大安も

乙女の像いつになっても乙女の像

大阪市 大河 未佐子

思い出を語る余生にいたくない

恋占いあほらしいけど気にかかり

西宮市 奥田 みつ子

声高の一人にみんな黙りこむ

酸欠の街に外人労働者

岡山県 小林 妻子

ビール氾濫五時から男強くなる

パトカーの飲酒調べた方がいい

仙台市 川村 映輝

サラ金から親展厳封督促状

寝たきりに長寿の祝い遠慮する

鳥取県 鈴木 公弘

人見知りする我が輩は大である

花時計なにを聞いても驚かぬ

海都市 三宅 保州

学会にしては陽焼けをして帰り

蟬しぐれ命を削るかの如く

枚方市 濱田 良知

音なしの構えの妻に隙がない

還暦の妻 貫禄の高いびき

和歌山市 山口 三千子

ナメクジに飲まずビールを庭に置く

使い分け出来る貴方が憎らしい

岸和田市 井齋 一齋

家族会議年金付きで引き取られ

村おこし山を荒らしてゴルフ場

広島県 田村 新造

役得のアナうまそうにかじりつき

積年の遺恨がからむ危険球

倉吉市 奥谷 弘朗

感謝する気持が福を呼んでくれ

おでん屋で天下ごめんの上機嫌

枚方市 前 たもつ

初生りの胡瓜を食べて元気です

緑滴る桜の木には神宿る

広島市 中村 要

良心も一緒に棄てる家庭ゴミ

夏まえに夏物処分大バーゲン

羽曳野市 徳山 みつこ

肝心なことさしひかえ参考人

疑うのよそうこんないい晴れ間

鳥取市 小谷 美ツ千

魂胆があるから恩を売りに行く

私が抜けたら丸い輪が出来る

茨木市 藤井 正雄

ゲートボール菜嫌いな顔が寄る

思い出にくい違いあるクラス会

大阪市 榎本 落児
青春が消える松竹座が消える

青森市 工藤 甲吉
桜もち糖尿病はツバを飲み

和歌山市 榎原 公子
勢いを貰うたけのこ食べている

唐津市 久保 正剣
バランスに飽きて翺びたいヤジロベエ

香川県 高橋 宅
自画像にうすく一筆紅をさす

池田市 岡本 吉太郎
運決まる隣に座る人により

和歌山市 古久保 和子
乳牛は乳を飲ませた事がない

名古屋市 藤井 高子
変えられぬ気性何度も窓を拭く

唐津市 山口 ふさ子
菜園を虫と分け合い食べてます

茨木市 堀 良江
見なかったふりしてそつと目を閉じる

鳥取市 西原 艶子
慢心へときどきショックふりかける

河内長野市 水谷 正子
トーストの焦げ加減にも幸がある

寝屋川市 後藤 黎之助
一階と二階に別れ好きな道

鳥取県 江原 とみお
風呂があるのに銭湯へ行きたがる

唐津市 市丸 晴子
公園の遊具は月と夢を見る

弘前市 佐治 千加子
妻の座にある日どつと青風

枚方市 海老池 洋
いい予感やがてやがてを温める

鳥取県 乾 隆風
正義感の強い青筋かも知れぬ

砂川市 大橋 政良
シナリオの中でいのちと対座する

堺市 高橋 千万子
冷戦の朝をいたわる花ひらく

笠岡市 松本 忠三
野良猫がはや一員になりすまし

旭川市 朝倉 大柏
若かった顔を忘れた鏡です

静岡市 永倉 柳華
思い遣り心の傷に効くくすり

松江市 松浦 登志子
お守りの保険でアツプアツプする

兵庫県 玉田 三重
引き返す勇氣もほしい蝸牛

米子市 田中 亜弥
旅人を吞んでうるおう駅となり

今治市 月原 宵明
海見れば何かを叫びたい若さ

黒石市 千葉 風樹
宴果ててまた皮靴に入れる足

大阪市 上田 柳影
深呼吸してから社長室ノック

和歌山市 田中 みね
紅一点大事にされた旅日記

鳴戸市 八木 芳水
妻の吹く笛が少うしうるさすぎ

柏市 上鈴木 春枝
告白をしますあかりを消してから

大阪市 三浦 千津子
信じ切る妻の瞳に裁かれる

姫路市 北条 てる代
惜別へ涙と笑いのかくし芸

高槻市 乙倉 武史
月下美人短命を写される

和歌山県 村中 悦男
妻の愚痴話題変えてもまたもどり

寝屋川市 江口 度
妻の留守心を満たす無駄遣い

和歌山市 木村 初子
頂点に上なし底に未来あり

米子市 金山 夕子
にんげんのひとりよがり面白

東大阪市 今岡 貞人
さまざまな風をくぐって来た余生

熊本市 遠山 夏生
ネクタイの過去懐かしむ首回り

大阪市 尾崎 黄紅
吉相印に代えても貧は続きます

姫路市 小井里兆
旅プラン好き放題の夢に酔う

唐津市 浜本義美
銀河系地球に優る星ありや

香川県 木村あきら
とときの文句で賞める下心

今治市 越智一水
赤トンボ太陽へ稔り予告する

姫路市 服部一典
平凡な女で家計赤字出ず

岡山県 池田半仙
精神と正反対の床の軸

姫路市 本上まさ子
越えて来た昔を語るよもぎ餅

尼崎市 春城武庫坊
思惑がすんなり通りうまい酒

西宮市 亀岡哲子
宇治金時の山を崩している個性

今治市 渡辺南奉
正直を通すと仲間はずされる

鳥取県 岩崎みさ江
かくれんぼみつけて欲しい咳ばらい

米子市 小塩智加恵
息子から小さなジャブで諭される

鳥取市 杉本孝男
思いやり芽生えた孫に目を細め

米子市 林荒介
風が攫った帽子を探し今も旅

岡山県 矢内寿恵子
疑いを知らぬ十指がよく動く

弘前市 岡本花匠
五七五余生を変えざる磁場となり

鳥取県 谷口次男
青臭い挨拶だけど真剣だ

米子市 林瑞枝
アングルを変えて眺める自己暗示

姫屋川市 岸野あやめ
こころもちうなずいたのがお約束

大阪市 渡部さと美
空き缶を拾うて朝の善一つ

鳥取県 田村きみ子
言い訳を言うとう入歯が噛み合わぬ

鳥取県 乾喜与志
稲妻が晩酌の膳賑わわす

姫屋川市 堀江光子
目薬を機械に油差す如く

大阪府 榎山隆
このまんま消え入りそつな失意の日

八尾市 村上ミツ子
迷ったらスタート地点まで戻る

泉佐野市 河原崎礼子
自動車のベルトコンベア ハイウエー

高知県 赤川菊野
ハードルを下げて余生をマイペース

鳥取市 中澤正恵
ありがとこの言葉いっぱい貯めている

米子市 光井玲子
飲み込んだ言葉が時に疼きます

鳥取市 前田一枝
艶っぱい暗号いつか色もあせ

和歌山市 桜井千秀
人間を置き去り進化する機械

唐津市 田口虹汀
義歯なりにかくろく幸せ囃んでいる

吹田市 西岡豊
見つめれば見つめ返して好きやねん

吹田市 山本希久子
大かきのままに余生を迎えそう

倉吉市 最上和枝
雨洩りのバケツが眠い音を立て

大阪市 藤田頂留子
俳壇のテレビにひたる雨の午後

尼崎市 春城年代
山並をぼうようとして梅雨が来る

大阪市 寺井東雲
富士の雪もつたいなくも流す梅雨

唐津市 中村弘
ボランティアだから仕事に熱が入り

姫路市 福島姫女
播州の腐れ鯖鮓はは恋し

阪南市 深日白光子
同窓会やがては自然消滅か

八尾市 高杉千歩
大ジョッキ男も女も愚痴が好き

倉敷市 田 辺 灸 六
人をみな信じる訳にいきません

有田市

松 井 かなめ
旧友に会えば健康たずね合い

羽曳野市

麻 野 幽 玄
ジーンズの着心地知らぬままに古い

鳥取県

武 田 帆 雀
出嫌いの妻で連休草を抜く

豊中市

田 中 正 坊
眉毛染めたら三年は若がえる

鳥取県

美 浦 美 代 子
風呂敷にきれいに包む祝い酒

宝塚市

丸 山 よし津
親切なタクシーに乗る雨の街

豊中市

辻 川 慶 子
熱引いて爽やかな朝歯を磨く

箕面市

椎 江 清 芳
香典の追い打ちが来る三隣亡

八尾市

片 上 英 一
一応は話しておこう通夜の席

唐津市

山 門 タ ミ
点滴の隣の患者物識りで

米子市

澤 田 千 春
絵にのこし心にのこす京の旅

横浜市

菱 田 満 秋
どもりの言葉固唾をのんで待つ

西条市

片 上 明 水
物拾う仕草で花を巡る蝶

羽曳野市 福 田 悦 子
服を選ぶ老母は女を忘れない

羽曳野市

芦 田 絢 子
つくり物めいた自画像の笑顔

八尾市

村 上 剛 治
金魚にも隠れてしたい事がある

京都市

松 川 杜 的
亡父さんのウォルサムが未だ動く

岸和田市

古 野 ひ で
大切な友がたおれて梅雨しとど

岡山県

福 原 悦 子
老松は風のこころを聞き分ける

唐津市

山 口 高 明
海底の眺め浮世を忘れさせ

姫路市

大 原 葉 香
黒字国の空吹き荒れる不況風

羽曳野市

酒 井 一 壺
定年を待ってましたと妻別居

愛媛県

久 保 良 子
一反の田へ年金がさがりつき

鳥取市

美 田 旋 風
舶来のめしでも腹の虫に効く

川西市

松 本 た だ し
高値だけ残して消えた米不足

静岡市

小 木 久 子
大臣も失言をよくないます

香川県

山 地 マ ツ エ
ダルマに目入ると人間そり返る

藤井寺市 中 島 志 洋
盗み撮りされたスターの別な顔

姫路市

丁 坪 サ ワ 子
次の嘘考えながら記者会見

大阪市

津 守 柳 伸
人並みに参加してみるジャンボくじ

神戸市

向 井 泰 子
祈りをこめて祈りをこめて千羽鶴

和歌山市

玉 置 当 代
唄いましよ飲みましよ花の金曜日

米子市

鹿 島 繭
現世の終りが見える松の残骸

和歌山市

山 根 恵 美
距離おいて人恋う幸を知っている

今治市

塩 路 よ し み
人前で幸せ芝居してみせる

大阪市

一 本 勇 太
釣り上げて逃がすレジャーの罪深さ

倉吉市

米 田 幸 子
石段の長い神社でありがたい

東京都

清 原 悦 子
肩書きが武器にかわったこわい人

弘前市

蒔 苗 果 林
長という帽子孤独になつていく

この欄への投句は、必ず川柳塔用箋に三句

を書き、毎月15日までに到着するよう、川柳

塔社事務所へお送りください。(河内天笑)

苗香のむ 八木千代選

何かにとり憑かれたようになまけてる

大阪市 西出 楓楽

「なまけてる」とひらかなで書かれたのは何か意味がありそう、物体がぐにゃぐにゃとやとなつてゐる状態ともとれて面白い姿だとまず鼻にはうなづかぬのです。怠けてはならぬといふ意識してゐるはずなのに、どうしても思うように動けない、どこも悪くない、心だつて五体だつて。そんなけだるい時つて誰にもありますでしよう。「あら私の事ではないか」とハツとされた方もあるでしよう。ひらかなの中に漢字が巧みにちりばめてあるのも、効果を増して理性のようなのものが光ります。そこまで計算はされていないでしようが、偶然とはいえ実感が出ていて、言葉と言葉のあやなす空間がこの句を表情のある作品に仕立て、句意も生きました。きつとなまけたあとは爽やかに甦るはず。生身でももの、怠けてくれと川柳さんの暗示かも。と信じて有難く怠けましようね。

梅雨空に糸一本で立っている

西宮市 奥田みつ子

糸一本のあやふやでいて的確な表現に、梅雨の季の私は立ち去ることが出来なかったのです。生きとし生けるものすべからく天の意図によるものと、この頃になつてそんなふうになつて始めています。人間社会においても、みんな微妙なバランスの上に成り立っているでしよう。まして長い時間を酷使してきたからだと傷だらけのこころ、ほんとうに一本の糸のお陰でかきぎながら、この世の岸に立つていられるのです。僅か糸一本の重みをひしひしと感じるのも、人生の後半だからでしょうか。梅雨空だからでしょうか。そういう思いをじつと噛みしめながら、ひとひと日を生きている私たちですものね。

岩登り岩の外には何も無し
あじさいやベンに後さき滲み出す

壮年の生ぐさき黒髪たらず

サボテンの刺は弱さの裏返し

私の海は濁れて見事な塩の山

ふところを風が止り木にしてしまふ

すぐ飛びつく癖で鉄棒の誘惑

気づくまいが影は安眠などしない

沈黙は美德かも 白いあじさい

一隅を照らしつづけてまだ翔べぬ

赤ちゃんと同んなじ彩の空にして

おもいきり水浴びてから逢いにゆく

魚ごろわずかな水に泳ぎ出す

ふくろうが寂しき言葉ホーと吐く

私の敵はわが名でわが顔で

一日の祈りへ白い沙羅双樹

沙羅の花ぼとり懺悔はまだ続く

しゃばんの泡 微罪ひとつを流せるか

海を見る首ねじ曲げて海を見る

今を生きたために鰯もすりつぶす

人形の目は私を見抜こうとする

野火ばうばう夏草の驕りの丈よ

皿を割るくらいは覇気は今もある

スイトピーの彩りやさし女系かな

一粒の米をスタート台に置く

苦海浄土 仏さまめく流木よ

大阪市 北川 弘子

西宮市 牧瀨富喜子

堺市 横田マリ子

和歌山市 堀畑 靖子

堺市 板野 美子

寝屋川市 太田とし子

和歌山市 田中 輝子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 桜井 千秀

島根県 松本 文子

和歌山市 木本 朱夏

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 野々 圭子

寝屋川市 岸野あやめ

米子市 青戸 田鶴

米子市 白根 ふみ

西宮市 門谷たす子

和歌山市 岩本美智子

吹田市 井上 照子

米子市 鹿島 満

堺市 山本 半銭

羽曳野市 芦田 絢子

尼崎市 春城 年代

米子市 新 正子

熊本市 永田 俊子

花しようぶ咲いて仏の顔になる
 一枚の舌できりきり舞いをする
 謎解きのまだまだ続く余命表
 掌の上で笑いころげる紙風船
 花菖蒲 約束が多すぎる
 誰の手も借りずにすんだ箒草
 前列に立つ号令は信じない
 紫陽花は淋しがりやで眠れない
 疑問符を投げつけて来たリトマス紙
 罪状は否認のままの五月闇
 蓮池のむらさき亡母の泪かも
 掌の中でたまに踊っているワルツ
 あちらこちらの窓閉めたがる文明よ
 曾て姑 今は私の花鋏
 日は西に愛は疑うものでなし
 迷い出すと舟の櫂まで捨てている
 恋人と子どもの話して帰る
 跳び越えてほしい小猫がうづくまる
 堰きったようにバラ園咲き始め
 翔んでいるつもりの足が動かない
 強かにモデル視線をはね返す
 試行錯誤どこまでつづく交差点
 戯れる子もなく風と戯れる
 かけ足で夫のあとを従っていく
 これからは心美人と参ろうか
 それなりのモラルで姑は紅をさす

鳥取県	さえきやえ	鳥取県	さえきやえ
西宮市	西口いわゑ	西宮市	西口いわゑ
名古屋	藤井 高子	名古屋	藤井 高子
米子市	中井 ゆき	米子市	中井 ゆき
広島市	森田 文	広島市	森田 文
和歌山市	福本 英子	和歌山市	福本 英子
米子市	金山 夕子	米子市	金山 夕子
鳥取県	小谷美ツ千	鳥取県	小谷美ツ千
岡山県	山本 玉恵	岡山県	山本 玉恵
羽曳野市	吉川 寿美	羽曳野市	吉川 寿美
米子市	林 瑞枝	米子市	林 瑞枝
和歌山市	小倉 アサ	和歌山市	小倉 アサ
米子市	野坂 なみ	米子市	野坂 なみ
和歌山市	古久保和子	和歌山市	古久保和子
富田林市	片岡智恵子	富田林市	片岡智恵子
米子市	茂理 高代	米子市	茂理 高代
神戸市	向井 泰子	神戸市	向井 泰子
米子市	寺沢みど里	米子市	寺沢みど里
寝屋川市	堀江 光子	寝屋川市	堀江 光子
鳥取市	羽津川公乃	鳥取市	羽津川公乃
米子市	石垣 花子	米子市	石垣 花子
岡山県	矢内寿恵子	岡山県	矢内寿恵子
鳥取市	西原 艶子	鳥取市	西原 艶子
八尾市	高橋 夕花	八尾市	高橋 夕花
和歌山市	宮口 克子	和歌山市	宮口 克子
大阪府	津守 柳伸	大阪府	津守 柳伸

娘の灯す一番明窓へ帰る
 きやら路を煮つめる脳を煮つめつつ
 もったいないを積み重ねては収集日
 自主規制なんとしんどい口だろう
 知る弱さ知らない強さからみ合い
 つゆ色の梅雨の匂の朝に会う
 真直ぐに咲いて媚びない花菖蒲
 たよりとす君も老犬いとわねば
 齢という相手に負けて行く私
 貞淑を捨てると何も無い私
 シナリオに書いてはならぬ花言葉
 告白を電車きしませ消していく
 萩焼のカップ小振りを一つ選る
 ベルトの穴つぎつぎ許し墮落する
 すさまじや竹輪くわえて逃げる猫
 血の濃さへゆっくり戻る母の川
 はねかえる毬は気儘な旅に出る
 距離おいて見るとイメージ崩れない
 決断を出すのは何時も女です
 百日紅はなびら散れば夏の雪
 雑草にされて野草が拗ねている
 のみこんだ数だけ刺さる胸のトゲ
 古日記ここにも置いていた別れ
 ゆかたにはやっぱり似合うくじら尺

投句先 下683 米子市花園町14-8

◇

東京都	山口 新子	東京都	山口 新子
大阪市	渡部さと美	大阪市	渡部さと美
米子市	木村 春枝	米子市	木村 春枝
大阪市	日阪 秋子	大阪市	日阪 秋子
堺市	高橋千万子	堺市	高橋千万子
豊中市	辻川 慶子	豊中市	辻川 慶子
鳥取県	石谷美恵子	鳥取県	石谷美恵子
吹田市	栗谷 春子	吹田市	栗谷 春子
岡山県	富坂 志重	岡山県	富坂 志重
米子市	光井 玲子	米子市	光井 玲子
弘前市	佐治千加子	弘前市	佐治千加子
寝屋川市	森 茜	寝屋川市	森 茜
西宮市	秋元 てる	西宮市	秋元 てる
西宮市	岡本 道子	西宮市	岡本 道子
枚方市	森本 節子	枚方市	森本 節子
和歌山県	杉山 精子	和歌山県	杉山 精子
米子市	澤田 千春	米子市	澤田 千春
貝塚市	池田寿美子	貝塚市	池田寿美子
香川県	辻上よしみ	香川県	辻上よしみ
大阪市	大河末佐子	大阪市	大河末佐子
愛媛県	久保 良子	愛媛県	久保 良子
香川県	川崎ひかり	香川県	川崎ひかり
宿毛市	岡村 千鳥	宿毛市	岡村 千鳥
寝屋川市	平松かすみ	寝屋川市	平松かすみ

八木 千代

北

森川まさお選



雪女の愚痴を聞いている北きつね
 冷害がまた心配の北の母
 北向いてごらん背中が温くなる
 嫂は北の生れて西瓜すき
 北方領土領土は何といつてます
 北の海核がどんぶらどんぶらこ
 北の旅捨てたいものを皆すてに
 北へ行く雲は悲しさ乗せている
 本ボシを追って北国めざす旅
 根の方が北へ北へとびてゆく
 飛べども飛べどもツンドラ続くこも国
 北窓もひらき主ない書を曝す
 北風が干大根を皺にする
 小回りのきかぬ男が北にいる
 夏空を火祭りにする北の国
 じよんがらがびつたりと合う北の海
 北風に向くと男の顔になり
 乱暴にされても磁石 北をさす
 北国に生まれてビルを嫌ひ抜く
 合格の通知北国ひとつくる
 北風の中に育って気が強い
 ユートピア北の方とは思えない

正 剣 伝承に超然として北枕
 公 一 北窓を春の売り声聞けにくる
 保 州 北つんと南はんりなにわの娘
 虹 汀 根気よく北方領土主張する
 實 北極点吐く息ばかり櫓の大
 主 一郎 北極点吐く息ばかり櫓の大
 寿 恵子 燃えにくくまた冷めにくい北なまり
 清 美 北向きの部屋で売れないペンネーム
 君 子 北向きの部屋で売れないペンネーム
 小 鹿 北国の酒旨いぞとばされる
 あずき 北風が長引くコメが気にかかる
 節 子 北国の短い春を知って咲く
 章 久 北側の窓で無口になつていく
 たつみ 北方領土熊が鎖を踏んだまま
 雅 城 出稼ぎの父の帰って北の春
 宵 明 人
 佳 雲 地
 よし津 天
 芳 郎 北の春来る人がきた薬売り
 照 子 北国と聞くだけで湧く旅心
 艶 子 軸
 あやめ 北国と聞くだけで湧く旅心

サワ子 大事だと思えばこそその意見です
 洋 希久子 結核の大事を親に知らせない
 春 子 結婚の大事を親に知らせない
 柳 影 大事の前の小心心を引き締める
 保 夫 失って気付く大事を落とし蓋
 凡々子 助手席に大事を命乗せられぬ
 しげる 大事にはならず済んだ警報機
 隆 嫁たてて絆大事に三世代
 洋 敏 親と子の大事なもの食べない
 隆 大事なもの食べない
 治 大事なもの食べない
 恭 昌 大事なもの食べない
 四 郎 大事なもの食べない
 ちかし 大事なもの食べない
 美代子 大事なもの食べない
 彩 子 大事なもの食べない
 明 水 大事なもの食べない
 野村 京子 大事なもの食べない
 京子 大事なもの食べない
 京子 大事なもの食べない
 芳 子 大事なもの食べない

大 事

黒田能子選



ふさ子 大事だと思えばこそその意見です
 柳五郎 結核の大事を親に知らせない
 幸 夫 結婚の大事を親に知らせない
 俊 子 大事の前の小心心を引き締める
 有 一 失って気付く大事を落とし蓋
 正 子 助手席に大事を命乗せられぬ
 たもつ 大事にはならず済んだ警報機
 東 雲 嫁たてて絆大事に三世代
 勝 美 親と子の大事なもの食べない
 直 次 大事なもの食べない
 しげお 大事なもの食べない
 杜 的 大事なもの食べない
 照 子 大事なもの食べない
 満 秋 大事なもの食べない
 未佐子 大事なもの食べない
 あやめ 大事なもの食べない
 千枝子 大事なもの食べない
 英 一 大事なもの食べない
 旋 風 大事なもの食べない
 京 子 大事なもの食べない
 清 芳 大事なもの食べない

大事な子さうっていったきのこ雲
大事な時に猫ゆうゆうと割って入る
教育も大事遊ばすのも大事

恭 昌
日 枝 子
正 雄

大事なもの忘れてないか塾範
野球見て大事な話聞いている
失って大事な人と知らされる

希 久 子
よ し 津
ち か し

大事ないと言えああなたは無関係
持ち駒を大事に持ったまま負ける
妥協して大事な事を置き忘れ

保 州
玉 恵
愛 論

発掘の大事に払う土器の肌
女三人で大事になる話
近すぎて大事な人に気付かない

雅 城
公 子
富 喜 子

物見えぬ力で大事免れる
一大事 心が枯れて笑えない
大事な人と時どき喧嘩しています

高 代
た ず 子
君 子

奥さまをお大事には軽く言う
今一番大事なことは何だろう
つと逃げる大事な命守らねば

蝋 蛸
シ マ 子
重 人

他人から見ればなんでもない写真
古い絵を大事に女一人生き
人

重 人
た つ み
洋

大事を取っている間に潮の引きはじめ
地 理路整然大事な心抜けている
天

あ ず き
矢 内 寿 恵 子

つまずいた小石大事と思う日も
軸

ふえていく絆大事に暮してる

浴 び る

阿 萬 萬 的 選



木洩れ陽を浴びて背伸びのかたつむり
波しぶき浴びて男の顔出来る
脚光を浴びると夢が乾き出す

陽を浴びて田植日和の声弾む
愛情を浴びた小さな芽がのびる
押しつけの拍手を浴びて役決まり

苦言浴び今日の私の幸を知る
喝采を浴びると水が飲みたくなる
世辞浴びてころに風が吹き抜ける

正義派の男が浴びている非難
胸襟を開き心に陽を浴びる
水浴びが好きで派手好きフラミンゴ

さんさんと陽を浴びている風見鶏
頂点に座ると降ってくる火の粉
小半日 陽を浴び鉢の手入れする

月光を浴びると恋がしなくなる
月光を浴びて柔和な石地蔵
一勝が目標だった紙吹雪

浴びるほど飲んでもむなしさが残る
水浴びの小鳥可愛い目が囲み
華燭の灯浴びて踏みだす第一歩

關將軍の末路罵声を浴びて消え

陽を浴びたふとんふくら平和です
赤裸々に視線を浴びるピエロです
糞虫も空を仰いで陽を浴びる

火と炎浴びてたのしい登り窯
異性の視線浴びて女を意識する
スポットを浴びることない深海魚

罵声浴び肩の広さで耐えている
脚光を浴びて己を見失う
意見など聞かず浴びせる野次の声

陽を浴びて育つ土筆の明日の夢
月光を浴びると森がしゃべり出す
陽を浴びて子供も稲も伸びてゆく

スポットを浴びて自分を見失う
菅笠がしぶきを浴びる川下り
陽を浴びる夢ばかり見るモヤシの芽

定退の拍手を浴びたビル仰ぐ
男なら火傷承知の火も浴びる
逆光線浴びてる嘘が透けて見え

脚光を浴びて孤独の人となり
死んでから衆目浴びたペンの跡
不作法にライト浴びせるインタビュ

出る杭が時どき浴びている罵声
天

ひと言で批判を浴びたてっぺんあけ

脚光を浴びて男に出来る隙

軸

松本ただし

清 芳

白 光 子

た も つ

芳 郎

サ ワ 子

路 児

ち よ

重 人

能 子

英 一

里 光

公 子

宵 明

た ず 子

佳

未 佐 子

智 加 恵

洛 醉

と し 子

狸 村

寿 美

正 剣

葉 香

清 史

義 男

公 一

保 夫

佳 雲

希 久 子

新 造

南 奉

喬 水

勇 太

み ね

大 柏

泰 子

良 子

天

松本ただし

軸

脚光を浴びて男に出来る隙

軸

脚光を浴びて男に出来る隙

軸

初歩教室

題 — 虫

吉岡美房

今まで鳥や魚という題のときは、鳥そのものの鶴や鶏、鴨の句を作り、魚のときは鯛、鮎、秋刀魚などの句を作りながら、今回の虫では本来の虫である蝶、とんぼ、ごきぶり、きりぎりすなど虫そのものの句が極めて少なく、虫の二義的な意味である腹の虫、虫干し、泣き虫などが殆どでした。虫という字が入っていないといけないと誤解されたのだと思いますが、今後は、作句の前に辞書をよく見ていただくようお願いします。

葉桜の毛虫は見ないことにする 義子
 (あの花や蝶から遠い木の毛虫)
 追いもせず亡母供える菊の虫 郁子
 (殺さずに虫を逃がして菊供へ)
 虫は虫大空飛んでみたくなり 孝原
 (空を飛ぶ夢が芋虫耐えさせると)
 虫の声残して故郷後にする 友子
 (虫の声振り切り故郷後にする)

張りつめる心に虫の音がひとつ
 (ほっとする梅雨明け近い蟬の声)
 旅の宿山背のすきに虫の声 辰男
 (山背止む合い間合い間の虫の声)
 コンクリート虫も住めない味気なき
 (こころぎも住めないビルの味気なき)
 虫も人も尊い命唯一つ ふさ子
 虫だつてたつた一つの命持つ
 虫切れば半身だけが逃げて行く (因) 静子
 (国会に尻尾を切つて生きる虫)
 門灯を点けると虫が寄つて来る 三千子
 (門灯に蛾も来ぬ夏にしてしまひ)
 保護色で虫それぞれに身を守る 幸雄
 (保護色を神に貰つた弱い虫)
 虫も人もその一生の摩訶不思議 (摩訶不思議幾度も姿変えた虫)
 好き嫌いい虫のせいにし虚勢はり 静枝
 (虫好かぬ奴が居るのも虫のせい)
 虫が好く好かぬ人もて世は廻る 太一郎
 (訳もなく虫が好くので仲が好い)
 虫歯かなチクチク痛み止らない 義男
 (一本の虫歯が父を眠らせず)
 泣き面へ蜂まで馬鹿にしてかかり 美恵子
 (泣き面に蜂は失業物価高)
 離党などに虫つづす実力者 武春
 (政争ににが虫つづすのは庶民)

腹の虫治まりきらず犬を蹴る (仲) 弘子
 (じゃれる犬蹴つて帰つた腹の虫)
 毒舌の上司に耐える腹の虫 三重
 (叱られているのに腹の虫が鳴く)
 苦虫をかんだ顔には近寄らず 宅
 (苦虫を噛んでる父の低気圧)
 この胸にふさぎの虫が住む模様 碧
 (梅雨以来胸に棲みつくふさぎ虫)
 花嫁は虫も殺さぬ顔に見え ふう子
 (花嫁の虫も殺さぬしおらさき)
 虫のよいことはかり言う勝手者 姫女
 (虫のいい政治家だけの政治する)
 虫干しは亡父母居ましてにぎやかに 俊一
 (虫干しで亡き父母と会ふ想い)
 着ることもない晴着だが虫干しする 侑里
 (虫干しで一年会わぬ晴着出す)
 魂の虫干し春のおえんがわ (ゆ) 章子
 (魂の虫干ししてる梅雨晴れ間)
 腹の虫まだ治らず三次会 勝巳
 (腹の虫なだめる酒がまだ効かぬ)
 失敗の試験にうなる腹の虫 忠男
 (試験すみ催促してる腹の虫)
 虫知らず会いたい人は突然来 美寿子
 (急変に虫の知らせがとんで来る)
 虫の知らせだけを形見に散つた亡夫 きぬ
 (虫の知らせだけが戦死の形見とは)

せみとんば群れる自然で深呼吸 方子
 (せみとんば群れる自然へ孫帰る)
 虫取りに興味もたない二人の子 とよ子
 (親のエゴ蟬も採れない子に育て
 こおろぎの歌声夜を楽しませ
 (こおろぎが鳴いて涼しさ聞いている)
 一瞬の命と知らせ蟬蛭 正一
 (蟬しぐれ三日の命鳴きとおす)
 毛虫でもすべて可憐な蝶となる 三津子
 (蝶になる日まで毛虫にある誇り)
 わたくしの血を吸う虫も幸せか 瑠美子
 (幸せな蚊だねわたしの血を吸って)
 ごきぶりを叩くにええ顔しとられず 露芳
 (ごきぶりを見つけた妻の凄しい顔)
 蟬の声やはり夏しか似合わない 悦子
 (夏休み蟬が宿題せきたてる)
 消灯でごきぶりが出る台所 春風
 (ごきぶりにみんな寝るのを待たれてる)
 一寸の虫一念の城築き 八重子
 (蟻の知恵 城とも見える巣をつくり)
 ようしやなく傷にふれ蟬しぐれ 幸枝
 (傷口にしみ入るほどの蟬しぐれ)
 蚊取り線香たいてもタンス止めぬ蚊よ(蘭章 子
 (蚊とり線香くぐって蚊取り攻めて来る)
 鈴虫でワキアイアイお茶を飲む 弘子
 (話止め ああ鈴虫が鳴いている)

手のひらにのせて可愛い虫もある とし子
 (てのひらに乗せてかまきりささぐ可愛い)
 人様の苦勞を知らず米の虫 旭
 (買溜めの苦勞も知らず米の虫)
 雄の生命貰って鈴虫子を育て 彩子
 (命捨ていのちを残す虫の性)
 トンボ羽化いのちの華を風にのせ ひろ子
 (蝶 とんぼ羽化の神秘に見たいのち)
 前身は忘れてしまふ虫になる しのぶ
 (青虫も毛虫も忘れ蝶になる)
 黄金虫食欲に生き孤独です ツネ
 (名前ほどでもないものに黄金虫)
 カタツムリ見つけに行こう雨上り 尚正子
 (かたつむり子でも一軒家を持ち)
 蕭想・表現ともに立派な句
 虫にささぐ急いで帰る家がある タミ
 虫下しぐらいで効かぬ石頭 幸夫
 呼び合つて螢は恋の灯をともし 閑静子
 独酌で抑え切れない腹の虫 芳水
 虫一匹殺さぬ顔に騙される 隆
 蚊を払う団扇止っている将棋 一閑
 青虫の横断中へ応援歌 フク子
 とんぼ採り餓鬼大将が見当らず 高栄
 灯消しひととき虫のコンサート ミツ子
 鈴虫を鳴く気にさせてくれた風 孝男
 横たわる虫もお前も過勞死か あずま

蝶になる虫を殺して花を愛で 紀美子
 あああれが虫の知らせか訃報来る ミツオ
 変身の上手な蝶に憧れる 蘭章子
 にこにこ隣へ虫の好かぬ人 行子
 ごきぶりに厨をゆする午前二時 春枝
 今に見ておれと毛虫のひとり言 笑
 娘についた虫に気がつく時間切れ 一壺
 吊橋を虫に誘われ渡り切り 文子
 虫干しの博多帯から亡母を嗅ぐ 志華子
 ななふしの擬態に学ぶ処世術 半畳
 糞虫のぶらり私も今無職 トミエ
 虫除けの匂かすかに衣替え 君江
 虫つかずつくのも娘気にかかる 幸子
 真直ぐに生きて毛虫嫌われる 恵子
 すぐ顔に出るので困る腹の虫 よしみ
 虫干しのつもりで一人旅に出る さち子
 小さいが数では負けぬ虫の意地 黎之助
 好き嫌いの虫の生命が左右され 君枝
 森も樹も知らずに死んだかぶと虫 志重
 無農薬 虫にしつかり試食され ますみ
 無農薬で虫を知らない茄子きゅうり りつえ
 命火を燃やす螢に身を重ね 敏子

題「探す」 8月15日締切(10月号発表)
 宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

堺川柳会

河内

月子報

器用ではないが好きです亀の足
卑弥呼から続く萬話の海鳴りよ
君ヶ代の速さで国旗揚げられる
買い溜めの米は当分続くだろう
赤信号続きうたがい深くなる
義理堅い人から続く句のもの
勝算の足ゆつくりと組み替える
母をなくして棒のように震える夕陽
がま口がなげしの上に置いてある
屋根のある家で夫婦が続けます
思いきり派手に転んですつとした
不況風 役員会議終らない
書類上あなたの妻で居てあげる
乱雑な部屋から愛が枯れて行く
回転ドア一瞬 人を閉じ込める
ばあちゃんのお化けの話眠くなる
女です死ぬまで化けるつもりです
音痴でも愛の賛歌はうたいます
上の子に生れ甘えたことがない

さよ子 勇太 福一 二南 紀美女 甚一 寿美 夢成 勝晴 岳人 磯子 東雲 摩耶 みずき 夏子 半銭 彰 菜々 文

良妻を演じつづけるのは易し
しっかりと地についている蟻の足
浮きうきと只今化けているところ
頂上に答えがあると限らない
優等生続けていると疲れるよ
死ぬ日まで狐と狸だまし合い
捨てばならずにすんだ妻の愛
地球は月と私は妻と続いている

岩美川柳会

羽津川公乃報

職さがし不況の風が追い払う
桜の下 老いは夢より過去を追う
計報記事追うと病気が気にかかり
追い風に乘って自分が見失う
深追いを避けて痛手が浅くすみ
先頭をゆくより追う方が性に合う
青い鳥追って果てない旅つづく
未来追う男が走る白い途
足跡を追えば追うほど深い霧
ひたすらに追うて袋の中に落ち
追っては困り追わねば寂し共稼ぎ
流行を追って個性が泣いている
雲つかむより難しい夢を追う
頭の中で追っているのは金のこと
追い着いて見たら男の人だった
追いかけてくるのは憎い女ばかり

川柳東大阪

森下

愛論報

退院日こんなにつまみお茶がある

度

星子 かりん 小雪 楓 春香 千万子 頂留子 天笑

嘉津江 美代子 孝由 忠良 孝男 睦子 公乃 單車 希久代 喜与志 美恵子 きみ子 芳江 大漁 螢

姑に一目置いた旨いお茶
好きな人出来て娘が習うお茶
奥嵯峨の四季折々に美しく
万葉の花を咲かせて古都の春
やさしさを忘れぬ古都の仏たち
わがままで困ると妻にほれている
わがままな兵器 地球の断末魔
遅かったわがまま詫びに花手桶
わがままを言いに子連れの里帰り
仲間から一人浮いてるくそまじめ
浮いた話一度もなくて老いの坂
病人が笑って家族浮いている
物語よろしく古都の地酒酌む
老人の窓それぞれにもつ個性
喪の家の少し沈んだ窓のいろ
文学の窓珈琲にこっている
窓まどのふれあい温い路地の風

岸和田川柳会

田中

文時報

洋服が身軽で足袋は忘れられ
母の足袋借りてきまいった晴姿
地下足袋に通天閣の灯がやさし
白足袋の艶に酔わせる舞扇
白足袋が足にそぐわぬ齢となり
やみ汁をこわこわ口にする珍味
えげつない句 紀州なれ寿司で
母さんの強味はやはり女の子
子が強味 家庭牛耳るお母さん
食糧を自給自足の出来る国

文秋 太一 英 勝美 湖風 文子 隆 柳宏子 信博 高尚 猪太郎 東雲 愛論 真柳 信治 元紀 頂留子 けい子 佳生 ダン吉 狸村 白光子 洋 東雲 昭二 京 文時

七光 強味に付いた金バツジ
娘が三人みんな近くに住む強味
根回しへ手応えあつた天下り
ピンチに檄 手応えあつて勝ち進む
ラッパ吹き豆腐いらんと言ふ昔
手のひらで豆腐を切るのにリズムつけ
湯豆腐を囲む家族の温い箸
朝の早い豆腐屋稼業 子は継がず
豆腐屋を継ぎ早起きも苦にならず
酒の量たしなめている冷や奴
イザコザがすんなり片付き冷や奴

川柳後楽吟社 従野 健一報

対岸の鬼を頼りに舟を漕ぐ
ゴミ箱で罪と罰とがケンカする
扉近くで煽るは回り者
さばよんだ歳だけのぞくコンバクト
幸せの絵の裏側であぐらかく
口下手なあなたの温い手を信じ
ゴマスリの下手な貨車で蕎麦を売る
神仏と対話へ合わすたなごころ
不況などどこ吹く風と花見酒
母の日に貰った父の日は通り過ぎ
終電車 線路に星が落ちている
切り札も使い過ぎれば錆がくる
芝居だと気付いた柏餅貰つ
風受けて真鯉緋鯉が屋根を越え
性格の違いが結んだ糸を解く
理想論大きく抱いて羽搏こつ

呂 萬 甚 一 信 博 朝 一 鹿 太 郎 通 彦 月 子 勝 晴 一 弥 勝 晴

邦 季 吉 則 金 吾 博 友 哲 郎 佐 加 恵 青 銅 柳 五 郎 道 博 桃 風 正 秀 美 智 子 草 風 拓 治 義 親

ことあれば牙も出します嫁同士
それぞれに出会いがあつて藤まつり
開運を祈りひとつの絵馬吊す
褒められて一枝あげる羽目になり
黒粋になつて立派な物語
貧乏な先祖を美化する物語

南大阪川柳会 金井 文秋報

処世術 鈍なところも見せておく
十聞いて一ほど覚り生きている
相應の愛を信するベアルック
分相應な鏡を一つ持つてゐる
つきあいのランク決めてゐるし袋
奥床し慈母観音は伏目勝ち
先生と生徒互いに持つ歩幅
みず引き草の奥床しさには負ける
交際の範囲せめて行く斜陽
鈍くさい母だが父の命綱
義姉さんの後でと嫁の奥床し
腹決めて乗つた泥母悔いはない
交際して見よかと嫁く気になつたらし
昼しじま庭園の佗し奥床し
控へ目にそつと座席を譲る人
バラ屋敷着物の似合う女がいる
付き合ひを大切に空財布
嘘つきに大きなホラを用意する
満員で乗ること出来たが降りられず
乗るよりも押せる幸せ車椅子
部長になつても肩書のない名刺

幸 子 玉 水 健 一 秋 月 照 路 恒 明 文 秋 源 一 智 子 秋 子 萬 的 柳 宏 子 寿 美 柳 伸 志 華 子 冬 葉 庸 佑 頂 留 子 悟 郎 咲 子 直 子 千 里 東 雲 正 博 勝 美 度

鈍行に乗つて気ままな一人旅
ただ歩く一日でした初デート
同じ夢見て幸せなおつきあい
勝手口から往き来ができるお付き合ひ
封切ればかすかに花の香りして
鈍感で何が出ようと平らげる
どんじりでやつと見つけた私の名
交際と言ふほどでなし年賀状

尼崎小園川柳会 立谷勇次郎報

手の温み残っていますあの出逢い
久方の出逢い仮面で美辞麗句
菖蒲園肩を寄せ合う日の出逢い
出逢いから苦楽を共にする予感
良い人に出逢つてほしい蝶結び

真 砂 憲 祐 シメ子 三 男 トミ子 文 江 久 子 千 梢 夢之助 弘 治 歌 子 鹿 太 人 定 人

佳句地十選 (7月号から)

井 上 直 次

母の日もいつも野良藩の母でした
ほめ言葉肥料になつて子は伸びる
蝶の舞う夢を見てゐる花の種
妥協して堀の深さが解らない
窓際の椅子蹴りやすく出来てゐる
何を会社ですやろ横文字で
小心の知恵に悲しいものがある
逢いたいがあなたの世は遠すぎる
白か黒その中間もありますよ
順番が狂つて河が蛇行する

(伊) 森 子

ジョギングへ出逢った人に声をかけ
ピアホールばったり出逢った妻の顔
行きずりの出逢いが生んだ夫婦花
嘘一つかくし切れないいい男
降る気配ですと妻から傘貰う
降ってくる火の粉たまには受けている
降る雨に宵待草の歌が出る
フルムーン飛驒の出湯に星が降る
通り雨 妻の小言のように降り

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

女同士 内緒話は風に乗る
北斗星 幼馴染の点と線
酔い痴れて白河夜舟漕いでいる
高齢化嬉しくもありまた侘びし
連休も祝日もない老い独り
リハビリと思い毎日風呂掃除
もう一度山が動くか次期選挙
無農薬虫もつかずに娘は育ち
ダンブカー跳ねる泥水傘で受け
ブレンド米はどよく母の愛で炊き
浮草も根つ子はちゃんと泳いでる
赤ペンで消せない傷を抱えている
年金は小遣い程度しか出さず
金出さぬ奴真つ先に口を出し
東西南北何れの方より吾は来し
陽の目見ぬ没問供養の酒をつぎ
噛みしめずとも溶けていく幸がある
スーパ―も堪忍袋まだ売らず

向 西
末貞一
尚 利
十四郎
紫 香
ミサ子
美 々
幸 代
勇次郎
治 幸
紀 一
喜久亭
青 琴
ふさ子
ちよ
義 美
旭 恒
朴 竜
幸 夫
タ ミ
晴 子
高 明
弘
久仁於
虹 汀
四 郎

タクシーに委せて走る宿浴衣

川柳高知

川竹

松風報

正 剣

捨てられてなお咲く花をいとおしむ
気がつくと薬と友となつて春
誉められて月下美人の命尽き
保険屋が俺の命を軽く踏む
蝶が舞う短い命はなやかに
孫の摘む花の命に目をつむり
すばらしい命 仔馬が立ちあがる
忙しき一輪挿しの花も枯れ
意地悪なそんな私も棲んでいる
逢わせた人ともいるのに無意識
正論を吐くと世間は鬼と言ふ
オフィスで仕事の鬼の孤独感
角かくし鬼の仮面は別に持ち
恋一途おんな鬼にも蛇にもなる
空威張りするビル街の鬼瓦
定年へ鬼の仮面はもう要らぬ

川柳たけはら

森井

青居報

少しずつ大人の階段上がります
髪を切る少し変わつてみたくなり
やがてやがて螢もろともダムになる
子に連れられ三永のふじも久し振り
まだ夢はある八歳のグロープよ
後戻りさせてはならぬ子の行方
ひょうたんをのぞけば海が広がりぬ
子に残す美田は無いが本を買ふ

幸
竹 萌
快 風
圭 風
さ き
憲 一
佳 風
春 枝
さ ち
千 恵子
菊 野
千 鶴
功
千 鳥
朱 坊
松 風
中1千
3史子
枝
蘭 幸
ヤスエ
千代美
浪 子
比呂子
美佐雄

春風 細川丸が座礮した
嬉しさは曾孫四人がびかびかで
雑草もすくすく育つ五月晴

整理すると淋しさだけが残る城
裸婦像がまばゆくもない齢となり
ランドセル孫には一寸重いかな
小手毬の季節優しい私になる
ああ松島カモメが群れて船を追つ
五月晴れ緑に素足染まりそう
題名は後から誰かつけるだろ
シャッターチャンス笑わぬ夫を撮っている
梅干しの秘伝を語る母達者
息子を送る喪服を着ねばならぬとは
夕焼けが美し過ぎて帰れない
離陸機を見ながら食べるにぎり飯
夢に見る故郷いつも母が居る
花吹雪淋しくなった独りもの
誕生月すこし燃ゆるものを秘め
大阪良いと娘がちゃんと暮らしている
わがままな枝に鉄を入れておく
森や林が消える人類も消えるのか
五十回忌の父の法事に血の絆

三幸川柳教室

三宅

保州報

東の間の椅子と気付かぬ有頂天
甘い汁吸えるこの椅子譲れない
舞台より椅子が気になる立見席
思い出し笑いの好きな椅子一つ
妻という安楽椅子に枷がある

麻 代
喜久恵
喜美子
清水
規 代
汎 美
夏 喜
静 佳
一 路
笑 子
淑 子
節 夫
正 宏
貞 子
一 枝
栄 恵
青 居
静 風
のばら
蝸 牛
町 子
親 雄
正 男
義 男
み ね

遊びたい盛りを椅子に縛りつけ
四捨五入されて私の椅子がない
人裁くことのむごさよ電気椅子
銘木を夢に枝打つ声かけて
無雑作にボンと割られる箸の私語
つつましく君の添え木で生きて行く
父の樹に嘘ついている里帰り
桐の木を植えて楽しい夢をみる
木の話じっくり聞いてやる鉄
青春の愛は樹海にまよい込む
矯められて枝は謀叛を企てる
真直ぐに伸びる樹木に迷いなし
野にあつて個性の笛を吹きつつけ
ひらがなでのらりくらりと逃げておく
三歳のもう納得をせぬ個性
ああ個性 常に私を支配する
方言の個性が町に溶けてゆく
紫外線カットの傘を持って出る
置き傘にわたしの過去もついて発つ
子守唄もう聞かれぬ日和傘
都おどり日傘が並びヨイイヤサ
へそ曲がり子報の晴れに傘を持ち
強風に傘を窄める処世術
決断のにおさを囓うジャンプ傘
失ってから大きさをを知る傘下

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

高夫 三千子 保州 道子 初子 恵子 恵美 朱夏 百合子 満洲子 章子 当代 美智子 桂香 千秀 信子 美寿子 圭子 由梨 かなめ よし子 和子 鉄治 公子

ゲーテにもなれぬ子供の尻を押し
自過剰 鼻から笑う癖がある

五楽庵 一光

近くいて少し離れて期待する
笑い苣食べて笑いが出なくなる
よく笑う人が持ってた泣き黒子
背伸びして期待の重さ躲して
鉄置いて滴る乳房含ませる
目を閉する神の言葉が聞きたくて
老婆の笑うしぐさが若々しい
しつとりと微笑み少女羽化をする
パチンコの玉にくらくらする財布
天皇賞から天皇賞産まれぬ
私も責任という犬が吠え
来ぬ人に嫉妬がたぎるおでん鍋
螺旋階段の底まで響く笑い声

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

おさな子よ泣いたカラスがもう笑顔
裏おもて他人の笑顔みています
がん告知 永遠に明日がこないかも
お待たせをしました明日は咲く桜
日記帳明日があるの救われる
明日もまた頑張らねばと日記閉す
あしたこそ夢のつづきを書いておく
まっすぐに歩けば晴れた明日がある
吐息かけ磨いた窓に明日が見え
山茶花も明日散る性は悟ってる
小さな光 明日へつなぐシンデレラ
明日になれば仏の水も汚れよう
裸木も明日に向って炎えている
明日の計父は草刈る鎌を磨く

正徳 一花 生恵子 龍人 祥子 千加子 隼 黙人 雅城 甲吉 井蛙 花匠 叶

富美子 千春 日枝子 夕子

こっそりと明日の用意して嬉し
写経して明日を迎える安らかさ
明日は売られる雌牛牛舎を離れない
バックミラーに映る明日の影法師
明日逢える百万本のバラを挿す
明日までの時を大事に嫁がせる
明日こそ姑より先にネギ刻もつ
明日のない戦場生きた脚愛し
瑣細な一日をノートに書き込む

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

開いてる窓はのぞいて見たくなる
おもいきりよそ見などして足の裏
一杯のお茶にこだわる朝の膳
妥協せぬ報いかとびら開かれぬ
人間の生きる証にゴミがある
それなりのわけもあるうがゴミにされ
春夏秋冬カーブミラーの独り言
写し出すカーブミラーに今日は
三界はどちらを向いても闇のなか
カーブミラーうれしそうなる花吹雪
カーブミラー自分の鬼が見えてきた
おとつとカーブミラーも肩がこり

川柳岩出

小倉アサ報

驚かすはずの手筈が弾まない
狙い狙われ今日を命とする野獣
驚きのひどさは隠せない案山子
子育てはビックリ箱の繰り返し

朗子 保子 瑞枝 ふみ 亜弥 花子 天雀 荒介 ちよえ 恵美子 英子 はるみ 鈴江 かつ子 聖子 好栄 洞然 博利 清泉 白汀 綾子 アサ 紳一郎

米つぶが流れて老いを悲し
ご先祖に生活の詩を告げる

靖子仁

ツサリと殺して芝居ムードあげ

虫のいい話濡れ手に粟掴む

多賀

時々濡らしてもらう鰯 鰯
道草も濡れる久方振りの雨
峠を越すと道路が濡れていた
救急箱の中でわたし濡れている
下着まで濡らし元氣な声かえる

いずも川柳会

園山多賀子報

紐付きの女へ時々バラを買う
酒一合紐がゆるんだい話
五つ紋羽織の紐が重く揺れ
一本の紐にいくつもの思い
慣れぬ手が男結びの紐かける
紐少しゆるめ心に風入れる
伸びるなら紐は何とか足してやる
一言が奮い立たせた立志伝
リハビリの言葉が増えた散歩道
濡れ衣となる一言を梅雨に干す
茶筒から暇な言葉が出て遊ぶ
投げつけた言葉が戻るプーメラン
今一つ吐けば炎となるだろう
何となく気になる母の言葉尻
船頭が多くて糸がからみ出す
ほころびを隠してくれる母の糸
長い糸いたわり合つて丸く巻く
針の穴通つて強い糸になる
網の目の図面に沿つて蜘蛛の糸
糸もつれマリオネットが踊いた
まだ背伸びせねば見えない父の窓
窓ガラス今日のわたしが映らない

午 朗
静 恵
鶴 丸
文 子
叮 紅

青 湖
叮 紅
茂 美
文 子
ま こと
房 子
陽 子
鳳 笙
智 子
多 賀 子
章 子
寿 美
ち え
しま 子
満 江
篤 子
明 子
肇
流 石
久 栄
ち かし
れい じ

夕焼けをきれいに見せたガラス窓
病床の窓で眺めた昼の月
さようなら未練も共に焼く手紙
軍事便はのかな愛も秘めた過去
追伸にちよつぱり耳をくすぐられ
親展の手紙を回し読みされる
茶封筒一寸気になる女文字
がさつ者男結びの紐ばかり

はびきの市民川柳会 榎本

吐来報

虹の街 仮面のずれた人にあう
目糞鼻糞笑い合つて政治劇
手の痺れ解つてくれぬレントゲン
ボケじやない元々頭悪かった
朝寝して掃除洗濯済ます夢
茶柱も立つてくれている嬉しい日
家中をはらはらさせて初歩き
「有難う」唯それだけの遺言状
遺言の中に辞世の句も残し
冷夏暖冬 地球の遺言かも知れぬ
遺言はみんな達者で金借るな
道端の子猫を囲むランドセル
火事現場囲む野次馬邪魔をする
別嬪に取り囲まれた満員車
旅の宿むかし馴染と囲む膳
腹割つて囲む話へうなずく眼
あの英姿もう囲まれぬ師の枢
オーケーが何時でも出せるよい構え
OKを焦らしたのには訳がある

佐 吉
幸 一
清 子
きみえ
祥 庵
草 丘
おしえ
ひろし
美代子
昇 晋
辰 子
さとみ
敏
かつみ
和 風
悦 子
泰 子
ぎいち
伴 子
シマ子
六 点
敦 子
忠 宏
たけし
一 壺
扶 代

簡単にオーケー出せばなめられる
オーケーが貰えぬままに新世帯
オーケーの軽い返事に騙される
オーケーをもらわぬまままで角かくし
駆落ちも別居もあつた共白髪
退職金そろそろ別居考える
別居まで進んだ釣のかけ違い
遠い子と空はひとつと思ふ春
やれ別居すわ離婚だとレポーター
家賃が高いそろそろ別居やめようか
気楽だと笑う一人の背が淋し

京都塔の会

松川

杜的報

睡蓮の息吹き聞えるモネがいる
掬われて花のいちにち賜いけり
ルノアール花が嬉しい亡娘の帽子
百花爛漫パティリス キンギョソウ
一面の緑風の音さき気がつかぬ
山肌に杉の苗木のマスゲーム
女の部屋に話の苗が植えてある
朝顔の苗と千代女の噂する
伐採へ苗木植えるを忘れない
父と子の対話を作る空の青
作り笑い鏡に本音見透かされ
手作りの醬油しほる樽の色
作文にいつも出てくる義理の母
洗面を作り言いたい事を言う
出来不出来神が作ったものなのに
童心に戻つて作る竹トンボ

志 洋
りつえ
利 武
キミ子
吐 来
金 太
夏 秋
るり子
昭 平
みつこ
絢 子
年 代
静 江
圭 坊
房 子
求 芽
武庫坊
正 坊
庸 佑
真 柳
杜 的
萬 的
紫 香
二 南
福 子
飛 鳥

落し穴作る可憐なイヤリング
 実費だけ出して女の家に住む
 お互いの肚を探っている実費
 実費では納得いかぬ計算器
 実費の中にも含んでいきます消費税
 波風を立てず実費で妥協する
 子に甘い家から貰うて来た子猫
 許す事ばかりがつく老いの道
 水上バスの様く手を振るガラス越し
 さくら山吹雪柳一度に咲いて水きよし

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

ただし 磯 女 芳子 百合子 宗悟 笑女 達子 水客 義子 澄子 江美 能子 いわゑ 房子 哲子 正とし たず子 風云児 森子 武庫坊 トミエ ルイ子 芳子 春蘭 石舟

涼し気な眸を騙すのはむずかしい
 ハイと言えは良いのにそれがむずかしい
 女三代ほど良く暮すむずかしさ
 むずかしい顔して冗談たまに言い
 分かり合うことが一番むずかしい
 むずかしい付かず離れぬお付き合い
 うっかりと秘密しゃべつてからのうつ
 母の腰支えて足りる細い杖
 ぶんまわしと言つて年齢がばれました
 バランスのとれた夫婦がよく揉める
 身体にいい物ばかり食べ覇氣がない
 鉛筆を削るとめくれてくる昔
 バラの咲く庭で今年もいとこ会

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

鹿太 よしゑ 向 西 修 水 勇次郎 末貞一 すみ 澄子 十四郎 尚利 鹿太 まさ 正治 昌治 弘治

濡れてこそ紫陽花の花雨を恋う
 あじさいの奇麗に咲いた瀬戸火鉢
 てんてまり紀州の姫はまだ可愛い
 年月の過ぎる早さを孫で知る

川柳塔鹿野みか月 土橋 蟹報

子定表に書けない秘話が胸にあり
 天井も床も突きたくなつてきた
 やんわりと突いてくるから逃げられぬ
 はるかなるものへ少年子定立てて飛ぶ
 人生に子定などあるはずがない
 遠足の日だけ子定の早起きだ
 八十歳の姑の子定に負けていた
 由緒ある文庫で鍵がかけてあり
 定年で文庫に通う日がふえる
 いざの時 人の心の裏おもて
 母さんの自慢料理は喉すべる
 青すぎた去勢が少し早すぎた
 心太を突く要領を覚えなす
 文庫からわが青春がとびだした
 突き返す力もなくて花を見る
 師と想う岩波文庫借りた頃
 泥沼にするためのり込んだ足
 生きているピヨコンと飛んで青蛙
 父の文庫に一億円の宝くじ
 寄り道をすれば鬼瓦が呪む
 頑として歴史に耐えぬ鬼瓦
 なめらかに喉を通らぬ棘がある
 鬼瓦わが家を見張りしてくる

歌子 六浦 紫香 いわお 蟹報 明美 盛桜 房子 くに子 早苗 圭子 みさ子 智恵子 保子 弘子 八重子 孔美子 実満 和子 信江 しげる 幸枝 汲香 はるお 三子代 かつ乃 睦枝 久枝

意地悪なデマがふたりの仲を割る
大屋根に守られ育て見送った
米不足うめばし女よくかせぐ
予定にはなかった大臣ばかりいる
煌いて人の住み処に載る蟬
黙ってござる仏に朝のご挨拶
血管が青筋たてて笑っている
向う脛を突かれて手には歩がひとつ
神さまを両天秤にかけていた
体重が三キロ増えて暑くなり

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

忘れるも許すも愛のなせる術
逆らう子何時も心の隅に居る
無い袖を無理に振るからボロが出る
向い風支えてくれる友がいる
一病をかかえて励む草むしり
喪服着て笑顔で幼児あやし居り
不揃いな縫目の跡を振り返る
紋白蝶幼き恋をふと思つ
里帰り母娘の会話の長い事
タイ米を食って今年の穀を蒔く
意のままに話の出来る老い二人
夢一つ追って老後の独り旅
恋破れ縫える針糸なもののか
楽しみも苦勞も知っている健康
縫わないで貸衣装着て娘は嫁ぐ
山菜やキノコ実れる里の山
荒波も夫の舵で乗り切れる

孝男 一京 孝由 次男 諷人 喜与志 きみ子 隆風 とみお 螢

どの屋根も同じに染めて茜雲
川柳塔とつとり

武田 帆雀報

約束を待つ私と花時計
かあさんよ約束きつと待つとくれ
約束が時おり僕の影ゆらす
言い訳はせぬ約束で裏をかく
約束もうれし事忘れは忘れない
約束を駅のベンチに置いてくる
約束を果し安堵の高いびき
約束を違えた友に詫言を書く
禁煙の約束だけは二度とせぬ
なすの花みな約束を待っている
歳隠す腕前鏡知っている
腕前は即席ラーメン作るだけ
機械化でいい腕前が泣いている
腕前がよいから休む暇がない
腕前へ茶碗の空気彩を変え
手際よく秒針と合うソバを切る
腕前は互角気魄で勝負する
執刀へ腕前万が一思つ
鬼を飼う腕前私にもあった
ドライブの腕を信じて横にいる
山の神風を吹かすと恐ろしい
大戦も年を重ねて風化する
春一番風が童話を売りにくる
風当りしつかり胸に受けとめる
水子地蔵が挿したか風車
花柄のカーテン風にのぞかれる

白柳子 明美 しげる 享 あづま 余志身 一枝 孝男 輪多朗 由多香 日枝子 喬水 銀嶺 友夫 侑里 黙光 千秋 俊路 ひろ子 登美子 艶子 山人 崇 孝原 粗粒 一京 宣子

真面目さに風も味方を買って出る
脱皮する蝶に信じる風がある
かなしみを噛みしめてから風光る
風下に回ろう耳が遠いから
ほたる川柳同好会

井上 直次報

したたかな白はどくだみ草の白
強いのは隅で黙っている男
拗ねる子の強がり何時も親が負け
気の強い女とばかり見合する
持て余す数字に強い新社員
強いから怖い人とは限らない
強がりの真似もできない古希となる
この場合一番強いのは泣く児
強すぎて絆がぶつんと切れました
強がってみたが目に沁む月見草
強さでは明治生れにかなわない
草の根の強さ欲しいもやしっ子
聞く耳をもつてはじめて親父です
聞くだけは聞くがお金は貸せません
念押しして本当にただかと聞く老婆
老妻を美人と思った頃もある
美人にはない温かさ妻は持ち
不美人も美人も小さき骨となる
美人より心安らく人がいい
塗る叩く下手な化粧の顔が出来
口下手の今日こそ晴れのタキシード
口下手が上司の肩をもんでいる
冗談が下手で誤解をすぐまねく

主一郎 帆雀 螢 静生 薫風 正坊 明光 博史 眞郎 一笛 方郎 英子 敵子 恭子 洋子 純次 螢柳 祥司 正安 昭子 紫水 桂子 福一 直次 竹二 幸子

御典医の末裔 今日も誤診する
下手な字の母の便りにある温み

喜美子
瀧小

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

風呂の灯に裸身大きく透けて見え
生真面目なお世辞も一つもない風呂
ご馳走はないかと先に風呂へ入れ
風呂ひとりビールもひとり吊りしるのぶ
風呂順を狂わせている本の虫
檜山へつれてく風呂に入れてやる
雨の日の下手なピアノが鳴り止まぬ
不快指数がゼロになるまで手を洗う
指定席いつも貴方が居てくれる
座っても寝てもひとりの膝小僧
白足袋を脱げば明治の座りだこ
不遠慮に座れば座れそうな隙
座るのはよそう貴方の手が怖い
道半ば迷いの森にほととぎす
二つぐらゐる言われて黙々とく
火柱がぐらりと揺れた日の出逢い
新茶揚げ杖より低い祖母が来る
ほととぎすがさめないように持ち帰る
病む脚をなだめすかして梅雨近し
傍観者になってガラスの街にいる
しやばん玉五月の鯉に憧れる
無駄話 女は知恵を積んでいる
相槌を打たねば事情明かさない
還暦は女盛りよ桐の花
スピーチの巧くなる頃去るポスト

昌子
正治
紫香
求芽
歌子
真柳
すみ
正一
芳子
石舟
メ女
道子
夢之助
夢之助
杜的
澄子
栄
年代
伊三郎
磯
まさお
武庫坊
二南
正坊
よしお

五線譜の下を転がる父の歌
片減りの靴から漏れてくる吐息
靴下へお灸の跡が透き通る
たそがれの帽子は海へ帰ろうとする
真剣な手話の瞳が光っている

川柳藤井寺 高田美代子報

鹿太
風云児
白溪子
薫
萬的

飢えだらうか大きな虹を描いている
居眠りをさせぬ法話のおもしろさ
花しい心のあたたかい句
花菖蒲 紫式部といふような
姫路城大名気取天守閣
賞罰なしの顔 男湯と女湯に
母の日に母はたばたと日が暮れる
奥さんへ可憐な花を贈ろうか
献立のアユ解禁の味をほめ
順番からゆけば課長は俺の筈
順抜いて反則おかす子の燕
三姉妹 美人の姉が売れ残り
順番が違つて鯉のぼりをおろす
よく耐える園児の小さき足の裏
下積みを耐えた我慢の深いしわ
冷害にみずほの国も耐えきれず
開病の孤独に耐える長い夜
苦しみを耐えた男の間味
参つたと言えぬ男の脂汗
父ののが男だなどつとるすぎる
父の背がまだまだ大きく見える朝
まだまだと信じられない古希むかえ

昭子
政代
みのも
悦子
宗一
公輔
利武
扶美代
末一
三夫
みよこ
志洋
一屯
春蘭
繁男
義一
吸江
恒雄
恒雄
美房
与呂志
敬一

翠洋会 渡部さと美報

先代の助言まだまだ要る社長
年金へまだまだ家族ぶら下がる
まだまだがもうに変わって喜寿になる
子の意見まだまだ青いサクランボ
前夜祭 明日はまだまだ盛りあがる
万歳三唱まだまだ日本だと思つ

むし暑いのが倍になりトラ負ける
むし暑さ大は毛皮に耐えている
むし暑さ眠る毛皮に隙がない
ああ地球 水も空気も病んでいる
水の命もやはり輪廻か雨を待つ
虫すだく真つ只中において無心
虫も殺さん顔してえげつないお人
他愛ない喧嘩居どころ悪い虫
哲学の道でハミング赤とんぼ
選挙戦だけの電話で虫がよい
無農薬 夫は虫と四つに組み
浄土まで私を運ぶ虫の声
腹の虫勘忍袋の戸を叩く
蚊も蠅も無気味な事にいなくなり
あめんぼの涼しさ軽さ梅雨に入る
糞ころがしそのおかしさとかしこと
夕やけこやけママを待っているあにいと
童謡を覚える前にイングリッシュ
童謡は旧友思ふ走馬灯
夕陽背に米寿童謡口ずさむ
赤い靴もどつてみたい少女の日

史郎
治子
三郎
和樹
和子
代子
正雄
さと美
宣司
風楽
希久子
真砂
恭昌
久峰
英一
絹子
良江
綾子
綾子
亰子
宏子
春子
千歩
みずき
志華子
佳秋
正坊

大空へ足ふくらまず蛙の子
老いて知る失うた時の大きさを
その背の浮かぶ大きな亡父の靴
傘と靴売るほど干して大家族
人の世やほたるに甘い水はない

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

新聞では一行 僕には一大事

新聞のお詫びは隅にちよつとのり

焼芋は千円買つても新聞紙

一本の藁を求めている迷い

迷つたが金より心について行く

この年で美人に会えば迷うボク

シナリオが狂うたそうで迷てはる

迷うことあまりに多い春のうつつ

夜が明けるいち時の迷いだよきつと

ねずみ捕る猫の神話が崩れだす

鼠を捕らぬ猫で声が人を食い

血統書つきねこは大事に医者通い

人事部の猫で声に呼び出され

まねき猫横むいている閑な店

鈴つけた猫は礼儀を知っている

冗談にも猫の悪口言えぬ家

下町を支配しているうちの猫

幸せを明日へ明日へと水車小屋

一ぱいの水でやさしさ取りもどし

鮮やかな復讐 川に水が無い

水すくつたしかに私生きてる

水争い村の地蔵は喋らない

東雲
ひろ子
光子
登志子
鬼遊

洋風

シマ子

欣之

朝子

たもつ

みつる

弘直

頂留子

隆

勝美

かつみ

祥一

和子

度

信博

泰

和樹

夕花

透太

美幸

三男

弱点を一つ知ってるまねき猫
傘マーク出しなければ猫顔洗う
未来派の絵筆は色を選ばない
園児等は未来へ向けて翔んでいる
未来像見える眼鏡はかけません
ひとめ惚れ花にお水をやるように
裸電球の下で未来を語つたね

城北川柳会

吐田

公一報

妻送る後顧ないまま眼の手術

姑になって自分の座を探す

おでんあて流転あれこれ一談義

フラッシュに慣れて動ぜぬ時の人

ライバルを意識に入れて出る微熱

ひらめいた一瞬の技 舞の海

おはようもおやすみも聞けぬ家庭増え

華やかに蝶にかえつた娘が眩し

気丈なりと一人住いも批評され

告白へ日傘くるくるすねている

心なき批評がのびる芽をつぶし

アーケード日傘をとんと買い忘れ

不況風知らぬ存ぜぬ鯉のぼり

手きびしい批評に潜んでいる温み

子なし夫婦妻の日傘が少し派手

祝詞聞くチームやる気になってゆく

心から祝詞をくれる友がいる

病窓に我が身を思ふ昼の月

門柱に亡夫の顔がまだ残る

額一枚仕上げて酒の味が冴え

年人
東雲
とみ
春堂
春子
柳伸
恒明

秀夫

佐津乃

春蘭

史風

ただし

倫子

政子

昭子

登美子

典子

あい子

満津子

トヨ子

達子

静子

頂留子

柳影

白峰

公一

公一

孫の背を見上げて祖母の笑い顔
結納もきまりデートに眼鏡かけ
万歩計 若草山の天に立つ
差しのべる掌に貧富の差ない温み
結束も割れて碎けて流れ出す
混迷の政治怒つて機が墜ちる
年金のバターン崩した初夏の風
コレクシヨンに加えてみたい夜の蝶
やんわりと余祿求めてきた電話
人生の余祿へチビた靴を履く
中流の暮し余祿も見栄のうち
毎日の客にはメニュー渡さない
毎日は天体ショーで明け暮れる
毎日を主婦が演出家庭劇
ありがたいことに毎日ある仕事
毎日を生きること不思議ふと思う
時をうつ毎日がある掛け時計
大志もつ友の笑顔が輝いて
大志もてわが子に語る父の夢
中年は大志も夢もいだけない
月へ行くこれも大志が孫の夢
駅弁をこっそり食べていた大志
安来節 胸に大志の隠し芸
減反の案山子大志を捨てきれず
アメリカで夢も大志もうちぬかれ
朝シャンの香り改札走り抜け
シャンブーの泡と流れた今日の憂さ

川柳大阪

川端 一步報

信男
親章
司
雅果
末坊
本蔭棒
洛醉
青道
比呂志
美津留
柳弘
二南
柳元
重人
川童
希久志
美花
たつお
敦彦
河南子
与呂志
しげお
まつお
酔照
鉄心
一介

シャンプーで洗う脳みそまで洗う
髪洗うあなたを忘れないために
十万個毎日消える脳細胞

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

笑風
金太
一步

呼び捨てにされている愛疑わず
ずいぶんと妻の名前を呼んでない
大声で呼んで下さい生きてます
若きムンムン駅に降り立つスニーカー

田実子
欣史子
千枝子

走ろうか待とうかと駅の雨宿り
会釈して改札とおる最寄り駅
気が変わり乗り換え駅をやり過ごし
ラッシュアワー駅に降り立ち悔いる老い

豊吉
シマ子
香住

呼びつけておいてやんわり肩叩き
もう誰も私を知らぬさとの駅
浮れ女の裾にからまる萩桔梗
川床に吹く風 鴨川の灯が揺れる

光子
能子
あずき

川柳ねやがわ

高田

博泉報

アベックと間違えられている父娘
遠足の小さなアベック肩を組み
爪だけは普通に伸びて老いている
何もかも普通で気兼ねない余生

頂留子
亜也子
良知

空き缶を蹴ってストレス消せるなら
空缶が濁世の雨にさらされる
町内会 外国人も輪になつて
普通車に飛び込んでも来た土地なまり

一途
菜月
高栄

外国まで行って離婚の決意する
波留吉

とし子

外国にすこしかぶれたバスポート
アベックで来いとは何かありそう
アベックのその後を知らぬ花時計
普通ですぐも拳もくれた親
からからと空き缶の舞う無人駅
空き缶は聞いていけない話聞く
外国をこんな身近にした平和
一生外国を知らず年をとる
生活を普通に戻す風が吹く
四季の風普通の暮しさせてくれ
ここに空き缶があるから並べとく
二個連れのありし日むつまじ亡父母よ
アベックが何やら揉めているらしい
空き缶を拾う軍手が真っ白い
空き缶のようにわたしを捨てないで
郷愁の雨がやさしいエーゲ海
究極のアベック妻と石の下
空き缶入れが口あけて待つジュース
アベックに一・五人の席を空け
見なれた鳩に安心感のあるお寺
外国の空気吸いつつ機から降り

むらくも句会

藤井

明朗報

太陽の笑顔がほしい梅雨の空
いい人で思わず何もかも話す
知る意欲まだまだ持つていい人生
汗ふいて沈む夕陽に手を合わす
ピクニック汗も逃げ出す滝しぶき
いい人の顔でとおして損をする

太陽の笑顔がほしい梅雨の空
いい人で思わず何もかも話す
知る意欲まだまだ持つていい人生
汗ふいて沈む夕陽に手を合わす
ピクニック汗も逃げ出す滝しぶき
いい人の顔でとおして損をする

太陽の笑顔がほしい梅雨の空
いい人で思わず何もかも話す
知る意欲まだまだ持つていい人生
汗ふいて沈む夕陽に手を合わす
ピクニック汗も逃げ出す滝しぶき
いい人の顔でとおして損をする

恵子
時弘
かすみ
シマ子
弘直
一風
洋

たもつ
黎之助
冬葉
英王子
庸佑
三峰

速水
良三
吉之助
幸雄
度香

紫香

明朗

正朗

秀朗

一葉

鶏生

雄司

ひと言が胸にしまっておく平和
汗くさい働き蜂の夫が好き
胸はつて言える交際まだつづく
タオル借り胸をつくって帯をする
胸あけて恥ずかしそうに受診する
胸の内ぼつりぼつりと語る酒
緞杖に一休みする汗をふく
意外な事聞いてそれから胸が鳴る
知りつくす昔の教えよく覚え
旅に出るころも憂さも洗われる
梅雨晴れへあとの豪雨が気にかかる
梅雨晴れ間物十し竿が不足する
汗すれば答えてくれる野菜畑
思春期の胸読みとつてもらえない

はる代
美恵女
三津江
幸子
朝子
芳子

千島
仲子
婦美
定子
百代
幸夫

ヤス子

富柳会

池

森子報

紅紫朗

宗一

恒雄

晋

喬之

岳人

扶美代

悦子
敦子
昭子
登子
絹子

ならぬ恋胸から流れさつぱりと
笹舟を流した里に父母がいる
叫んでも帰らぬ母を呼ぶ墓参り
愚痴ばかり妻のノートに失語症
過労死の訳をノートが物語る
地に帰る花の叫びを聞き洩らす
どこまでも流されてゆく騙し舟
ボクの投げた石を流した凄い川
字が下手で誰のノートか直ぐ解る
同情は嫌とムンクの絵が叫ぶ
人生観流れをかえる風五月
流されるままに母の海に出る
胸底を流れる激しい音がある

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

キープしたボトルが俺を呼んでいる
食い盛り鍋でお箸が喧嘩する
風刺するカルタ世界を変えて行く
働いて働いて人間失格し
カルタとり負けてタコ焼き買いにゆく
陽光に弾んだ苗に水吞ます
もう春だ何から先に手を出そう
連立と自民がカルタ並べ合い
のびのびと天下御免の筆運び
論より証拠 大臣の黙秘権
人気者 無理が命を締めさせ
人知らぬ苦労重ねて得た人気
のびのびと育つ葉を母は持ち
のびのびととんでる妻が刺激する

花子 昭水 トシエ 智久 (伊) 勇 和樹 透太 美代子 文次 美房 維久子 花梢 森子

わが家にも膝病む鬼がいて困る
ライバルが人気の座から下りてこぬ
のびのびと出来る間がない子沢山
のびのびと育つ杉から花粉症
のびのびとしたら証書を見失い
のびのびと花見もならず永田町
太陽に両手をあげて深呼吸
蛸壺でないとのびのび眠れない
のびのびとしているようだが後が急ぐ
のびのびと育ち屈託ない笑顔
のびのびとするにもコツがあるらしい

岬川柳会

八十田洞庵報

雄々 よしえ 玲子 喜与志 宗光 螢 とみお 幸子 節子 弘朗

第12回 夜市川柳大会

とき 7月31日(日) 午前10時開場

ところ 堺市総合福祉会館 大研修室

兼題と選者(各題2句)

「飲む」 村田たか子選

「元氣」 奥山晴生選

「巡る」 田中輝子選

「谷」 板野美子選

「すつきり」 小池しげお選

「群れ」 福井桂香選

「人並み」 小島蘭幸選

「目」 鈴木公弘選

「忘れる」 河内天笑選

「式」 新家完司選

*席題なし・出句締切正午

呈賞 天地人と佳作に呈賞

会費 2000円(昼食・記念品・作品集とも)

懇親宴 午後4時半から河内天笑宅 会費5000円(20名まで)

主催 堺川柳会

■各地句会だより

八尾市民川柳会

宮崎 シマ子

八尾に菜の花句会があったことを、ご存知の方は、大ぜいいらっしゃると思います。私が入れていただいたのは、昭和五十六年ごろでした。当時錚々たるメンバーが、四十名から五十名くらい集まっていたいへん賑やかな勢いのある句会であったと覚えています。そして何がどうなったのか駆出しの私には分かりませんが、急に解散になりました。栞先生の地元に句会がなくなることは淋しいし、私自身、何所で勉強して行けば良いかと困りました。

そんな折、大路美幸さんが、「八尾市民を中心にして柳派を問わず、少ない人数でも句会を創ろう。そのうちに、他の町の方々も来て下さるだろうから」と誘ってくださいました。編集事務は大路美幸さん、会計事務は鷺見章さんということで、六十二年七月から発足しました。当初、沢山来てくださったの

ですが、近ごろは投句者も含めて三十名前後に落ち着きました。菜の花句会の中から続けて出席くださる方、欠かさず投句くださる方、遠い所からお越し下さる方々、有難いことと思っております。



7周年記念吟行に参加した会員

当句会の特徴は、投句の方、早退の方になるべく早く入選句をお知らせすること、これは皆様に喜ばれているようです。もう一つは、句会終了後、飲める人も飲めない人も集まって二次会をやります。そこで川柳談義いろいろなことを食事しながらのおしゃべり、これが良い人生勉強になります。また、やお句報には、土田欣之さんの選で河内音頭という雑詠欄があることも大きな特色です。日本全国から好作家が投句してくださっています。

創立当時、陰で三か月持つか、半年続かなかと言われていたそうですが、この七月で七年たちました。七周年の記念句会として七月十日、奈良長弓寺吟行をいたしました。来年も、再来年も、十周年も、吟行をと会員一同、張り切っております。

八尾には、もう一つ勉強会があります。これは中央公民館の川柳講座を西尾栞先生がご指導くださっていましたが、ここからもすぐれた川柳家が沢山出ており、今は高杉鬼遊先生が講師をお引受けくださり、名も「川柳クラブわたの花」と変り、受講生も約三十人、最高は八十代から三十代のお母さんもおられ、十人ほどが市民川柳会にも参加し、楽しくやっています。

長女 二女

小島 蘭 幸

おしめ換えているのに欠伸してござる
幸福になる耳朶をして生まれ

時の経つのは早いもので、長女の史子は中学三年生、二女の千枝は中学一年生になった。二人ともバレーボールクラブに所属しているこの頃はとてもたくましい。

先日、長女が髪が重たいというおかしな理由をつけて髪を切った。ショートカットにした長女に刺激されたのか、二女が続いて髪をばつさり切ったのには驚いた。小学生の頃から「ジュニアバレーの選手はショートカットが一番」と口がすっぱくなる程言っても切らなかったのに。親の目から見れば性格も容姿もちっとも似てない二人と思うのだがショートカットにしてから、学校でよく姉ちゃんに間違えられたり、妹に間違えられるそつだ。長女も二女もちいさい頃は、私の行く川柳大会について来ていたのに最近では、クラブや

友達、それからちよっぱり勉強を優先にしている。来なくなった。淋しいけれど仕方がない。

少しずつ大人の階段上がります 千枝

とびきりの笑顔見せるのあなただけ 史子

長女が確か三歳の時だったと思う。故清水白柳先生の句碑建立の会に二人で出席した。その日の新幹線は超満員で座ることが出来なかったのだが「お嬢ちゃん、ここにおいで」という見知らぬおばさんの一言で大阪までずっとその人と一緒にいてくれた。人なつっこいので長女と行く川柳の旅は、とても楽であった。私は少し離れて見つめていれば良いのだから。

三年保育の幼稚園も長女は、自分から進んで行った。すぐ誰とでも友達になるらしく、よく「お宅のふーちゃんのお陰で、うちの子も幼稚園が好きになって」とお母様方からお礼を言われたものだ。

ソロバン、習字、ピアノ、バレーボールと姉妹は、同じ道を歩いているので、どうしても比較してしまふ。だが勉強でも何でも、長女はひらめき型で二女はコツコツ型だ。

幼稚園の年長さんで、はじめてソロバン塾に行った時、五の玉を手前にしてソロバンを置いた長女は、それを見た先生に「ソロバン

が逆さですよ」と言われてくるりとソロバンを裏返したそつだ。この話を妻から聞いていかにも長女らしくて大笑いしてしまった。

一年生の帽子よ小さい旅人よ

小さな身体に大きなランドセル、小学校に入学した二女の黄色い帽子、うしろ姿を見送りながら、私は「ガンバレ」と心の中でつぶやいていたものだ。翌年の三月、郵政川柳中国ブロック大会に、家族揃って出席した時のことを彼女は「楽しかった大久の島」と題して作文を書いている。川柳のおじちゃんと一緒に自転車で島を一周してウサギと遊んだ事、美しい夕陽に感動した事、お姉ちゃんとバラダイス銀河を歌った事など。そこには、小学校生活一年で大きく成長した二女がいた。

お祈りしてもサーブが入らない

長女と二女がそれぞれ小学四年生から始めたバレーボールは、私たちを大いに楽しませてくれた。私も練習試合や大会には出来るだけ応援に行った。負けても負けてもボールにくらいついてゆく姿は美しかったし、お祈りしながら打つサーブはとても可愛かった。

長女二女二十年後をふと思つ

二女が生まれてからこの句が出来た。早いもので二十年後はもうそこに来ている。

やがて長女も二女も嫁いでゆく紫

隠岐の風光と史跡訪ねて

山陰で川柳塔社勉強会を開催

大自然の妙

西口 いわゑ

六月二十二日、黒川紫香先生以下二十九名（男性十名・女性二十名）、大阪空港午前七時五十分のはずが定刻より半時間以上も遅れてしまった。整備上のトラブルとのアナウンスであった。梅雨の最中とは思えないほどの晴天である。

雨男の紫香先生同行なのに、天も川柳塔の意気にも、美男・美女には負けたのである。飛行機は無事、米子空港に着陸、タクシード境港へ。そこで懐かしい「ゲケゲの鬼太郎」に遭遇した。いわゆる町おこしと言うのだから、水木しげる誕生の地ということで、「水

木しげるロード」が出来、鬼太郎はじめ二十三体の妖怪たちも一役買っているというくらいらしい。私たちは鬼太郎音頭の流れるロードを絵がきを買ったり、店をのぞいたり、まるで小学生の遠足のようである。

高速船で別府港へ。そこで昼食に出た魚のおいしかったこと、すごい満足感を抱きながら国賀海岸めぐり、美しい小さな島々、悠々と釣りを楽しんでいる人、様々な形で突出している岩たち、思わず手を合わせたくなるローソク岩など。そして雄大な美しい赤壁、「これは女神がお産をした場所と言われて、この一帯をクミツルと呼び、言語時代（七―八千年前）からの字名で、女神男神の交遊した場所と伝えられている」とは観光パンフの解説。大自然の妙に心奪われ、日頃の憂いも家も夫も、忘却の彼方へ……。

今夜の宿は「ホテルニューかじに」、和気



島の岸壁に並んだ一行

あいあいと宴も盛會に、カラオケ、美酒にも酔い、楽しい一日であった。

駅鈴の音色 昔を呼びさます
隠岐の日々 流人涙の仏彫る
町起し鬼太郎さまが主役です
虎の尾の花房揺れる黒木御所
たそがれる島の情緒の旅の宿
一つしかない交通信号島の旅

ルイ子
はつ絵
きぬ
てる
友照
絹子

隱岐造りの神社

高須賀 金太

勅使會第二日目の二十三日朝は、島後（ど
うご）の西郷港にほど近い宿舎で、ウグイス
の鳴き声に目が覚めた。空はどんより今にも
降りそうだったが、宿下駄をつつけて、港
の方角へ歩いてみることにした。

入江に架かる橋を渡る時、ふと気づいたのは、欄干の擬宝珠が駅鈴になっていることだと言った。渡り終えて、前方のトンネルへ向かって歩を進める、とポツリポツリ、とうとう降り出した。八時半、貸切バスで出発。きのうの島前（どうぜん）に比べて、道路も広くて意外に整備されている。まず玉若酢命（たまわかつのみこと）神社に着く。参道を進んで門を入ると、八百杉という老杉があり、高さ三十米、樹齡二千年と言われる。本殿は大社造りと春日造りを合わせた、隠岐造りという独特の建築様式だそうで、現在の建物は三百年ほど前の建立とか。

本殿の隣にある代々宮司を務める億岐（おき）家へ立ち寄る。宝物館を奥さんが案内し



てくれた。目を引いたのは駅鈴で、これは昔役人が公用で都へ行く時、宿場から宿場へ馬を乗り継いで行くのに使った通行証だったそう。駅伝のルーツは駅鈴と聞いて、なるほどと納得。

次いでバスは水若酢（みずわかす）神社に着く。二千二百年前に開かれた隠岐の一の宮で、祭神は水若酢命。こちらが兄、先の玉若酢命は弟だそうである。

境内に隠岐郷土館がある。明治十八年に郡役所として建てられたのを西郷町から移築して郷土館としたもので、洋館の白壁が緑の芝生に映えてなかなかのものである。

バスは島後の最北端、白島（しらしま）海岸へと急ぐ。展望台から眺める島々は、きの

うの国賀海岸に比べてはるかに女性的な趣きである。ガイドさんの話では、白島というのは百に一つ足りないから白島というのだそうだ。ほんまかいな？

続いて隅崎国分寺へ。明治二年の廃仏毀釈により、ことごとく焼き払われ、現在の本堂は昭和二十五年に再建されたものである。なお、本堂裏手に、後醍醐天皇行在所を示す、高さ十米ほどの石碑が立っている。

西郷港近くの食堂で昼食をとり午後一時二十九分発のジェットフォイルで七類港へ向かう。

隠岐島の草はむ群や摩天崖
 船酔いもよし絶景の島巡り
 米粒のようだが隠岐の島広く
 ごれんさん神話の島の国説り
 遠流の島に時を昔にかえず波
 千々の思い鎮める隠岐の雨けふる
 秘話数多流人の憂へ掌を合わす
 流人にも僕にも優しかった島
 北前船ひよっこり来そう西郷港
 海見える丘にひっそり流人墓
 野あさみの彩凜として隠岐の海
 あごなし地蔵姫の悲しい恋を秘め
 配流から神話に変わるバスガイド
 お刺身のシャブシャブという島の味
 方言でガイドだんだんさようなら
 千梢
 楓
 菅生
 射月芳
 たす子
 義子
 桂秋
 丹吉
 楓楽
 正坊
 千津子
 みつ子
 美房
 英王子
 かすみ

晴々とお帰り

八木千代

案じ続けていた空模様も梅雨の季にしては上々で、二十一日はまた十三夜の月の青くて美しかったこと。この分ならば明日の空路も大丈夫と安心。あくる朝は波止場の近くまで波の様子などを散歩がてらに、「ああ風だ」これまた無用なお節介。隠岐航路は外海ですのにな。

まだまだ先のことだと思っていた勉強会もあたりまえのことながら、起きたり眠ったりして暮らしているうちに来まして、何となく当日はそわそわどきどき、泊まり組など昼過ぎから鞆に入れたり出したりいっぱしの旅気分。皆生温泉のかんぼの宿は大山荘に向かったのです。とりあえず「二階の海の見える室に落着いて、誰が切り出すともなく俄か稽古のしげき節。想いははるか隠岐へとんでそのうちに鳥取、鹿野、東伯、松江、出雲と懐かしい顔がぞくぞくと揃えば一層盛り上がり、ただバスの到着を待つのみです。

「元気で帰って参りました」「無罪放免に



盛会となった勉強会

なりました」と、晴れやかに賑々しく島帰り。一行がバスから降りられると、ロビーは花が咲いたよう。その昔、北条氏を討って政權を回復されようとした後鳥羽上皇、後醍醐天皇の流され給うた隠岐島から本土に帰りに着いたというところで口々のジョークです。迎える方も「流人さまたちのお帰りよ」とか、「刑が軽く済んでよかったですね」と気を許しての冗談のやりとりも和やかに、一風呂のあとにはきやらばくの会員の差し入れて、草餅に旬のそら豆の館ころ、胡瓜と人參と夏大根の粕漬、熱い番茶、ずいぶん喜んで頂いてしばらくすると大広間で大山荘ご自慢の新鮮な魚

介を使った晚餐、紫香先生の挨拶、颯云兄さんの本社勢三十人の紹介、荒介さんの地元の紹介が終わると待ちかねたようにビールが抜かれ、楽しい交流の宴となったのです。

またまた温泉に入るグループ、按摩さんを呼ぶ室あり、車座になって川柳を論じる仲間あり、潮騒を枕に皆生の夜は更けて、そして明けていよいよ勉強会の当日。

会議室は手狭で気の毒でしたが、米子からは初めて句会に出席する新人、大山番傘さんの参加で90名の熱気に選者は「神話」の瑞枝さん、「漕ぐ」奥田みつ子さん、船津とみ子さんと同道の前川千津子さんは「出逢い」の選を。お三方とも上気気味でそれがほどよく緊張感と呼んで、なかなか手応えのある句会となりました。当日の秀句は一句と厳しく、選者さんは大変でした。

「神話」 林 瑞枝選

たましいを太らせたいな神話読む より子

「漕ぐ」 奥田みつ子選

沖はまぼろし權は一途に漕ぐばかり 千代

「出逢い」 前川千津子選

いい出逢いだつたと最後には妻に 希久子
バスを送って私たち、久々の再会とそれに
伴う必然の別れ、確かにじめじめした別離で
はなかつたのです。

銀髪燦々

橘 高 薫 風

句集を箱から出すと紫の布地に銀髪の二字が銀色に輝く。まさしく本間満津子さんの筆跡で、これがよく書けている。

銀髪になつたら着たい色があり

昭和五十四年度の路郎賞準賞第一席の句である。私が推薦者だからしつかり記憶している。眼の不自由な満津子さんのあこがれは何色であろうかと、当時からいろいろ推測していたのだが、それは紫だった。思うに眼の見た少女時代、すみれに殊の外深い印象を持つておられたに違いない。

俯いてじつと誰かを待つすみれ

そつと咲くすみれに句与えませ

の後出一句により、私はそのように感じた。

その上にうれしいことは、嫁御の真知子さんが「思い」の項のカットにすみれを描いておられる。心を行き届かせて読むと仲々に味わい深い句集であること、かくの如しと言える。

「句は人なり」と言うが、満津子さんのお

人柄が鏡に映っているように見える。一句一句にそれが見える。

何もしなかった沢山の昨日

盲目の人の昨日が畳々と重なって悔悟に繋がっている。さらりと言っているながら深いのだ。

良い顔で干し物の山たたんである

切った爪へお役目どうもご苦勞さん

黙つて人とお黙つてお茶を飲む

これが満津子さんのこのころの句に現われた姿であるが、声の美しさもまた真正銘、誰しも知るところである。

厳しい生活を背負つて来られたのだから、

きりきりしやんとした一面も持ち合わせてお

られるのは当然のことで、背筋を立てた句も

鏡に映っている。しかし、それをユーモアに

まぶしてさり気ないところがうれしい。

良心がときどき狸殺入りする

医者探し試食するようにはゆかぬ

あの頃を思えばまるでお大尽

横顔の右と左を見てしまふ

満津子さんの句は、定型のリズム感がしつ

かりについて格調が高い。

空青く花赤くあれ太郎の絵

二十一世紀もそこまで迫つて来たのであるが、私たちの地球を健康体のままで孫の代に

引き継いで貰えるだろうか。わが孫よ、わが孫の孫たちよ。スケールの大きい調べは、わが子だけに留まらず、永劫の願望のように受け取れる。

満津子さんの真骨頂は、

ばあちゃんにチューしに飛んで来た二万

キロ

はいお目々 白杖ちいさな手してくれる

などの句で、お孫さんたちには手放しに相好を崩しておられる。ブラジルで事業をなさる

ご子息を介して、街の郵便さんとのやりとり

も、近所にお住いのご長男のお嫁さんへも屈

託がない。

遠い子の名を郵便屋さん知っている

負けるわあと嫁おどうかすスニーカー

句集「銀髪」の最後を締めくくる句は、

雪月花宴の人は変れども

である。「年々歳々花相似たり、歳々年々人

同じからず」の唐代の詩を想起させる。

それは私には、恩師の北川春巢先生や川口

弘生先生をはじめ、富岡温子さんら故人への

想いが切々と感じられるのだ。

印刷屋さんが涙を流しながらタイプを打つ

た句集は、ストレートに人のこころを打つ。

「雪月花日本の国のありがたさ」を噛みしめて、いつまでも川柳をたのしんで下さい。

路郎忌

本社 七月句会

七月七日(木)午後五時半
メンズファッションセンター

『番傘』の水府忌との選者交換も十五回となつた三十回目の路郎忌は、他柳社の方々の出席を得て、一〇九名の盛況で開会された。

はじめに司会から、今年十一月に除幕予定の堀口塊人句碑建立基金協力と、七月三十一日の夜市川柳大会の参加依頼があった。

「おはなし」は理事長の橘高薫風氏で、路郎師に直接、薫陶を受けた初心時代の思い出が中心となる。師は弟子達に大変厳しく、編集の手伝いをしていても誰もほめられたことがないという。氏自身も、句についても一言も教えてもらったことがなく、その表情などから判断をしなければならなかったとか。そんなことで、生前は腹を立てたりもしたが、亡くなつたあとで、弟子の育て方の真髓に、深いところで到達していた師であつたとわかるようになった。また、どんな仕事の途中であつても、家を辞する者には必ず玄関まで送り出すなど、けじめをきっちり守る人であり、

今日に至つても氏の胸のうちで、その存在は大きいままであると言う。最後に、路郎師を含めた先人達が、苦勞して高めてきた川柳の質を落さないよう、一人一人が努力して欲しいと述べ、結びとした。

初出席は松浦ヨシオ氏(守口市)。
月間賞は番傘の中田たつお氏に輝く。

(司会―天笑)(受付―英王子・寿美)
(記名―天笑・月子)(清記―楓楽)

席題「星」

牧浦完次選

織姫とジョークを交わす路郎の忌
ひこ星と逢えるでしようか向井さん
星降る夜人並みに恋できました
小学校からクラスの星としてもてる
本心を言おうか星のまたたきに
星一つ流れ何もかも話す
笹の葉にいのちを吊す星祭り
満天の星が左遷の明日照らす
流れ星わが情熱はどこへ行く
病み続く地球を見てる天の川
星になる私の位置は決めてある
星の降る夜は童話がよみがえる
戦もつこりごりですと星ひとつ
どの星も地球の青さ妬いている
草に寝て勿体なくも星を浴び
星空が好きなく女に口説かれる
星屑の中の一つがボクの星
降るような星空仰ぎ生きている

桂香 千秀 甚一 笛生 勇太 しげお 隆 弥生 智子 天笑 シマ子 雅文 文時 天笑 太茂津 愛論 正坊 つとむ

逢うための軌跡残して流れ星
天の川 契りひとつを渡らせる
ハートニカ吹く少年に父の星
二十五時 都会のひずみ覗く星
再会の機会をくれた星月夜
星屑のみんな忘れぬ人ばかり
許つた目に星空が奇麗すぎ
星空の下でたこ焼買っている
流れ星あなたも行方不明なり
アドリブも星の王子に届かない
泣かすのも泣くのも勝手 星月夜
流れ星 森の深みへまた落ちる
離れば大阪の空星が降り
母さんの星はあれだと抱き上げる
弥次馬の星も出ている天の川
一人占いさびしい星がつきまとう
たくましい星が見染めた流れ星
彗星へ長い電話をかけている
登頂は明日 寝袋へ星が降る
次の星どうあろうとも君と僕
村おこし星の屑でも落ちて来い
星の降る街で寓話の二つ三つ
地球以外の星には罪の色が無い
妻になりそこなつたのよ星が降る
おだやかな余生を祈る流れ星
火星からいつか地球を見てやろう
星飾る七夕さんも十字架も

軸
星流る遊学の子をふと思つ

公一 森子 冬葉 寿美 透太 薫 つとむ 白溪子 昭子 おさむ 鹿太 森生 笛生 愛論 章久 たつお 義子 しげお 雅文 ダン吉 かすみ 鹿太 元紀 恵美子 たず子 英子 恵美子 完次

兼題「守る」 岩佐ダン吉選

モナリザになつてのれんを守り抜く
守銭奴も三分の情けあるだろう
守られてゐる妹がよくすねる
お守りさんにお礼を言わなあかなあ
見ぬふりも寝たふりもして身を守る
結局は私を守るのはわたし
赤絨毯 保身に長けた顔並ぶ
陰にいて守ってくれるのはあなた
守るより抜け道さがしているルール
約束を守って貝になるばかり
身を守るアンテナ高く張って置く
一睡もせず火を守る登り窯
誠実を頑固に守る太い眉
この線はゆずれぬ紅を濃ゆくひく
家守る老母にマンネリなどはない
自信過剰 足元守るのを忘れ
無冠だが信念だけはまだ守る
女の友情 秘密ひとつが守れない
銃後を守るそんな言葉に騙された
禁煙の部屋を守っている頑固
母と妻守り通してよう翔ばず
どの色で翔んでも母の傘の下
底辺に居ても理性は守っている
身を守るために時々馬鹿になる
座右の銘守れば余生肩が凝る
もうもろに耐えて不況の首守る
身を守る嘘なら僕もつくだろう

花梢 権悟 正子 満津子 信治 射月芳 吐来 千秀 柳宏子 露児 房子 たつお 狸村 重人 弥生 みつ子 紫香 朱夏 文秋 大茂津 いわゑ 重人 吸江 三千子 シマ子 美代子 金太

攻めるより守った方がしんどいぞ
真直ぐを守って喘ぐ父の貨車
付き合ひの悪さいつでもマイペース
村守る道祖神足ふんばつて
車間距離守ればすぐに割り込まれ
だんご虫もわが身を守る死んだふり
禁煙を守れと子供抱かされる
身を守る毒なら僕も持っている
火になって守るものありまだおんな
孤塁を守る女 合鍵など持たぬ
佳
守りから攻めへ男の目が変わる
ぶくぶくと護憲の旗手が濡れそう
守りたいことがあるのか白い皿
守るものがなくて力が入らない
旗守る人が一人はいてもよい
人
音符守ってこころの唄が唄えない
地
身を守ることから無垢な目が濁る
天
九条を守って地球の端に居る
軸
母さんが守りになってきた強さ
兼題「敬う」 塩満 敏選

正坊 天笑 義子 天笑 たもつ トメ子 文 楓楽 鹿太 鹿太 美津留 白兎 たもつ 正坊 哲子 つとむ 元紀 ダン吉 文子 武庫坊 高栄

天皇を神と敬い散った華
畏敬する薬師如来の厚いむね
天地を敬い森は生きている
敬称は抜きで二次会はずみ出す
学歴は無いが敬う父と母
神敬うアイヌコタン熊祭り
有機農いのちの大地敬うて
敬うてゐるけど椅子も狙つて
子から孫みんな敬う地蔵さま
何かある娘が敬語使ひ出す
長寿国 敬老の齢変えないか
あぐらかき敬語で話す電話口
敬うてゐるのに渾名しか出ない
敬語ばかりを重ねて嫁の日が長い
敬いを身につけヒト科誕生す
うやうやしく両手をついて雨蛙
かなしみはまだ続くのですか 敬具
どちらかと言へば敬語がすつと出る
そろばんも弾いて私淑しています
上すべりの敬意を聞いているコップ
最後には敬う人は妻だろう
敬っているわけなし最敬礼
色即是空 敬うは父と母
大金を積んで尊敬されてない
母の目に敬服します婿えらび
尊敬がお世辞が横腹痒くなる
敬うて諭吉を日ごと拝んでる
シルバースーツに座り老人らしく居る
佳

清史 哲子 佳秋 昭子 萬的 満津子 文秋 紫香 恭昌 吸江 志洋 一風 森子 度 洋 蕉 茜 吐来 ダン吉 美津留 千梢 雅文 欣史子 狸村 太茂津 公一 良知

敬えと不敬罪まであつた過去
敬老の杖にこだわり少しある
釣りキチの夫を敬ううちの猫
尊い生命 敬いながら昼寝する
ご先祖を敬う墓に草はない

人

敬老の日に小遣いをせびられる

地

犬猫に敬語 夫に河内弁

洋

我が家にも女神がひとり手を合わす

希久子

軸

敬天愛人これが郷土のモットーで

敏

兼題「すつきり」

小出智子選

成るように成るすつきりとめしにする

さち子

洗い髪すつきり棘も抜いてくれ

花梢

呑み込んですつきりしない胸の内

満津子

すつきりと割り切れません脳死論

保州

どう着てもすつきりとせぬシルエツト

文子

すつきりと言つてしまえば波音し

稚代

すつきりと短冊掛けに師の一句

哲子

すつきりはローンが終わる十年後

幽澄子

すつきりと短い髪で夏が好き

シマ子

すつきりとさせて魅力もひとつ消え

欣史子

証人が死んですつきりしないまま

桂香

洗濯の山を崩したつゆ晴れ間

隆

すつきりとしれない辻褄合つてない

三千子

サヨナラと書いてすつきり手を洗つ

薫

何かあつたかすつきりしてる目の色だ
最終回ホームランでけりをつけ
こてんばんに負けてすつきりした気分
すつきりと締め括るのに酒が要る
ぶちまけてすつきり解けたわだかまり

柳影
元紀
射月芳
吐来

仮面脱ぎ捨ててすつきり席を蹴る
すつきりと言えない事もある浮世
証人喚問すつきりしないまま終り
襟足の白さで浴衣引きこたまる

頂留子
萬的
いわゑ
文秋

どの薬効いたかすつきりした顔で
すつきりとした貰うもの貰うて
言いたいこと言つてすつきりしましたか
ピカソ見てからすつきりした目線

英子
柳宏子
公一
ルイ子

傘持つて行きやすつきりせん天気
傍目にはすつきり細工して夫婦
納得したがすつきりせぬ示談
すつきりと紹を着て暑さよせつけず

笛生
豊太
柳宏子
楓楽

すつきりと話のついた大ジョッキ
煩惱よすつきり出来ぬ事多し
誰になつてもすつきりしない政治だな
こめかみにすつきりしないものがある

白兎
柳宏子
公一
ルイ子

家中がすつきりしない受験前
放置自転車駅前からはずす
すつきりとしたらお尋ねいたします
快食快便 頭すつきり冴えている

金太
金太
天笑
つとむ

秋までに出る判決が待たれる身
すつきりとなりましたお腹空きました

柳宏子
紫香

古い記憶の底にすつきりせぬ別れ
すつきりとさせたたら疵のつくひとも
仏壇の母にすつきりしてみせる
言つてしまえばすつきりとするのだ仏

絹子
三男
恵美子
森子

今日のとききよう片付けてよく眠る

智子

兼題「定着」

片岡つとむ選

知らぬ地で妻と苦勞をして根付く
団地十年 寄付も法被も増えました
平成も六年たつて呼び慣れる
だんらんの囲炉裏に父の席がある

里兆
章久
保州
権悟

カラオケの世界定着した不思議
風船を持つて出掛ける甲子園
中流が定着してる朝の音
定着した日課 独りを住み慣れる

天弘
東雲
吐来
絹子

この街に定着してるホームレス
ぶどうたわわ夢へ定着せぬ内に
貧乏神が帰つてくれぬうちの軒
ブレンド米だんだん定着してきそう

信治
柳宏子
冬生
冬葉

定着はしたがしゃきつとせぬ身体
デルタ地帯まで流れてやつと種を蒔く
定着の町で賑わうちんどん屋
定着した庭に毎年同じ草

雅文
シマ子
三千子
白溪子

定年後の夫にやつと慣れました
定着の婦長結婚などしない
悪法がすぐに定着して困る

柳宏子

柳界展望

作品が決まり、同人の門谷たずさんが県民局長賞を受賞、住谷石舟・丸山よし津の2氏が佳作となった。甘い言葉に何度転んだ膝

こぞう 門谷たず子

★中本まさお追悼句会が9月11日午後1時から奈良県王寺町公民館で開かれる。

★尼崎川柳協会主催の尼崎川柳大会は6月26日、101人が参加してサンシビック尼崎で開かれ、次の各氏が秀句賞に入選した。

戻ろつか橋が微妙にゆれている 長浜 澄子
午後雨あなたは何をしていますか 大西 俊和
やわらかい耳を見ている 奪いたくなる 森中恵美子

小火ですんだ話をしてる 缶ビール 米森 良

《尼崎市議会議長賞》
珊瑚礁で絵本は少女期をすす 小西 幹斉

《尼崎市長賞》

上向いて帽子虚しく笑っているか 田中 薫

★第17回阪神文芸祭の入選

大会は11月6日午後1時から相生市総合福祉会館で開かれる。宿題は、話・渦・薬・顔(各題2句)と特別席題1句。

★第16回川柳せめんだる誌

上大会の要項、次のとおり課題と選者(共選・各題2句)は、意川辺昭子・林荒介▽点佐藤美枝子・田口麦彦▽難詠森中恵美子

小松原爽介。計6句を使えんに連記、参加料千円を添え、9月20日までに〒756

小野田市新生2-5-21・石田明へ。

▽同人消息△

■奥谷弘明氏(参号・倉吉市)去る5月、倉吉博物館協会の視察旅行に参加、徳島市観光協会から毎日踊る阿波踊りの賞を授与された

■恒松町紅氏(参号・松江市)7月から新たに「山陰

文芸川柳」の選者となり、6月26日付「山陰中央新報」

文化欄に「川柳自適」と題する随想を執筆している。

■藺田猷吾氏(同人・静岡県)長年SL専務車掌として勤務した功績が認められ6月23日、地区のロータリークラブから表彰された。

▽出版△

■「ある町医者」のモノローグ(河野副木著・川柳噴煙吟社刊・B6判102頁)

吉岡龍城序文・整形外科医のユニークなメモリー句集

■「まみどりに」(渡辺和尾川柳作品集・A5判238頁・みどり選書16・2000円)第一第七章のさくひんとは抄、作品に

関する読者の感想をつづった。うたともちIIから構成されている。

■「もくせい」合同川柳句集II(もくせい川柳会10周年記念出版、B6判128

頁)会員33人・旧会員11人の各10-16句を収録。

▽芳志△

■本間満津子さん(同人・大阪市)から句集「銀髪」刊行を記念して金一封を拝受しました。

▽住所変更△

■瀬尾六郎太氏(同人名簿P9せ)

▽訃報△

■神谷凡九郎氏(常任理事大阪市)6月8日死去、73歳。告別式は同11日、港区老人センターで行われた。

■黒田五郎氏(同人黒田くに子さんの夫君)6月23日死去、79歳。

▽訂正△

■7月号P103中段・末尾から4行目「ぬけぬけと遅れて先に筆をとる」の作者「一風」↓「三雄」▽P104上段8行目「苦しみが日に日に募る片想い」の作者「稚代」↓「さちよ」



神谷凡九郎氏を偲ぶ

西田 柳宏子

受話器を取ると、凡九郎さんの奥さんの声に不吉な予感が走る。一瞬のためらいに口籠ったあと、「主人が亡くなりました」と。

平成六年六月八日午後十時十分、享年七十三歳、本名神谷治郎の死であった。

奇縁というか、妙にウマが合ったのか、凡九郎さんとはよく句会などで同席したものだ、決して自分から積極的な発言をしたり、アクションを起こすことはなかった。しかしながら一本、芯が通っていると言っか、頑ななところも見受けられた。

「ボクは何も出来ぬから、凡九郎（ボンクラ）という雅号をつけたが、誰もボンクラとは呼んでくれず、そのままボンクラウでできている」と雅号の説明をしてくれたことがある。また、体調が健康な方ではなく、軍隊でも自動車部隊に配属されたが、遂に一度も運転台に座らず、復員してからも免許をとらなかつたという。結婚してから腰部骨髄を患い、

以来、体内あちらこちらに疾病を持ち、仕事も伯父さんの店を手伝うことで切り抜けて来られたようである。

川柳は故戸田古方氏に師事し、古方氏の句風を継承していわれる「凡九郎調川柳」を貫き通されてきた。話し口調の句が今となっては懐かしい。合同句集『川柳塔』を見ても、都合つかんかいナあんだあかんナア

成る様になるサ素晴らしき結論よ

男と女 神様イタズラモノだんナ

自分も人間 人間嫌いなのも自分

山川草木ほんに住み難うなりました

まっばだかで生れてきたから欲がある

不足言える有難いことやおまへんか

言わしときまひよ男は先に逝きなはる

時間切れと言うような死だった

死にはったそうなと誰の記憶にも

のほか、「そうなんですヨ人間なんですヨとしか言えぬ」の面目躍如たる凡九郎川柳があ

る。どこの句会でも、選者が読み上げると、ああ、凡九郎さんの句だなと皆頷き合った。

常任理事会でも目立たぬ存在ながら、与えられた仕事には本当に一生懸命で、一人になつても頑張り通した姿が思い出される。

あの寡黙な凡九郎さんが一度、川柳塔わかやま吟社の句会で柳話をされたことがあるが、咄々と話す凡九郎さんの言葉に、いつか皆引き入れられ、終った時には期せずして盛んな拍手が起こり、照れていた凡九郎さんの姿が思い出される。一度出席した句会には、殆ど休むことなく出席されたことも、几帳面な頑固さがうかがえると思う。

こよなく「凡九郎」の雅号を愛した凡九郎さんは、入院中に看護婦さんが「神谷さん」と呼んでも知らん顔で、ウトウトしていても「凡九郎さん」と呼ばれるとパツと目をそちらへ向けたとか。法名にも「凡」の字を入れてほしかったとは奥さんの話である。

思い出せば次々と書きたいことが出てくるが、目立たない存在ながら皆に愛された凡九郎さんにもう逢えない。凡九郎さんのご冥福を心からお祈り申し上げ、よく道を間違えた凡九郎さんの棺の中へ一句入れてお別れした。

凡九郎さん一人で道に迷いなや 柳宏子

法名 釋 淨峰

合 掌

残暑お見舞い申し上げます

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

事務局 〒572 寝屋川市春日町9-9

高田 博泉方

残暑お見舞

川 柳 大 阪

田宮義司 森松まつお 川端一步 坊農柳弘 四宮酔照 児島与呂志 玉置重人 塩満敏 西岡洛醉 山下美津留 中原比呂志 福崎しげお 芳鉄心

高須賀金太 鍋島一介 武田青道 森田太元 西尾たつお 川本利明 小野原隆一 古家群司 森村美花 山本柳昌 坪井朝子 藤田千代子

川柳塔碑基金

新正子・阿部進・井上富子
北畑金治・島重昭・滝北博史
中島志洋・中野櫛子・岩津よ
うじ・瀬戸まさよ・西村黙光
中井ゆき・井上直次・酒井輝
藤井正雄・住谷石舟・乾隆風
金村青湖・榎山隆・野村京子
宮本欣史子・木村あきら・池
内かおり・川崎ひかり・成重
放任・新川マサエ・工藤吟笑
中田純次・梅田宣司・武田帆
雀・石谷美恵子・佐治千加子
榎本露児・山内房子・岡本吉
太郎・吉村一風・黒田くに子
右記の皆様方から川柳塔
碑基金の拠出をいただきま
した。厚くお礼申し上げます。
なお、事務の手違いから
既に提出された方に重ねて
お願いした向きもあったこ
とをお詫びいたします。

第4回 島根川柳まつり

と き 9月4日(日) 午前10時開場

ところ 出雲市民会館301号室

課題と選者(各題2句)

「積む」	小池 しげお 選
「海」	林 瑞枝 選
「散歩」	恒松 町紅 選
「続く」	金築 雨学 選
「隣」	長谷川 博子 選
「ブーム」	佐々木 裕 選
「本音」	奥田 勝子 選
「交流」	景山 嘉寿子 選
「制服」	尼 れいじ 選

会 費 1000円

投句締切 8月25日(投句料 1000円)

投句先 〒693 出雲市松寄下町284

吉岡きみえ宛

祝 宴 2000円(希望者のみ)

主催 島根川柳まつり実行委員会

堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月11日(日) 午後1時開場

ところ 堺市立梅文化会館

3階第1講座室

(泉北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし「秋の気象について」

北川 忠夫氏

宿 題「橋」 蔭田 早苗 選

「埋める」 中田 たつお 選

「余白」 河内 月子 選

「コント」 海堀 酔月 選

「ホテル」 川島 諷云児 選

「回る」 木野 由紀子 選

「予報」 梶川 雄次郎 選

◎席題なし(各題2句)締切午後2時

参加賞 1000円(作品集・参加賞呈)

賞 秀句呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会

第23回 大阪川柳の会

と き 8月2日(火) 午後5時開場

ところ サンケイビル本館3F322号

(桜橋交差点西400m)

お 話 産経新聞社 塚本 修三氏

題と選者(各題2句)

「隠す」 (当日発表)

「見える」 西出 楓楽 選

「力」 梶川 雄次郎 選

「流れ」連記 磯野 いさむ 選

◎席題なし 午後6時締切

会 費 500円

欠席投句 80円切手3枚を同封、7月

30日までに下記へ

枚方市茄子作2-12-2

小川速水宛

西日本川柳大会

と き 9月4日(日) 午前9時開場

ところ 久米南中央公民館

第1部 誌上大会(各題2句)

「久」 高田 寄生木 選

「米」 清水 惣七 選

「南」 土橋 螢 選

「創」 山田 止水 選

「町」 仲川 たけし 選

投句料 1000円(発表誌呈)

各題ごと別紙、7月31日締切

投句先 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社 大会係宛

第2部 川柳大会(各題2句)

「和」 橘 高薫風 選

「空港」 去来川 巨城 選

「輪」 梶原 サナエ 選

「伸びる」 新家 完司 選

「天使」 岡田 千茶 選

「話」 寺尾 百合子 選

特別課題 1句(入選句に呈賞)

参加費 2000円(昼食・記念品・発表誌呈)

8 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月31日(日)午前10時から 夜 市 川 柳 大 会	堺市総合福祉会館 本号P95参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	5日(金)午後1時から 汗・泳ぐ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 ま つ え	6日(土) 午後1時半から 地蔵盆・泊まる・湖岸	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
西宮北口 川 柳 会	8日(月)午後1時から 網・伏せる・すらし・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
ほ たる 川 柳 同 好 会	9日(火)午後1時から 転ぶ・口癖・ゲスト	豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	10日(水)午後6時から 流す・氷・日記・登る	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 桃・戻る・脆い	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 目・うどん・ペール・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(金)午後6時から 背景・間違い・やすやす・裸婦	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	21日(日) 正 午 か ら 砂漠・費用・遊ぶ・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
京 都 塔 の 会	23日(火)午後1時から 谷・怖い・昼寝	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
高槻川柳 サークル 卯 の 花	25日(木) 正 午 か ら 終点・仏・澄む・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯文児
富 柳 会	25日(木)午後1時から 荷・裸足・味・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 訪ねる・話題・こころ・影	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日)午後1時から 狡い・意気・ノート・返す	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
岸 和 田 川 柳 会	28日(日)午後1時半から 握る・抜穴・値打・納品	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★8月になると、何と言っても私たちの世代の者にとつて忘れられないのは、戦争や軍隊にまつわる思い出である。私自身の戦争体験や出身家庭のことについては、この欄で以前に触れたことがあるが私は姉一人・兄四人・弟一人の七人きょうだいである。

★大阪商人の家庭で、誰一人として軍人を志願した者はないが、兄弟六人が一人の例外もなく、帝国陸軍に徴集された。私より13歳上の長兄は、現役を終えてから『満州事変』に従軍、次兄は現役と日中戦争、さらに太平洋戦争と三度も兵役に就いている。

★三番目の兄は、日中戦争で召集されて朝鮮にあった部隊に入隊、華北・華南と

転戦し、ニューギニアに送られた。七年間、一度も除隊することなく、敗戦の年、戦死の公報と空っぽの白木の箱が届いた。部隊が全滅しているの、詳しい状況は分からない。今年は五十回忌にあたる。

★すぐ上の兄は、現役に就いて太平洋戦争に従軍して南方方面を転戦し、戦後、抑留生活を経て帰還した。私の召集に続いて入隊した

弟は、『満州』の関東軍に配属されたが、敗戦前に内地の部隊に転属されて敗戦を迎えた。そして今、私と姉を残してすべて事故や病死でこの世にはいない。

★誌寿古希記念句集『川柳塔』が完成した。同人・誌友はじめ皆様方の協力によるものだが、掲載句数は一〇、〇二〇句、正に平成の一万句集である。ありがたいございました。(正)

ひとこと

FAXのすすめ

機械オンチが必要に迫られ、FAX(ファックス)を買ってから丁度、一年になる。どうしてもその日のうちに原稿を届けねばならないことがあり、FAXのある近所の事務所に頼んで使わせてもらったことからその威力を知った。しかし、買ったものの、どれだけ活用できるかと案じていたが、それは杞憂に終わった。FAXを持

っている所が思ったよりも多く、マスコミ、印刷所はもとよりほとんどの団体・企業が使っている。常時、発信している相手は十件ほどだが、ホット・ラインを設けたようなもので、しごく便利だ。電器メーカーのPRではないが、設置者が増えれば増えるほど、その利便は高まるので、あえてFAXの購入をすすめる次第である。

伏見 二郎

●「声聞けぬ人と過した五十年」いい出逢いでした五十回忌です「西宮市の秋元てるさんの句である。戦後四十九年。新婚一年余りの愛妻と顔を見ることもできなかつた坊やを遺し、マニラで戦死した夫を偲ぶ。

●「私だけではないの。その頃は、みんなそうだったのよ。友達の一人は式を挙げて、佐世保まで夫を送ったままの別れなの」と今は

淡々と話されるが、その当時の気持、それからの苦勞はとても言い表わすことはできないだろう。

●大岡昇平の「野火」を初めて、多くの戦争記録を読むと、戦地の、特に南方戦線の悲惨な状況は胸をさぐる。戦地の体験は二度と話したくないと多くの元兵士は言われる。その兵士を送り出したままの数多くの戦争未亡人。そして、内地でも原爆その他の空襲による犠牲者の数々。これからは、もうどんなことがあっても戦争だけはごめんである。

●新しく村山内閣が発足した。ハト派政権ということである。経済政策も政治改革も重要だが、「平和」の二字を忘れないで欲しい。

●最後に、てるさんの最近作「遅くまでまだ居てくれるしあわせよ」どうぞ幸せが続きますように。(み)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（10月号）

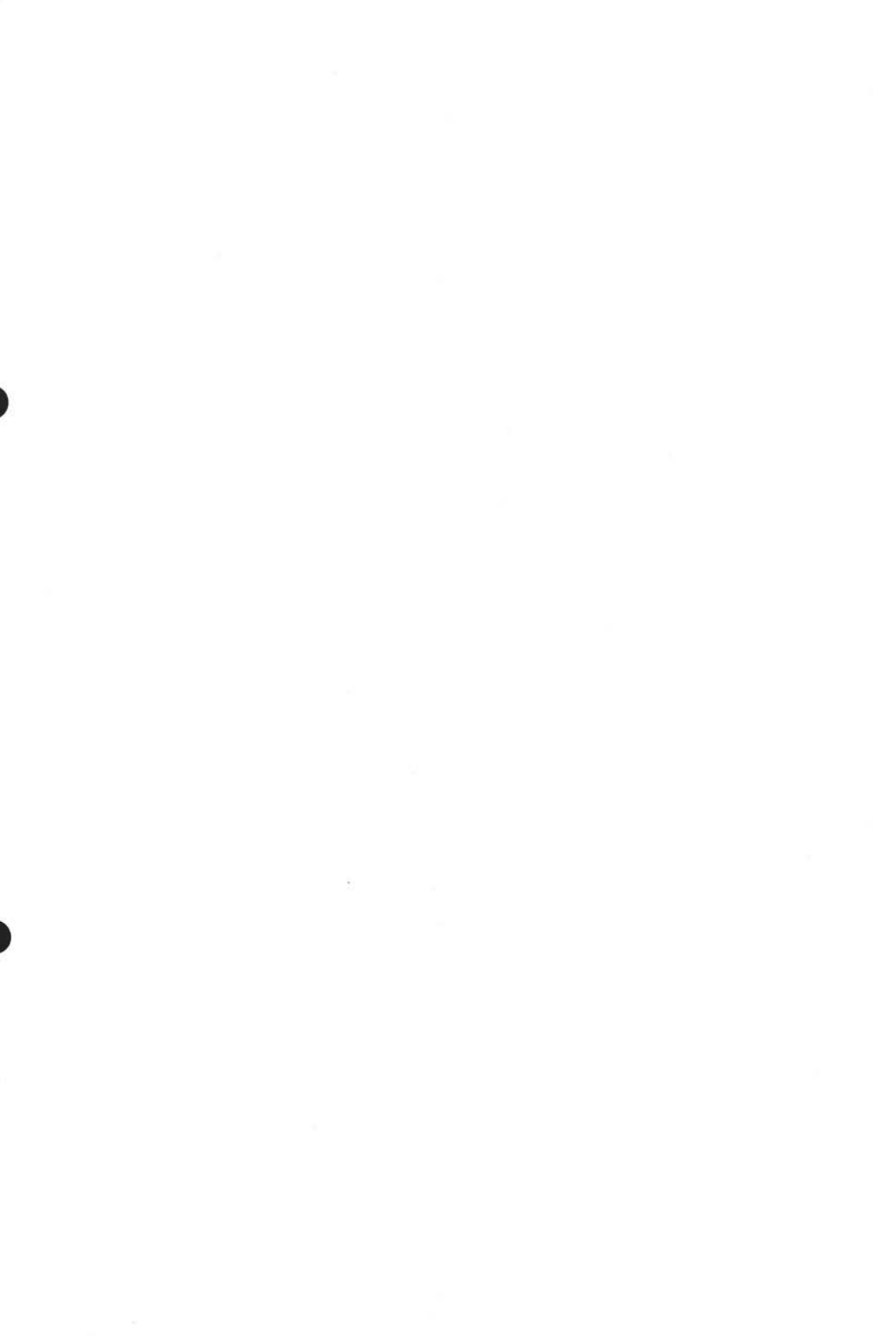
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句) 西尾 栞 選
水煙抄 (8句) 黒川 紫香 選
銀河系 (3句) 河内 天笑 選
茴香の花 (3句) 八木 千代 選
課題吟 (3句) 「古」「筒」「なるほど」 岡井やすお 選
「い」「掘」「端」 金山夕子 選
「す」「選」 堀端三男 選
初歩教室「探す」 (3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

11月号 課題吟 「息」「嘆く」「いびつ」 初歩教室 「雲」

本社 8 月 句 会

日 時 8月8日 (月) 午後5時半
会 場 メンズファウンテンセンター3階
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角
おはなし 書道家 中村 蹊 虹先生
兼 題 「蛙」 三宅 保 州 選
「リゾット」 河内 月 子 選
「にがい」 春 城 武庫坊 選
「形見」 野 村 太茂津 選
「太陽」 橋 高 薫 風 選
投 会 席 兼 会 日
句 費 題 1 題 当日発表 各題2句以内
投 句 料 400円 (80円切手5枚) 同封のこと

本社 9 月 句 会 5 日 (月)

兼 題 「潔い」「ラフ」「黄昏」「てのひら」「会話」

夜市川柳募集

第3回「鬼」 新家 完司 選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

9月の常任理事会は9月1日(木)

NHK川柳作品募集

課 題 「忘れる」 森中恵美子 選
ハガキに3句 8月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発 表 8月27日 (土) ラジオ第1放送
午前11時5分から (予定)

西日本文字放送作品募集

課 題 「流す」 森中恵美子 選
ハガキに3句 8月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定 価 六 百 円 (送料84円)

半 年 分 三 千 八 百 円 (送料共)

一 年 分 七 千 五 百 円 (同)

平 成 六 年 八 月 一 日 発 行

編 集 兼 発 行 人 西 尾 心 蔵

印 刷 所 藤 原 童 心 社

大 阪 市 阿 倍 野 区 三 明 町 二 一 〇 一 六

ウ エ ム ラ 第 2 ビ ル 202号室

発 行 所 川 柳 塔 社

電 話 (〇六六) 一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 郷土史

各種 **本** (製作専門)

- 少数の本も取り扱っています。
- ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514(代)

FAX 06-652-2928

ジェイ出版

電話 06-658-8741(代)



Pierre Parchen



Daniel Monshell



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-8018